
異境譚

おでき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異境譚

【Nコード】

N0379J

【作者名】

おでき

【あらすじ】

気を失った佐保が目覚めた場所は、彼女の知らない場所だった。

序章

皇長子、謀反の罪にて捕縛を言い渡される。

離籍によりて、皇位継承の剥奪がなされる。

天子、皇長子を誅し難く流罪とし、解纜致す。かいらん

皇長子が謫居たつきよの末、皇次子、儲君ちよくんの位の一切を譲り賜る。

間も無く天子、罹患に病臥する。桑榆正そうゆに迫らんとす。

天子、上皇と成りて、皇次子、践祚せんそす。

後、放逸なる苛政の果て、国は荒れ混乱を極める。

上皇が閨閣けいこうの臣、至尊である皇次子を弑逆しぎやくし奉る。

臣、冤枉えんおう雪ぎし皇長子を成し奉りて、践祚せんその為に頭を垂れる。

旦夕に在りし上皇、皇長子の再びの皇位継承を宣旨し、崩御。

典に基づき招聘されたし皇長子、此れを首肯し、国を平定せしめる。

第一章 一節

「……佐保。^{さほ}熱があるわね」

佐保は、自身の額に当てられた姉の手に頭^{かぶり}を振った。

「別に大丈夫、微熱だし。それよりお姉ちゃん、仕事は？ 遅れるよ」

横で溜め息を吐いた、姉である葵^{あおい}の手を額からのけた佐保は、玄関の上がり框に座って履き慣れたローファーを足元に置く。

「待つて、車で送るから」

葵のその申し出に「平気」と笑った佐保は、胸元の臙脂色のネクタイを整えながら、ローファーに足を入れると立ち上がった。

「しんどくなったら早退するから。じゃ、いつてきまーす」

学校の指定力バンを右肩に掛けると、元気な声でそう言って、横開きの玄関をカラカラと開けて出て行った。

「はいはい、いつてらっしゃい」

佐保の額に触れた時の、自身の手の平との温度差を心配しつつも、葵はヒラヒラと手を振って彼女を見送った。

それが、葵の見た最後の妹の姿だった。

佐保は母親と姉の三人暮らしだった。父親は物心つく前に他界し、親子の思い出はあまりない。母親も娘二人を抱え、子育てをしながらも仕事に明け暮れるという日々だったので、佐保の子供の頃の思い出は、みな姉と培ってきた出来事ばかりだった。今では佐保の八つ上である姉の葵も会社勤めをし、父親不在という家庭であっても家計が苦しい事はない。むしろ普通の家庭よりも潤いがあるのではないだろうかと思うくらいで、佐保自身、経済的な理由で何か特別に苦労した、という事は今までなかった。男性並みに稼ぎのいい母と、優良企業に勤めている姉。一家が路頭に迷う事なんて一度たりともなかったが、それでも佐保は今の生活に対し、満ち足りた印象

を受けなかった。

高校生である佐保にとって、傍^{はた}から見れば金銭的には余裕のある家庭で育っていたし、お小遣いに関しても足りない困った事はなかった。あまり物欲のない性格を差し引いても、十分な額が毎月保障されていたのだ。人によっては贅沢だと映るかもしれないが、しかし、佐保にとってそれは大して魅力を伴ったものではなかった。佐保が欲していたのは、昔も今も、家族の時間だった事が彼女の正直な気持ちだった。

そんな彼女にとって「体調の悪い自分」というのは、少しでも気持ちの悪いものだった。姉が心配し、母親も早く帰ってこようとしてくれる。実際それが叶わなくても、母が娘である自分を心配してくれているという事実を知るのが、何よりも嬉しかった。しかし、その感情は何だか不謹慎のような気がしたので、母と姉には黙っていたが。

そして、昨日から体調を崩している体に気付いている母と姉は、やはりというか今日は早く帰ってきてくれるらしい。その事を思うと、微熱による億劫な気持ちも消えて、心なしか気分が和らいでくる。

佐保は常より赤い自身の頬に片手を当てながら、緩慢な足取りで小さな川に架かる橋を渡り始めた。中ほどまで来ると、彼女の背後から強風が背中を何度も舐める。肩下に流れる黒髪が揺れて、頬を撫でるように巻き上がってはまた風で乱れてしまふ。カバンを肩にしっかりと掛け直した彼女は、両手で髪の毛を押さえて耳に掛けては整える。その間も、橋の上を風が渡り「ボォー」というような耳鳴りと共に、下に流れる川の水面が俄かに音を立てていた。

ここを高校への通学路に使って三年目の彼女にとって、その音は未だ耳にした事のない音だった。

水音と風音が、一緒になって耳に届く。煩^{めづ}いほど鼓膜を刺激するその音に佐保は堪らなくなり、両耳を塞ぐのも不十分なまま一目散に駆け出した。

そうして橋を渡りきる直前、彼女は不思議な感覚に襲われた。

足元がグニヤリと揺れて、立っている気がしない。まるでコンクリートが溶けてその中に沈み込むような、あるいは蟻地獄か底なし沼に足を取られるような、そんな感覚に見舞われた。それを意識するのも束の間、今度は体の自由が全く利かない事に気付き、佐保は愕然とした。体が自分のものではないような感覚に、底知れぬ恐怖が湧き上がる。その、訳の分からない恐怖に身を任せられる筈もないというのに、どんどんと頭の中で考えが追いつかなくなってきた。

何が起こっているか分からない。誰に助けを頼もうとか、叫ぼうとか、まったく何も出来ずに、足元から溶解していく感覚に恐怖しているだけだった。体の自由が利かないから震える事すら出来ない。その事は余計に、彼女に恐怖を呼び寄せた。

自分はどうなっているのか。気色の悪い感覚を味わいながら、耳鳴りと昨日からの微熱が体を支配しているのだ。ぼうつとして何も考えられなくなる。そうして間もなく意識が遠のき始めた事に、佐保はまるで恐怖から逃げられると感じたのだろうか。たちまち、彼女は安堵したとばかりにプツリと五感を手放した。

目覚めた佐保を襲ったのは、右半身に伝わる冷たい感触と、あの感覚の名残だった。どうやら何処かに寝そべっているらしく、その所為で半身がひやりと感じたのだろう。彼女が試しに上半身だけ起こしてみると、足のほうは痺れて浮遊感すら覚える有り様だった。意識を失う直前の、気味の悪い出来事に思わず眉を顰めた佐保は、しかし次の瞬間目を見開いて辺りを見渡した。

「……え？」と、か細い自身の呟きがやけに耳に障った。

佐保の眼前には、見た事のない景色が広がっていた。

「な、に……これ」

岩木に囲まれた、辺り一面が深緑の見知らぬ景色の中で彼女は目覚めたのである。

「え？」と息を吐くように再び零した戸惑い。それが輪を描いて増幅するように、木々がさわさわと揺れて、佐保を警戒させた。彼女は周囲を見回しながらゆっくりと立ち上がってみる。どうやら草むらに右半身を下にして預けるように寝ており、腰から下は草の少ない土の上に投げ出していた体^{てい}だった。

佐保は呆然としながらも、頭に土が付いていないか手で髪を撫でながら、肩へと汚れを確認する手を下ろしていく。足に付いた土を払い落とし、制服のプリーツスカートにも手をのばして叩^{たた}く。

一通り土を払い落とした彼女は、再び注意深く近辺を見渡す。

（どうしよう。どうしたらいい……ここは、何処……）

佐保は、戸惑いながらも人^{ひと}気のない鬱蒼とした木々の中、歩を進め出した。

近くから川のせせらぎが聞こえてくる。こつこつと静かで見知らぬ場所だと、音のした方へ歩きたくない。水場が近い所為か時折吹く風は冷たく、佐保は肩を震わせては足を前に踏み出す。歩きながら、彼女は考えた。

それにしても気味が悪い。自分が倒れている間に何が起きたというのか。

佐保は制服の上着の襟元を握りながら、肩を竦めて歩く。パキパキとローファーが枝を踏み鳴らす音がよく響いている。こつこつと歩く間にも、佐保の頭の中は連れ去りという言葉が浮かんで焼きついでいく。

気を失って、気付けば知らない場所にいた。これが示すのは、誘拐くらいしか思いあたらない。しかし、誘拐された拳句にその場で捨て置かれるなんて思いもしなかった事態である。

彼女がそう考えるのはいたって自然な事だった。

自分が気を失っている間に誰かが運んだにせよ、犯人がいないのではまったく事態の見当がつかない。しかし犯人が自分の傍にいればいるで、それは恐ろしい。そう思った彼女は、とにかく目を覚ました場所から離れたくなつたのだった。

今まさにこの瞬間も、何か危害を何処から加えられるのではと思うと、ゾツとして足が竦みそうになる。しかし立ち止まるのも何だか怖くて出来ず、耳を澄まして辺りに注意を配りながら、ずんずんと進む。

とにかく開けた場所へ。それが人間の無意識における行動なのか、川のせせらぎの音量が増すほど、その方角へと向かわずにはいられなかった。

第一章 二節

歩いてさほど経っていないくらいか。佐保は川辺に辿り着いていた。川よりも数段高い堤にいる彼女は、その場所から見える悠然とした眺めに息を呑んだ。

眼前には大きく広がる川。向こう岸が見えるには見えるが、川幅は四、五百メートルできくかどうか分からないくらい、大きな川だった。穏やかに流れる川に、ここから見下ろしても水が綺麗な青色である事が分かる。太陽の光に照らされて、金色の波紋がたゆたい、川面が遠くまで光っていた。

しばしその光景を眺めていた彼女はハタと気付き、左手首につけていた腕時計を胸の前まで持ってきて確認してみた。目覚めた場所から歩き始めて、ここに着くまでの所要時間は数分くらいだろうか。そう思いながら文字盤を見つめると、肝心の腕時計の秒針は一向に動いていない。何かの拍子で衝撃が加わったのかと思ったが、文字盤上のガラスもひび割れていないし、他にも傷がついているわけでもない。腕時計の指している時刻は、家を出てから十分ほど経過した所を示していた。ちょうど、橋の辺りに差し掛かっていた時間とみてよい。

不思議に思いながらも、佐保は時計の事など気にしていられなかった。そんな事よりも重要なのは、現在地の把握と身の安全の保証である。

太陽の位置から正午くらいと推測した佐保は、川に沿って下流の方へと歩き始めた。これだけ大きな川なのだから、川口に辿り着くとは思っていないが、下流なら誰かに遇あうかもしれない……そう思い堤を歩く。

しかし、いつまで経っても人の気配はしない。おまけに動物の気配もないという有様。ここに自分を連れてきた犯人すら見当たらないという状況に、首を傾げるばかりだ。いよいよもって置き去りに

されたのが濃厚となってくる。

知らない場所での不安と、帰らなくてはいけない焦燥、自身の状況と何が起こっているのか見当もつかない恐怖。色々なものが相まって、佐保は緊張状態のまま、とにかく下流の方へと歩き続けた。

西日が佐保の全身を茜色に染め上げていた。とうとう歩き疲れた彼女は堤から川岸に降りると、大きく平らな岩の上に腰を下ろした。どうにも安定感に欠いた代物だったが、他に座る分に手頃なものが見当たらなかったで、座り心地に文句も言えなかった。

赤色を反射する川に、佐保は溜め息を吐いて瞑目する。訳の分からない内に一人で見知らぬ場所に放置され、どうやって家に帰ればいいのか皆目見当がつかない。絶望的ともいえる状況に泣きそうになる。そんな自分を叱咤激励し、よろよと岩から立ち上がると、川の水を両手で掬った。

喉が渴いていたのだ。そんな事も忘れるほど茫然自失だった。

佐保は、掬った水が指の間から零れ落ちるのを見ていた。もう一度掬って、口につける。思うように飲めない。こんな簡単な事ですら満足に出来ない自分の両手に、いつそ目の前の川に顔ごと突っ込んでしまえば早いじゃないか、と考えていた。

どうにも疲れて堪らない。しんどくて堪らない。水を掬うのも面倒だ。だけど、喉が渴いて仕方がない。

夕刻のひんやりとした風が通り抜けていく。それは冷たく、しかし頬にあたると気持ちよかった。

「はあ……」

水を掬っていた両手を頬にあてがうと、思わず肩がブルツと震えた。顔が熱い。

佐保は熱を持つ臉と額に右手をあてる。冷たい右手が徐々に温もっていく事に、昨日から調子が悪く微熱だった事を思い出した。これは確実に体調が悪化している。

再び溜め息を吐いた彼女は、濡らしたハンカチを額にあてて冷ま

そうと、スカートのポケットを探った。その途端、何とはなしに朝の通学時には持っていたカバンが無い事に思い当たった。倒れる直前までは持っていた筈である。そして草の上で起きた時、周囲に自分のカバンらしきものは無かった。ここに自分を置き去りにした犯人に取り上げられたのだろうか。

（携帯、入っていたものね……）

連絡手段を絶つ為なのか知らないが、カバンの所在を思い起こした事は、彼女に更なる絶望感を突きつけたただだった。

夕日色に染まる川面を眺める佐保の髪が、風に靡いている。

しんどくて、疲れていて、今にも家のベッドに飛び込みたいのに、ここが何処か分からない。自分以外に誰もいない、見かけない。ただただ緑の自然と、川ばかりが視界に広がる。

何がどうなっているのか分からない現状に、佐保は顔を歪めて涙を零した。熱い頬に同じく熱い涙が伝って、目頭がジンジンと刺激される。揺れる視界に慌てて佐保は両目を擦った。こんな所で泣いていても無駄なだけだ。

熱っぽい体に湯を入れて奮い立たせると、彼女は川の水で顔を洗った。

「よし」

誰にともなく呟くと、心なしか前向きな気分になった気がする。

それから川辺をゆっくりと歩き出して暫くすると、その頃には陽が傾き始めてから大分経っていた。そろそろ薄暗くなり、明かりも何もない状況ではここで一晩を明かすはめになる。川岸から堤へと登り、更に木々の方へ進んで夜を明かした方が賢明かもしれない。

そう考えた佐保は、灌木が生い茂る場所に緩慢な足取りで向かった。とにかく疲れた。休みたい。

今や彼女の思考は、それに支配されていた。極度の緊張と疲労に、体の方がついていけない。腰を下ろして、横になりたい。佐保はぼうつとした頭の隅で、一体どうしてこんな事になったのかと、孤独

と不安と恐怖に沈んでいく気持ちに自嘲した。

（何とかなる。……何とかなる？ 本当に何とかなるのかな？）

相反する気持ちに、自分でも参ってしまう。全く楽しくもない状況だというのに、口元には笑みが浮かんでしまう始末だ。つらいのに、人は笑えるのだろうか。

「最悪だ……」

フツとまた笑ってしまった彼女は、適当な灌木に背を預けると深く息を吐いた。

明日、また考えればいい。大丈夫、家に帰れる。

根拠のない自信に縋る佐保は、それでも内心呟いた言葉に満足して瞳を閉じた。

第一章 三節

ごわごわと居心地の悪い背中、土に汚れた感触のする足。人生で初めての衝撃的なあの寝覚め。いつそ起きたら、あれら全部が夢だったらしいのに……。

まどろみの中でそう願っていた彼女は、自身の体の感触に眉根を寄せた。背中には痛いし、土の上に座り込んでいる感覚。それが何よりの証拠。

どうあがいても夢では済ませてくれないようだった。その感触に見舞われた佐保がしっかりと目を覚ました瞬間、しかし、状況は一変していた。

「……え？」

数歩先の灌木の茂みから、こちらを覗く目があった。琥珀色の中央に黒く細い瞳孔が射るように光っている。全身は見えないが、その体は毛に覆われ、赤褐色に近い色に黒い縞模様があるのが見えた。大きな体は、全長二メートルはあるに違いない。

佐保は口を僅かに開き、そのまま呼吸すら忘れてしまいそうになる。

こんなに間近で見たのは初めてだった。その初めてが、最後なのかもしれない、と悠長に考えてしまう。

佐保の視線の先にいる動物は、どう見ても虎にしか見えなかった。虎は一步も動かない。佐保も体が硬直して全く動けなかった。合わさった目を外すのは恐ろしい。そう思うのは、きっと本能だろう。逸らしたら、おしまい。でも逸らさなくても、おしまいなのだろう。ここで出会う最初の動物が、まさか虎だとは思ってもよらなかった。じっと見合う視線に、妙な汗が噴き出てくる。

息をするのもこらえて、佐保は恐怖した。虎はじっとこちらを見ているが、襲ってくる気配がない。だが油断は禁物だ。気を抜いた瞬間が、捕食の瞬間なのかもしれない。

佐保は体を固めさせたまま、じつと動向を窺った。息がきつくて、体が圧迫されたように動けない。まるで永遠にも近いような時間を過ごしている気分だ。しかし、虎も佐保を睨み据えたまま微動だにせず、それが何だか奇妙だった。

と思つたのも束の間、虎は身を翻すと、佐保に背中を見せて颯爽と消えていった。

「た……すかった」

緊張の糸がプツリと切れた佐保は、大きく安堵の息を吐いた。虎に殺されるかもしれないという事態から一先ず逃れる事が出来、佐保は何度も深呼吸を繰り返した。その間もどつと汗が噴き出てくる。汗が首筋を伝い、腰のあたりが蒸れたように気持ち悪い。寝ている間は汗もかかずに、かといって寒くもなく制服だけで過ごせる気温だった。しかし今かいている汗の所為で体が冷えやしないかと、心配になる。替えの服があればいいのだが、そんなものはない。

佐保は額の汗を手で拭った。危機が去ったすぐ後だというのに、悠長な事を考えている自分が冷静なのか、それとも奇妙な体験に感情がついていけずにいるのか、よく分からない。

しかし、替えがない……この事は酷く悩む事項だった。制服がないのなら当然、下着も替えはないのである。

暫くして息を整えた彼女は、立ち上がってきよろきよろと辺りを見回した。

彼女にとって、いずれこの時がくるとは分かっていたが、どうにも踏ん切りがつかない。しかし、我慢の限界でもあった。佐保は羞恥を抱きながら決意した。年頃の女性にとっては、恥ずかしくて仕方がない。だが、……尿意を催すのはどうしようもないのだ。彼女は茂みに隠れて用を足し、その足で川辺へと向かった。何かあるか分からないのもつたいないとは思つたが、下着をそのまま元に戻すのは躊躇われた。彼女は、清潔を欠く事が気持ち悪いものだという思いと、恥ずかしいという気持ちを捨てきれず、その為スカートポケットに入っていたポケットティッシュをトイレットパー代

わりとして使ってしまった。おまけに、拭いたティッシュを川に流すのは居た堪れなかったし、何だか情けない気持ちになった。

排泄ひとつでトイレと紙と水のありがたみに、ますます帰りたくなる気持ちが膨れ上がる。今帰ればきつと、そこかしこの文明の恩恵に涙を流して感謝するかもしれない。そんな気持ちを抱きながら、佐保は自身の手と顔を洗い、口を濯いだ。

川面に映る自分の顔を見やると、そこに浮かんだ自身の顔に佐保は微笑んでみた。疲れきった、酷い顔だった。思わず、ひとりごちてしまう。

「シャワーを浴びて、お風呂に浸かって、温かいご飯を食べて、柔らかいベッドとフワフワのクッションと枕にダイブして、それから

……ああ……」

風邪薬を飲まなきゃ。　　そう言葉を紡ごうとした瞬間、彼女の背後から声が聞こえた。

「そこの方、大丈夫ですか」

こんな事になってから初めて聞いた自分以外の人の言葉に、佐保は勢いよく振り向いた。彼女には救いの声にしか聞こえなかった。

佐保の振り向いた先には女が立っていた。髪を後ろで纏めているのか、肩口と頬の辺りがほっそりと見えて、華奢な印象を与えている。丁度、姉くらいの年齢だろうか。そう思った佐保は勢いよく川辺から立ち上がり、見知らぬ女に泣きつかんとするぐらいの力で駆け寄った。気付けば「助けて下さい」と叫んでいた。

この元気は一体どこにあったのだろつかというくらい体の疲れも体調の悪さも忘れて、佐保は女に泣きついた。

知らない場所で放置され、帰り方も分からない、おまけに衣類の替えはないし、トイレの心配と、空腹感も覚えている。拳句に虎に遭遇し、寿命の縮む思いもした。

自分が一体何をしたというのか。何故こんな仕打ちに遇わねばならないのか。

そう思えば思うほど、佐保は涙が止まらなかった。女は、そんな彼女の様子を不思議がる事も驚く事もなく、ただ目の前で俯いている佐保に慎重に言葉を発した。

「どうしましたか。大丈夫ですか？　こんな所で一体どうされたのですか」

その声に見上げれば、女の訝しむような視線を受ける。しかし、どこか柔らかな女の声音に佐保は落ち着きを取り戻し、口を開いた。とにかく現状を説明しない事には先に進めない。

「あの、すみません、ここは何処ですか？　私、昨日、気付いたらここにいて……、ええと倒れていたんです。でも、私ここを知らないくて、その何て言ったらいいのか……。とにかくここが何処だか分からなくて、なので帰り方も分からないし、おまけに全然、人が見当たらず……。それで、ずっと川沿いに……」

一人で歩いて、と言おうとして、ここで目覚めてから今までの自分の行動を思い出した。その所為でまた涙が出そうになる。唇を軽く噛んだ佐保は、グイと左手の掌で目元に潤む涙を拭い、話を再開した。

「一人で歩いて、ここでやっと人に会えて……。それで、あの、お聞きしたいのですが、街は何処にありますか？　警察に行きたいんです」

警察に行けば何とかなるだろう、と思つての言葉だった。未成年なのだから事情を説明すれば保護してくれるだろうし、家に連絡してくれるか、もしかしたら家まで送り届けてくれるかもしれない。その気持ちゆえ、佐保は焦った表情で女の言葉を待った。

女は困り果てた顔をしていた。何故困っているのか、佐保には意味が分からない。もしかして街が近くにないのだろうか。確かにこんな大きな川に辺りは森のような場所だと、街までは遠いのかも知れない。

しかし女は、不安そうに顔を歪める佐保の考えに気付く筈もなく、おずおずと彼女の質問の答えを口にしました。

「街……は、ここにはありません。けいさつ、というのは官憲ですね？　そうでしたら残念ですが、この辺りはそういった管轄の地区ではないのです」

意味の把握しにくい答えに佐保は何も言い返せず、女以上に困り果てた顔をした。帰れるのか、帰られないのか、それすらも導き出せない不明瞭な返答だった。

「あの、ここは**県ですよね？」

まさか県を跨ぎ、車で移動して捨て置かれたのだろうか。

自分の住んでいる県名を口にした彼女に、一瞬呆気にとられたような表情を見せた女は、次の瞬間にはハツとしたように驚き、呟いた。

「……異客^{いきやく}」

そのあまりに小さな呟きに、佐保は聞き取る事が出来ずに首を傾げた。が、途端、佐保の腕を掴んだ女の力に先程の言葉が何か重要なものであると同時に、自身の陥っている状況が只事ではないのだと覺^{おぼ}った。

「ここで話すのは止しましょう。貴女はお疲れのご様子。宜しければ我々の住まいに」

「えっ……と。……あの」

家に招いて貰えるのだというのは分かったが、赤の他人の家に上がりこむのは、さすがに躊躇われた。しかし、佐保にとってこれは願ってもない申し出であるのは確かである。屋根があり、岩や地べたに座らないで済む。おまけにもしかしたらベッドに横になれるかもしれないし、何か食事にありつけるかもしれないのだ。その気持ちは佐保の首を縦に振らせていた。

「お邪魔でなければ、あの……お願いします……すみません」

頭を下げて頼んだ佐保は、顔を上げて見た先に映る女の不憫そうな表情に自身がこれからどうなるのか不安を覚えた。

しかし、女はその表情を瞬く間に消すと、今度は温かみのある笑顔で佐保に向けた。

「ご安心を。悪いようには致しません……貴女が危害を加える者でない限り」

ただ口調だけは、慈愛に満ちた表情の欠片を纏う事もなく、やけに張り詰めていた。

第一章 四節

川辺から離れて灌木の茂みを突き進んでいく。佐保はただただ女の後ろをついて歩くだけだった。徐々に混乱も収まり涙も落ち着くと、後ろから女の姿を冷静に眺めてみた。すると、先程まで露にも思わなかった不思議な点に気付く。

それは女の衣装だ。少しばかり変わっている。だがどこか見慣れた感じもし、それが和装のつくりと古代中国の衣装に似ているからだとすぐに合点がいった。先程向かい合った時の姿を思い起こせば、確か胸元は右前のつくりで、胸下からは帯が締められていた気がする。しかし着物のように帯で一枚布を留めているわけでもなく、上下別々の布で切り換わっていた。その姿は袴の着方に見えなくもない。いや、やはり漢文の教科書に出る漢詩の作者の絵姿にそっくりな格好といった方がよい。それよりも簡素にしたもののはよく分かったが。

女の姿を凝視していると、当の本人が佐保の方へ振り向いた。

「もう少しですよ」

その言葉通り、辺り一面の木々の風景が少しずつ変わってきた。人の手入れが入っている証拠だ。周囲にはごつごつとした大きな岩が転がり、膝下以下の背丈しかない草花が生えている中を突き進んでいく。

佐保は歩いている間も、女の服装が気になって仕方がなかった。こういう格好がこの土地でのスタンダードなのだろうか。そう納得しようとしてもやはり腑に落ちず、疑問が渦巻く。果たして、普通の格好をしているとは思えない人間について行くというのは危険ではないのかと、自分の選択に不安を覚え始めていた。

しかし今更である。咲いている草花が減り、明らかに人が歩く為の小道が目の前にある。畦のような場所を歩いていくと、更に均された土が広がった。

「こちらです」

女は佐保に振り返ると、右手を案内するように持ち上げて一点を示した。彼女は女の示す先を見て、ようやく人の居住する場所を拝めた事に思わず安堵の息を吐いた。と、同時に緊張した。

どうぞ、という女の言葉に頭を下げた佐保は、その敷地に足を踏み入れる。

古びて所々に亀裂の入った漆喰のような塀。その門をくぐると、奥には塀に似た外観の壁が視界の隅々まで支配している。平屋がいくつか廊下で結ばれた、大きな屋敷のようだった。物珍しい視線を隠す事なく辺りを見渡していた佐保は、女の後ろに付き従って門からすぐの建物に案内された。

その建物の一室で彼女は待たされ、一人でその場にいた。案内してくれた女は、ここに彼女を押し込むようにして椅子に座らせると、「少しお待ちを」と言って早々に出て行ったのである。手持ち無沙汰になった彼女はグルリと部屋を眺めた。広さはおそらく自分の部屋と同じか、若干それより広めなだけだろうと見当をつけてみる。

彼女の待たされている部屋は、入り口に扉もない質素な一間だった。調度品も何もなく、あるのは机と、椅子が二脚。そのうち一脚には佐保が座っていた。さして大きくもない部屋の中央に机と椅子が設置されているだけである。

座っていると、途端入り口から声が聞こえた。思わず佐保は背筋を伸ばし、太腿の上で組んだ両手に力を入れた。

「お待たせしました」

そう言って姿を現したのは先程の女と、もう一人、その女と年の近そうな男だった。この男も、女と似たような格好をしていた。

（大きい……）

男の姿を認めた瞬間、佐保は内心ひとりごちた。まじまじと見つめたつもりはなかったのに、男は佐保の視線と言いたい事に気付いたようで破顔した。

「やはりこの身長はハタタリに使えるようだぞ」

そう言つて隣に並んだ女を見ている。いや見下ろしているという言葉が適切だろうか。肩を竦めて笑みをひとつ零した女は、手に持った盆を机に置いて、それに載せていた湯飲みを佐保の前に差し出した。

「ありがとうございます」

出されたものを覗き込めば湯気のたつた驚色の液体。これは紛れもなくお茶だろう。佐保は、すぐに湯飲みに手を出した。自身の遠慮のない手つきにも、それを「はしたない」と思う感情にも構っていられた。飲めば予想通りの渋みと味。飲んだのがまるで久しぶりのように思えた。昨日から冷たい水しか口に出来なかった彼女にとって、目の前のお茶はありがたい代物にしか見えなかったのである。喉の渇きが急速に、自身に訴えてきていたが、見ず知らずの人達の前ではさすがに遠慮なしに飲むのは恥ずかしく、半分強を飲み終えたところで湯飲みを元の位置に戻した。

佐保のその姿に、女は入り口に立っていた男に目配せをする。すると男は出て行き、間もなくあるものを抱えて戻ってきた。それは急須と食べ物のようだった。右手には急須を、左手には大きな盆を器用に掲げている。盆には雑炊のようなものが入った椀と、何かの果物を干したものが入った皿があった。それらが机に置かれると、女は佐保の前にお椀と匙を並べて向かいの椅子に座った。男は入り口付近の壁に寄りかかったまま、部屋から出て行く気配を見せない。「さて、お話を致しましょうか。貴女の事を聞かせて下さい。ですが、その前に……」

ためらいがちな風を見せた女は一息置いて、眉を下げて微笑んだ。「時間はたっぷりありますから、まずはどうぞ、召し上がって下さいな」

それはまるで、慰められているような声音だった。

佐保は、彼女自身が思ったよりも空腹をおぼえていたようだった。匙を手に取り、椀の中身を掬って食べてみればその代物は紛う事な

き雑炊の味で、気付けば彼女はゆっくりと、しかし匙を置く事もなく最後まで食べきっていた。佐保が黙々と食べている間、女も男も何も言わなかった。匙を、空になった碗に置くと、ようやく彼女は脇目も振らずに見知らぬ人前で遠慮なしに食べていた事に気付き俯いた。

「すみません……」

礼を欠いたのを恥じ入るように小声で謝った彼女に、女は首を振って優しい笑みを浮かべていた。

「昨日から何も口にされていなかったのでしょうか？ さ、遠慮せずにこちらもどうぞ」

女が勧めた干し物をおずおずと口にした佐保は、ようやく自身の腹が満たされていき、神経過敏になっていた感情も少しだけ治まったような気がした。

「……さて。まずはお名前を伺っても宜しいですか」

食器を脇によけられると、そう尋ねてきた女の言葉に佐保は肯いて名乗った。

「立木佐保です」

「たちき、さほ、さん？」

はい、と返事をする。

「何とお呼びしたらよいですか」

「え？ あ、立木で構いません」

どこか変な訊き方だ。そう思った佐保は一瞬、返答が遅れ、女の質問に不思議に思いつつもそう答えた。

「では立木さん。可能な範囲で、貴女のお聞きたい事にお答えします」

女は言った。佐保は肯いて、頭の中の考えを纏めていく。

「あの……まず、ここは何処ですか」

彼女は何よりも自分が何処にいるのか、それを尋ねたかった。しかし、返ってきた答えは地名なのかすら分からないものだった。

「亢こうけん県です」

「こうけん？」

眉を顰めた瞬間、彼女の頭の中には「亢県」という漢字が湧いて出た。何故知りもしない地名の漢字がパツと頭に浮かんだのか気味が悪くなつたが、それよりも話を進めたかった。

「それは何処ですか？ 私は**県に住んでいるんです。分かりますか？」

その質問に、女は首を振った。更に佐保はいくつか質問していくが、後ろに立っていた男が急に口を挟んだ。

「ええい、埒が明かんど、玉蘭^{たまらん}。可哀想だが、さつさと教えるのがいいんじゃないか？」

男は面倒そうに頭を掻いては唸っている。

「でも、……伍祝^{ごしゅく}」

躊躇いがちに、女は男を見ていた。

佐保は二人を見ながら、困惑した。玉蘭と呼ばれた女と伍祝と呼ばれた男。これも、どのような字を使うか尋ねていないのに漢字がまた頭の中に浮かんだのだ。

それに、男 伍祝は「可哀想だが教えろ」という風に言っていた。それは自分の事を指しているのが明らかだった。

「この子、異客だろう？ 身なりと名前……、それに言葉は通じるのに亢県……地名が分かっていないじゃないか」

伍祝が呟いた。彼は机の近くまでやってきて更に言い放つ。

「お嬢さん、ええとだな、こいつから先に事情をちよいと聞いたが……」

こいつ、と言った伍祝は玉蘭の方を見、それから佐保へと視線を滑らせた。

「起きたら、ここに……知らない場所にいた、というのは本当かい？」

「はい」

肯いた佐保は自宅の住所や、近隣地域、都市名等をいくつか挙げていく。そして昨日からの出来事を事細かに説明していった。川辺

で玉蘭に説明した時よりも随分と冷静に話す事が出来た。

やがて一通り話し終えた彼女は、黙って耳を傾けていた伍祝と玉蘭を見つめた。彼女の目の前にいた二人は互いに顔を見合わせており、やがて伍祝の方が口を開いた。

「お嬢さん。本当に、ここが何処だか分からない？ 亢県、いや、東青国は知っているかい？」

すぐさま首を振った佐保に、伍祝はゆっくりと息を吐いて続けた。「そうか。お嬢さん、酷な事を言うようで悪いが、おそらく俺が今から言うのは事実だし現実だ」

慎重に言葉を発している伍祝の様子に、佐保はじつと彼を見ながら一言も聞き漏らすまいと、次に告げられるのが何か待っていた。

しかし待つていた答えは、夢のような嘘のような、俄かには信じがたい事実だった。

「君がいたのは別の世界だ、お嬢さん。こことは違う、まったく別の世界だよ。君はここに、いや、この世界に迷い込んだようだな、

……君のいた世界から」

第一章 五節

佐保は思わず、眉を下げて口の端を緩めた。目の前の男は何の冗談を言っているのか。こちらは途方に暮れているというのに、たちが悪い。冗談も嘘も、言つてよい時と悪い時があるだろう。こちらは至つて真剣だというのに。

彼女は惘然とした口調で尋ねた。

「ええ、と。……あの、意味が……」

突然の伍祝の言葉に面食らつて呆れている佐保は、それでも彼が続けようとしている言葉に耳をよせた。

「君は異客だ。分かるかい？」

言われた瞬間に、漢字を理解した。「異客」、確かに頭の中にはそう出たのだ。先程から気味の悪い位に、知らない言葉の漢字が頭の中に湧き上がってくる。しかし、「異客」の字は分かったが意味は分からなかった。

「異客……？」

伍祝の言つたこの言葉を口にしてみる。語尾を上げた彼女に、伍祝は肯いた。

「異なる所から来るから……異客、だ。昔は、旅人りょじんやら何やらもひつくるめて言われていたが、今じゃもっぱら異世界から来る者を指している言葉だな」

「異客、……異世界」

何とはなしに呟いてみる。その言葉が実感できないのだ。その前に、事態についていけない上に、意味が分からない。伍祝の言っている事と、それが事実なのかという事と、これは夢を見ているだけなのではという考えが渦巻いて、どれが正しいのかさっぱり分からず混乱する。

あまりに非現実的な状況が続いて、その結果が「異世界に來たからである」という事らしい。目の前の二人を見れば至つて真面目な

顔をしており、冗談を言っている風でもない。それが余計に現実だと思わせられる。しかしこれが現実というのなら何と滑稽なものなのだろうか。

（おかしい。……おかしい）

思考が置いてきぼりにされ、佐保は内心そればかりをひとりごちて、膝の上に置いてある両手に目を落とした。

交わす言葉が見つからず、三人とも無言になる。しかし、誰も口を利かなくなつてどれほど経ったのか、佐保はようやく顔を上げた。（ああ、まだ確認していないじゃない）

そう思った彼女は、伍祝と玉蘭を見つめて言った。

「あの、地図はお持ちですか」

「地図？」

言葉を返す玉蘭に、隣にいた伍祝は佐保の質問にすぐさま合点がいったのか「持つてくる」と言つて部屋を出て行った。

それから大した間もなく、彼は両手に地図数枚を抱えて戻つてきた。

「確認してくれ。ただ、この地図を信用するなら、という話だがな。まあ、地図まで偽装するのは人攫いにしては手が込んでいると思うぞ、お嬢さん」

地図を机に広げながら伍祝は穏やかに笑つて言った。

「すみません」

佐保は一言謝つた。それがわざわざ地図を持つてきてくれた事への礼なのか、伍祝らの発言を疑っている事への謝罪なのか、彼女自身もよく分からずに口にしていた。

伍祝が地図の偽装とまで言ったのは、佐保の言わんとしている事を分かつた上での発言なのだろう。皮肉ともとれる返事をした伍祝だったが、彼はそのつもりで言つたわけではないのかもしれない、と佐保は彼の表情を見ながらばんやりと考えていた。

ここが異世界である、という確証はない。ただ、自分の目の前にいる二人の男女がそう言っているだけである。

それだけでは到底信じる事の出来ない話だ。人のよさそうな男女だったが、会って間もない人物にそこまで信用は置けないだろう。自分を騙すメリットは無い筈だが、ここが異世界だとは、……騙されているとしか思えなかった。もしかしたら、この二人が通学途中の自分を気絶させて知らない場所まで……と勘繰ってしまう。しかし、犯人とは思いたくなかった。それこそ会って間もないというのに、疑うのが躊躇われた。

だから地図を確認して、ここが何処なのか、本当に知っている地名すらないのか、実際に見てみたかったのである。

地図を見下ろした佐保は期待していた。しかし目の当たりにした瞬間、まず地図に描かれた地形の違いに目を瞠った。よく知った世界地図ではない。大きな四大大陸があり、その他に大小様々な陸地

おそらく島国だろうか　が点在している。

だが気にせずに目を通していく。日本の山奥だろうが地方だろうが、少しくらいは知っている地名がある筈だと期待していたからだ。なのに、どの地図を見ても一向に知っている地名に出会わない。それどころか、書かれている字が読み取れないものもあつた。しかし判読出来るものもある。それは今まで慣れ親しんだ漢字に近い為だ。読めない字は、日本で使わないような字で、佐保にはまるで地図に書かれた文字が中国語のように見えた。

（そういえば、この二人も服装がそんな雰囲気……）

もし佐保を騙す為の嘘なら、服装、地図と念の入った事である。やはり二人の言う通りここは異世界なのだろうかと信じそうになる。しかし、信じたくないのが心情だった。この地図を信用するという事は、そのまま彼らの言への信用度合いとなる。

異世界、この一言を佐保は直視しなくなかった。しかし、目の前に広がる地図は彼女を不安にさせるだけのものだった。

「あの、本当に、ここは……」

もはや何をどうしたらよいのか分からず、自信が無くなっていく

佐保は、自然と声の調子も小さくなり俯いてしまふ。

……と、その時、部屋の出入り口から声が聞こえた。

「異客とはまことですか」

確かにそう聞こえた。凜とした声だった。その声に顔を上げれば、黒髪を後ろに括り上げた少年がいた。服装はやはり伍祝や玉蘭と似ており、年は佐保と同じか少し下くらいだろうか、幼い顔とあまり遅いとは言えない体のつくりが、まず佐保の目に入った。

急に割り込んできた少年に呆然とした佐保の前に、途端、玉蘭は椅子から立ち上がった。

「そのようです」

彼女に倣うように、伍祝も部屋の入り口に立っている少年へと視線を向ける。

しかし少年は二人の視線を気にした風も無く、佐保の方を見つめて口を開いた。

「栄古殿えいこが見つけた、と。川沿いを歩く不審な者を……」

少年は佐保の全身を不躰なほど見ている。

「最近は何客も珍しくない。身なりさえ気をつければこちらの者とは大差ないでしょう。異客と騙り、わざわざここに足を運んだ……という判断をお二人はなさらないのですか？」

そう言った少年は、佐保から伍祝、玉蘭へと目を向けて不機嫌そうに息を吐いた。

反論しない二人に、少年はぼそりと言葉を吐いた。

「道理の分からぬ振りをして、その実、懷に何やら隠し持っていてもおかしくない」

そこまで言われて、佐保は少年が何を言わんとしているのか理解した。つまり、自分を招かれざる客だと言いたいのだろう。少年の不遜な態度と言葉遣いに佐保は怯んだ。少年は更に言葉を次いでいった。

「所持品を確認次第、即刻叩きだすか、閉じ込めておくのが無難だと思います」

事態が呑み込めず絶句する佐保をよそに、ようやく玉蘭の方が反応した。

「つまりは、牢にでも繋げ、と……」

まるで対峙するかのように互いに視線を逸らさない二人に、伍祝は溜め息を吐いた。

「待った。相手は女の子だぞ、もうちょっと優しく言えんのか。とにかく、お嬢さんを勝手に連れてきた事は謝る。玉蘭の一存だが、俺はその判断に異論ないからな、それに関する責があるのなら俺も一緒だ。で、問題はお嬢さんの処遇だろう？ それは今俺達がかく言うものではないだろうな。主の判断を仰げばお前も文句ない筈だ、飛泉^{ひせん}」

飛泉と呼ばれた少年は、不承不承である事が見て取れる程、苦い表情で肯いた。

第一章 六節

日が傾く気配を見せ始めた空が窓辺から覗ける頃、佐保はまた違う部屋に移動させられていた。最初に通された部屋のある平屋を出て、途中、「井戸」や「厠」の場所の説明を受けつつ建物同士を繋ぐ外の廊下を歩き、別の平屋の一室へと連れられた。飛泉なる少年が言っていた事を思い出した佐保は、自分が牢屋に放り込まれると不安だったが、それは杞憂に終わった。玉蘭に案内された一室は見れば簡素ではあるが、寝台に机、椅子といった家具があり、広さ共に一般的な部屋であった。

どうやら牢屋行きの待遇は受けずに済みそうだ、と佐保は安堵し、玉蘭に勧められるまま椅子に腰掛けた。

「立木さん、すみません。先程の者の……飛泉の発言をお気になされないように。少しばかり気が立っていたのです。何せ、ここに見知らぬ人間を上げたのが珍しくて」

玉蘭は言った。

「とにかく今日はもうお休みになって、明日ゆっくりと話の続きを致しましょう。着替えと湯桶を持って参りますので、お体をお清めになられるとよいでしょう」

その言葉が何だか上手く自分を言い包めているようで、佐保は納得しがたい気持ちを抱いた。ここが異世界なのか、それとも誘拐されて知らない場所にいるのか、判断がつかないままなのである。混乱する彼女にとって、玉蘭のその提案はまるで問題が先延ばしされただけのようだった。

しかし気怠い体を休めたいのは事実である。

「いいんですか？ ああ、食事も頂いた上にお部屋も使わせて貰って……」

佐保は遠慮げな視線で尋ねた。

「構いませんよ。私の一存でお招きましたから大した持て成しは

無理ですが、ここにいらつしやる間はご心配なさらずに」

その言葉に佐保は頭を下げる。

「ありがとうございます。お言葉に甘えて、休ませて貰います」

軽く目を閉じて首を一度だけ振った玉蘭は、そのまま部屋を出て行った。彼女が帰ってくる時には、片手でかるうじて抱えられるくらいのおおきさの桶と、何やら折り畳んだ布数枚が持ち込まれた。桶からは湯気が立っている。

玉蘭はそれらを手際よく準備し始めた。まずは部屋の中央にある机に湯桶を置き、隣に、折り重なる布を一枚々々広げる。佐保はその様子を近くで眺めた。どうやら、風呂ではなく、桶の中の湯で体を拭くようである。出来ればお風呂に浸かるかシャワーを浴びたいと思ったが、泊めて貰えるだけありがたいのである。これ以上の要求は、遠慮のない態度で無作法だろう。しかも、ここにシャワーという代物があるとも思えない。

ぼんやりとそんな事を考えながら玉蘭の支度を見ていると、彼女は一枚の布を湯桶に浸した。

「こちらでお拭き下さいませ。それから、いま着ていらつしやるものを洗いますので、これにお召し替えを」

玉蘭は湯桶から手を抜くと、机の上に置いていたものを佐保に渡した。佐保はそれを受け取った。

「着方は分かりますか？」

優しく微笑む玉蘭に、佐保は目の前でそれを広げてみせた。袂の部分はなかったが、まるで浴衣のようだ。机の上を見れば帯らしき薄目の長い布がある。

玉蘭の質問に彼女は曖昧に肯いた。

「私の知っている着方で合っているのなら……」

「では後ほど参りますね」

ニコリと笑んだ玉蘭は、そのまま部屋を出て行った。

それを見送った佐保は、腕時計を外しながら湯桶に視線を移した。桶に入れた布はじんわりと温かなお湯に触れて広がっている。それ

を手に取り少しきつく絞って桶の縁にかけると、彼女は制服を脱ぎ始めた。ハイソックス、下着も外し、布で体全体を拭いていく。それが終わると、まだ濡れていない布で肌を綺麗に拭き、抵抗があつたが着ていた下着も元に戻した。そして先程渡された浴衣らしきものの袖に腕を通し、帯を胸下で結んだ。思いのほか浴衣は暖かかったが、肩が寒さで少し震えた。体を拭いただけでは、芯まで温まらないのだろう。

自身の姿を見下ろした彼女は、それにしても不恰好だな、と苦笑した。浴衣姿に足元がローファーである。素足で履いているので、サンダルのようにつかけていただけだったが、それでも何だか可笑しかった。

続いて佐保は湯桶の隣に置いた制服を眺めた。臙脂色のネクタイに白いブラウス、それに紺地のブレザーとスカート。

ここは知らない場所なのだ……、自分の所在を証明する術のない今、目の前の着慣れた制服は佐保の心にしつとりと重い存在を残した。

椅子に座ってぼうつとしていると、扉を軽く叩く音が聞こえた。その音に「はい」と返事をする、玉蘭が扉を開けて入ってきた。「まあ。とても似合っていていいですね」

佐保を見るやその弾んだ声音に、どうやら浴衣の着方は合っているようだと分かった。玉蘭の言葉にどう答えていいのかかわからず、少しの笑みだけ浮かべた佐保に、玉蘭は近寄った。

「私、失念しておりました。これをお履き下さい」

そう言っただけで彼女は履物を差し出す。ヒールも何もないぺたりとした靴底で、足の甲の半分程を覆うくらいの飾り気のない靴だった。浴衣といえば下駄や草履の印象だった佐保だが、いま着ているものも浴衣には近いが裾が床につきそうなほど長い代物だ。履いてみれば裾から覗くのが爪先だけだったので、浴衣らしき服に靴、というのも別段おかしくは見えなかった。

靴を履き終わった佐保の隣で桶や布の整理を始めた玉蘭は、ふと、佐保が着ていた制服に目を寄越し言った。

「失礼を承知でお尋ねしますが、立木さんの世界では足を見せる衣類は普通なのですか？」

その言葉に、ああ、また「世界」か、と佐保は気持ち沈んだ。しかし顔には出さずに玉蘭に説明する。

「普通です。……私の居た所では」

玉蘭は自分の事を異世界から来た者……異客であると信じて疑わないようである。その為、佐保はあえて「私の居た所」と玉蘭へ答えた。

「そうですか」

玉蘭はさして表情を変えずに言った。

「あの、……玉蘭さん」

呼び方がよく分からなかったが、佐保は彼女を「さん」を付けて呼んでみた。玉蘭は片付ける手を止めて佐保を見る。

「制服……あ、私の服ですが、その、このまま私が持っておきます。洗って下さるっておっしゃってくださいましたけれど、明日着る分に困るので……。お気遣いだけで嬉しいです。ありがとうございます」

佐保の言葉に、思案げな顔で玉蘭は口を開いた。

「立木さん。明日、我らが主に会って頂きます。その際、申し訳ないですが、立木さんの着ていらしたものではありませんか。懸念がありますので、明日のお召し物はこちらで用意させて頂きます。こちらの世界では衣類の裾は長いものなのです。こればかりは、どうぞご理解頂きたく……」

軽く頭を下げる玉蘭に佐保は慌てた。

彼女もそうだが伍祝も言っていた、……主の判断を仰ぐ、と。明日、その主に会うという事なのだろう。そして玉蘭が服を用意するという事は、自分の制服では場に見合っていないのだろう。何せ、彼らが「主」と言うくらいなのであるから、それも致し方ないというところか。

玉蘭の言葉に佐保は頷いた。

「じゃあ、明日の服をお願いします。私の着ていたものは自分で洗いますから、洗濯する場所と洗濯に必要なものをお貸し頂けないでしょうか？」

玉蘭は湯桶や使用済みの布を纏めて持つと、佐保を見て穏やかに言った。

「では、それも明日いたしましょう。とにかく今日はお休み下さいませ」

机に制服を置いたまま、玉蘭は湯桶と布を持って部屋を出て行った。

彼女を見送った佐保は部屋の隅にある寝台に目を移し、緩慢な足取りでそこに向かうと寝台の上に寝転んだ。靴を脱ぎ落とし、それを揃える事もしないまま、布団を捲って潜り込む。

とにかく疲れている体の所為で、佐保は横になっただけで急速に眠気に誘われた。

（お母さんとお姉ちゃんが、せっかく早く帰ってくるって言うていたのに）

温かい布団に包まっている事すら忘れる直前、彼女はふとそう思い、眠りの淵に沈んでいった。

第二章 一節

眠ったのが随分早い時間帯だったからか、夜明け早々に佐保は目を覚ました。朝日が昇り始め、窓から見える庭木の輪郭が濃い緑の色を露わにし始めている。寝台から立ち上がった佐保は、昨日教えて貰った厠へ行き、その帰りに井戸にも立ち寄った。井戸の蓋を開けると、紐で吊るされた桶の中に入れて水を汲んだ。

井戸の傍の洗い場で手を洗い、顔を洗って口を濯ぐ。水は冷たくてさっぱりするには心地よいが、背筋が冷えてブルツと震えた。顔を拭くのに、浴衣の帯元に忍ばせたハンカチを取り出す。

元々スカートのポケット入っていたハンカチだった。母親の買ってきたもので、姉とお揃いのブランド物のハンカチ。母はこのブランドがお気に入りで、お揃いでプレゼントされた姉は色違いのものを使っている。

それを眺めれば感傷的な気持ちになって、何だか嫌だった。おまけに外は肌寒くていけない。すぐに帯元にハンカチを突っ込むと、佐保はその場を後にしようとした。

しかし呼び止める声が聞こえ、彼女は立ち止まった。

「立木、佐保……」

低く響きのよい声で、名を呼ばれた。振り向いた先には青年が立っていた。茶色の目と肩に流れる同色の髪があまりに綺麗で、佐保はまんじりとその姿を見つめた。

「違ったか？」

その言葉にハツとし、咄嗟に首を振る。

「玉蘭は何と呼んでいた？」

挨拶も何もなく、突飛な会話だった。佐保は青年の不思議な質問に反応が遅れたが口を開いた。

「名字です。立木、と」

「では、名が佐保か」

はい、と返事をする。

「ならば、佐保と呼ぼうか」

そう呟いた青年は、佐保に一步近づいた。

「佐保。こんな時間に一体どうしたのだ？」

会ってすぐというのにそのような言葉遣いと、名前を呼び捨てにされた事が気になった。だが今はそれに構うものでもない。青年の質問に、やはり勝手に部屋を出たのはまずかったのだろうか、と今更ながらに佐保は自身の行動に溜め息しなくなった。しかし後から何を思っても仕方ない。

青年はじつとこちらを見ている。答えなくては、と思ったが上手く言葉が継げず、彼女は黙っていた。

「偵察か？」

そう言つて低い声で笑う青年は、何処か愉快そうな表情であつたが別段、佐保を咎めている風でもない。

「家人の寝静まる時間帯は色々と物色しやすかろう」

泥棒か何かを指すような言い方に、流石に佐保はムツとした。

「私を牢屋に入れるのですか？」

そういえば昨日の少年……飛泉と玉蘭も言つていたと思ひ起こしながら、佐保は皮肉とも自嘲ともつかない声音で尋ねてみる。

しかし青年の答えは佐保の予想もつかない事だった。彼は、その必要はないと言つて首を横に振る。そして更に一步、佐保に近づいた。

「ここには虎がいるからな。邪魔になればそいつに差し出す事も出来よう」

それは佐保を餌としか見ていないような言い方だった。

「……虎？」

佐保の呟きに青年は静かに「ああ」と肯いた。彼女は途端に思い出した。灌木の茂みからこちらを覗いていたあの生き物を。この屋敷の住人は猛獣を飼つていても言うのか。

しかしきつと冗談だろう。この住人は皆、突飛な事ばかりを言

う。

佐保は首を傾げて困ったように笑みを浮かべる。青年はその様子を見てフイと後ろを向き、口を開いた。

「出てきてはどうだ？ お前も気になるのだろう？」

その声が合図のように、背後で砂利を踏み締める音と草木の擦れる音が聞こえた。

青年の声に姿を現したのは、虎だった。佐保はその姿を認めるや否や、短い悲鳴を漏らして後ずさった。

もう二度と至近距離で相見^{あいまみ}える事はないと思っていた動物と、こうしてまた出遭うとは「運が悪い」で片付くのだろうか、と佐保は自身を呪いそうになる。

虎を前に顔面蒼白する佐保をよそに、青年は虎へと語りかけた。

「……なあ栄古。お前もたまには人肉がよかるう？」

栄古。それが虎の名だろうか。しかしその名を何処かで聞いた、と佐保は思った。が、思い出せない。そんな事よりも、そう、今は名前など重要ではない。自分の命が脅かされているのだから……と思うと、佐保は足から力が抜けていきそうになった。

震える佐保に、青年は虎へと話題を振っている。いつの間にか青年は佐保の隣に立っていた。

「同じ餌では飽きがくる」

笑みを零しているのが分かるような青年の声が聞こえたが、佐保は目の前の大きな赤褐色と黒い縞模様の姿に注意をやっていて青年の顔を見られない。虎は緩やかに歩みをこちらに進めていた。

虎の目は琥珀の中の一筋が黒く、深い。佐保は目が逸らせなかった。虎と視線を合わせたまま射すくめられたようで、体も僅かに震える以外にあとは全く動かない。

その場に凍りついたようにして逃げる事も敵わない佐保はしかし次の瞬間、啞然とした。

「……その辺りにしておかなか、悪趣味め。女子^{おなご}が怯えておるでは

ないか。……可哀想に。安心するがよい、そなたは食わんぞ」

虎はちろりと青年を見た。

「……食ってかかりたい奴はここにおるのだがな」

佐保は驚愕し、呟く。何故なら。

「虎が、喋った……」

目を見開いている佐保の前で、栄古と呼ばれた虎と、その虎に捕食したいと名指しされた青年は、不遜な顔を互いに向けて対峙していた。

あまりに驚くべき事態だ。虎が、目の前で喋っているのである。佐保は目を見開いて、虎を眺めた。

青年と栄古と呼ばれた虎は、微動だにしない佐保の様子を大して気にする風もなく、互いに言葉を交わしていた。それを聞いて、また呆然とする。

虎が言葉を解し、あまつさえ会話を成立させている。これは夢なのか、それとも嘘か冗談か、そんな事は最早どうでもよい。虎が会話をするという事実は、驚天動地に等しい。

口を僅かに開いて青年と虎を見つめる。互いの距離はひとり分だったので、虎は佐保の目の前に迫っていると言つてよかった。虎は佐保に口を利いた。

「お嬢さん、我を憶えているだろう？ 昨日、川の近くの灌木で会った」

突然に話を振られて驚いたが、佐保は虎の言った事を理解しようと頭を切り替える。

虎の言う「会った」という表現が適切かさておき、佐保は肯いた。「あの時に声をかけてもよかったが、何せこれ以上怯えさせるのも哀れに思つてな、玉蘭を呼びに行ったというわけだ」

という事は、今ここにいる虎と灌木の茂みで遭遇した虎は同じ虎であったのか。野生の動物で、尚且つ獰猛にしか見えない生き物が襲い掛からなかったのは、こういう事かと合点がいく。

しかし、虎が喋るのは俄かには信じがたい。着包みだろうか、と佐保は虎をじつと見つめる。

その様子を見ていた青年が、虎の頭に手を伸ばし、撫でた。

「不可思議だろう？ 虎が喋るとは」

「本当に虎ですか……」

疑わしげな視線の中に好奇心を滲ませた佐保の声音を聞いて、青年は柔らかに笑った。

「栄古、という名の本物の虎だ。佐保」

青年は栄古を撫でていた手を止めて、佐保の片手を掴んだ。

「撫でてみるといい」

その言葉に、佐保は遠慮がちに栄古に触れた。思ったより柔らかい毛に、指先が馴染む。

佐保は幾度も幾度も撫でた。栄古の体温に、何て温かいのだろう、と胸が締めつけられそうになりながら、幾度も撫でていた。

第二章 二節

毛触りのよさに、佐保はいつの間にか表情が綻んでいた。

「気に入ったか？」

栄古にそう尋ねられ、彼女は手を引つ込めた。

「ごめんなさい、つい」

謝る佐保に栄古は頭を寄せて佐保の腕に触れた。その姿はまるで猫がじゃれつくようだった。だが猫にしては些か大きく凶暴そうな体軀をしている。それを思うと可笑しくて、佐保は笑みを零した。

「……可愛い」

呟いた彼女の言葉に栄古はピクツと体を震わせ、青年は短く笑った。栄古はすかさず青年をひと睨みし、佐保を見上げて言う。

「嬢よ、体が冷えてしまふ。部屋に戻りなさい」

途端に、彼女の体は寒さの感覚を取り戻した。肩がブルツと震え、佐保は肩を縮こまらせる。栄古の言葉に頷いた彼女は頭を下げ、この場を立ち去ろうとした。しかし、ふと疑問が湧く。

「あの、お名前……教えて頂けませんか」

佐保は青年の方へ向いた。青年は茶色の瞳を細めて言った。

「李^{りすい}慧」

「李慧さん……」

昨日から何度か経験している通り、頭の中に漢字が浮かび上がる。佐保は再び頭を下げて「部屋に戻ります」と言った。

奇妙な事だらけだ。通学途中で襲った耳鳴りや、気を失ってから気付いた時には知らない場所にいた事。そこで出会った人物は服装がおかしく、聞いた事のない言葉なのに字が頭に浮かび、拳句ここは異世界で、自分が「異客」なる者だという。そして極めつけは虎だ。虎が人と会話できる事が何よりも驚いた。

部屋に戻った佐保はここ数日で起きた変化を思い起こしながら、

机の上に置いていた自身の腕時計を持って見つめた。

秒針の止まったまま動かない時計。これを確認したのは川を目の当たりにしてからだ。あの大きな川を思い出してみる。あれだけの大きさ……冷静になって考えれば、地図に載るほど有名な筈である。大河である事を踏まえ、且つここで出会った人達の服装からして中国だろうか、と佐保は考えを巡らせてみた。そうすると長江、黄河が頭に思い浮かぶが、その通りであったとしてもどの道、佐保にはあの川の名が何であるか肯定も否定も出来ないのだ。

佐保はゆつくりと椅子に座り、目を伏せた。そして大きく息を吐いて、眉根を寄せる。

これは事実なのかと疑いつつも、思考は一点を狙い定めるように佐保を刺激する。その一点は彼女が認めたくない現実だった。彼女は溜め息と共に腕時計を握り締めては唸る。

ここは異世界なのだろうか……、そんな考えが頭をもたげ始めた。

佐保は寝間着の帯を解いた。帯は木綿の心地、浴衣らしき寝間着は綿の肌触りだろうか。感触を確かめながら彼女は今しがた玉蘭に渡された服を着始めた。

日の光が窓辺から燦燦と降り注いではいるが、些か早い時分と言える頃、玉蘭は佐保の部屋を訪れた。彼女の手には佐保の為の服が綺麗に畳まれ折り重なっていた。玉蘭は佐保の前に服を差し出し、着替えの手伝いを申し出た。が、佐保は首を振っては「自分で着る」と言い張った。玉蘭の目の前で着替えるのも、かといって彼女に着替えの間は外に出ていくとも言えず、佐保は玉蘭と距離をとってから寝巻きに手をかけた。しかし、彼女から渡された服を広げて見ればいまいち着方が分からない。先に渡された襦袢のようなものを下着の上から羽織ったはいいが、その先が見当もつかず困った。

すると玉蘭が手を貸してくれ、手際よく着せていく。彼女は佐保の着けている下着に僅かに窺い見るような視線を滲ませたが、何か言うわけでもなく、前を隠し着物のように右前に衿を合わせた。佐

保は彼女になされるがまま、着付けられていくその様子を見ていた。彼女はまるで着せ替え人形のように玉蘭に身を任せていた。最後に帯を胸下で結んだ玉蘭は「出来ましたよ」と佐保に声をかけると、彼女の全身を見て満足そうに頷いている。佐保は机の上に立てている大きな鏡を眺めた。そこには玉蘭と似たような格好の自分が映し出されており、着た事のない衣装に包まれて、彼女の心は少しばかり弾んだ。

着替えの後、玉蘭は佐保の食事を運んだ。机に並べられたのはご飯や汁物に山菜の煮付けのようなもので、まるで精進料理のようだった。

出された料理を食べる間も傍に控えたままの玉蘭に、佐保は居心地が悪かったが、丁度よい機会だったので彼女はいくつか質問を試みた。

それはこの世界の事だ。異世界であるかどうかを信じる信じない以前に、ただ興味があつた。箸を休める佐保に、玉蘭は徐に答えていった。

曰く、ここが佐保の住む世界とは違う世界であり、ここには四つの大国とその他十数の小国が存在する事。そして、四大国のその内の一つ 東青国は亢県という所がこの場所だという事。異客の出現は数年に両手の指で数えて足りるくらいであるという事、そしてその異客達は難民の扱いになる為、国の保護下に置かれる場合が多いという事。

話を聞いていく内に、佐保はだんだんと耳が遠くなるような感覚を覚えた。尋ねたのは自分からだが、玉蘭が話せば話すほど聞きたくなくなるのか、頷くだけに止めて会話を広げる気も起きなかった。「お口にありませんでしたか？」

佐保の様子に、心配そうにそう尋ねた玉蘭を見て、彼女は置いていた箸の進みを再開した。玉蘭の説明で一つ分かった事を思いながら、佐保は笑って首を振った。

なるほど、私はここでは難民か。

つまりは、どこにも行く当てのない人間なのだろう。

それを思うと食欲が急激に失せていく。咀嚼にいつもの倍ほどの時間がかかり、喉が痛くて飲み込むのがしんどくなった。それでもせつかくの食事を残すのは申し訳なく、佐保はゆっくりと平らげていった。

「昨日お約束しました、洗濯を致しましょうか」

佐保が「ご馳走様です」と口にした後、玉蘭は提案した。佐保は、こくりと肯いた。

手際がよいというのか、ある意味せつかなのか、機敏に動く玉蘭を眺めながら佐保は内心、お姉ちゃんみたいだ……と、ひとりごちた。洗濯の準備をする玉蘭が姉の葵に似ていたのだ。

佐保は、屋敷の中にある庭先で動き回る彼女の後姿を目で追っていた。玉蘭は井戸から汲んだ水をたらいに注ぎ込んでいる。

制服のブラウスとスカート、それから靴下とハンカチを胸に抱えていた佐保は玉蘭の傍まで行き、見様見真似で洗濯を始めた。本当ならばブレザーと下着も洗いたかったが、ブレザーは生地を傷めて型崩れしそうだし、下着を人前で洗うのはたとえ女性の前だろうと気恥ずかしく、また洗って乾くまで着けられないのも困るので断念した。下着ならば、夜に体を洗う時に一緒に洗えるだろうと思いい、佐保は気を取り直し、さっそく洗濯に取りかかった。

庭の井戸の近くにたらいを置き、玉蘭に倣って佐保もたらいに衣服を入れて洗濯板にこすりつけてみる。彼女にとってそれは初めての経験で、何とも不慣れな感が漂う手つきに玉蘭は苦笑しつつも、彼女に洗い方を教えた。そうこうする内に、佐保はものの数分で屈んだ体勢に疲れを感じ始めた。おまけにたらいの中に手を入れたままなので、手首の辺りまで両手が冷えてきている。

冷えた両手で衣服の含んだ水分を絞っていると、水滴が腕に一筋流れる。その流れていく様を見てみると、鳥肌が立って体が冷えて

きているのが分かった。

色々な出来事が立て続けに起きていたので気にする暇もなかったが、佐保は自分が風邪気味であつた事を思い出した。

その後、洗い終えた洗濯物を庭の物干し竿に掛けていく頃には、彼女は不快な寒気に全身を包まれていた。

第二章 三節

二人は洗濯を終えた。それから佐保に宛がわれた部屋に戻ると、玉蘭はお茶の用意を始めた。暫くすると、彼女は椅子に座っている佐保の前に淹れたてのお茶を出した。佐保は礼を言うつと、暖をとるように湯飲みを両手で抱えてお茶を飲んだ。その熱さと渋みに、ほうと息を吐いてはまた口に含む。

飲んでいる間も寒さの所為で足や指の先が温まらない。一度体の調子を意識すれば、中々どうにもならないようで、寒気が止まらなくなる。頬も熱く頭が痛くなってきた事に、佐保は目をギュツと瞑っては何度も瞬かせた。

そのまま時間は過ぎて、昼食まで特に何もする事もなく佐保は部屋でぼうつとしていた。そうして、あまり働かない頭で考える。

電気、ガス、水道の設備も見当たらないここ。洗濯の際もたらいと洗濯板を見て、彼女はさして驚かなかった。何となく、ここには無いような気がしたのだ。自分が当たり前に使っていた「物」の数々が。

佐保は机の上に伏した。頬に触れる温度がひんやりとして堪らない。目を閉じれば自身の思考が囁いてくる。認めてしまえばいい、ここが異世界だ、と。少しでも肯定の意思に傾けば、一瞬にしてその考えに包まれる。

認めようか。

その一言が彼女を楽しにした。開き直り、と言った方が適切なのかもしれない。しかし開き直ったのは、彼女がただ一点を除いて他を考えたくなかったからだ。

ここが何処なのか考えるのも面倒。自分がどうやってここに来たのか考えるのも面倒。今から考えなければいけないのは、ただ一つ

だけ。帰り方だ。これを見つけない事には、家族に会えない。友人に会えない。学校に行けない。自分の生活に戻れない。安心できない。安堵できない。……自分の世界が何一つ、取り戻せない。

佐保は机から頭を上げて、立ち上がった。

「……伍祝さん」

部屋を出て間もなく、佐保は見知った顔を見つけて声をかけた。

彼女に呼ばれた伍祝は振り向いて破顔した。

「お嬢さん、どうした」

「あの、少しだけ外に出たいのですけど、いいですか？」

佐保が尋ねると、伍祝は両脇に抱えていた薪を抱え直して思案げな顔をする。

「聞いているだろうけど、後で主に会って貰う事になってるんだよ、お嬢さん。出かけるのはいいが、誰かと一緒にないと帰りに迷わないか？」

大柄で人のよい顔つきだが、彼の頭の回転のよさは佐保にも分かる。おそらく、勝手に出て行かないように誰かを付き添わせたいのだろうと、彼女は思った。

「少し、歩きたいんです。それから、ここに来る途中で自分の持ち物を落としたようなので、それも探せたら、と思って」

落し物などない。しかし、これくらい言わないと外に出られないような気がして彼女は嘘を吐いた。

伍祝は、自分をじっと見つめている佐保を見下ろし、フツと笑みを零した。

「お嬢さん。一人で散策したいだろうけど、我慢してくれな。だから、これを置いたら俺も一緒に散策してもいいかな？」

薪を佐保に見せた伍祝はそう言つと、楽しそうな声音で佐保に告げた。有無を言わせぬ伍祝の態度に、佐保は反射的に頷いてしまった。

だが、彼女が伍祝と散策の約束を取り付けた瞬間、伍祝は片眉を

上げて「あ」と口を開いた。佐保は彼の視線の先を追って、振り返る。すると、今朝会った青年　李慧がいた。

佐保は頭を軽く下げた。

「伍祝、代わるうか」

李慧は言った。その言葉に伍祝は笑う。

「薪ですかい」

そう冗談めかして言いつつも、伍祝は佐保の方を見て「……だ、そうだ、お嬢さん」と続けた。

佐保は、李慧と栄古に朝方会った事を伍祝に話してみると、彼はニヤリと笑って言った。

「旦那を使つて、いたいけなお嬢さんを脅かすなんて何とも意地の悪い」

伍祝の言った「旦那」とは誰なのか、佐保が首を傾げると伍祝は「虎の旦那」と教えてくれた。

「栄古さん」

そう呟いた佐保に伍祝は「そうそう、栄古さん」と口元を緩めている。

そのような伍祝をよそに、李慧は佐保の方を見た。葡萄茶えびぢやに近い衣装に身を包んだ彼女を、李慧は一瞥して言った。

「行かないのか？」

「行きます」

咄嗟に答えた佐保は、もう既に歩き出した李慧の後を追いつつ、一度だけ振り返って伍祝に頭を下げた。

「いつてらっしゃい」

その声に見送られて、彼女は李慧と散策に出た。

佐保が外に出たがったのは、ひとえに帰る為である。帰り方を探るのにも何も見当がつかない。その中で一つだけ思い当たったのが目の覚めた場所に行ってみる、という方法だった。そうして彼女は

部屋を出て、伍祝に会ったのだ。佐保は屋敷から出られた事に、とりあえずホッと息を吐いたが、自身の隣に並ぶ存在に気が緩むわけもなかった。

「で……何処へ向かう？」

隣に並ぶ李慧が言った。その言葉に佐保はちらりと横を向く。しかし、頭一つ分以上は高い彼の表情を確認するも何も読み取れず、彼女は徐に口を開いた。

「川へ、行きたいのですが……」

語尾を濁すように言うと、李慧は頷いた。どうやら了承してくれたようだ、と佐保は彼に小さく頭を下げた。

木々の中を二人で並んで歩く事が、何だかそわそわして奇妙な心地を抱く。均された道に、踏み締める草や土の細かな音がよく響いた。互いに何も話さずにいると、川のせせらぎが耳に届く。佐保は気が急いているのを表すように、少しばかり歩みに力を入れた。李慧はただ黙って、彼女に付き従った。

程なくして木々の隙間から川が覗いた。雲間に隠れた太陽のせいで、川面は薄い水色を描くだけだ。ときおり風が吹いては耳に掛けている佐保の髪が揺らいでいた。

「崩れるな」

ポツリと呟かれたその声に、彼女は振り向いた。李慧を見ると、彼は答えた。

「天候だ。雨が降る」

佐保は空を見た。曇り空だ。言われてみれば確かに、雨の降るまえ特有のにおいが微かにしないでもない。

屋敷に戻ったほうがいいのかだろうか。佐保は思案したが、視線は川の上流を追ってその先を眺めていた。

彼女としては、来た道を辿りたかった。川の下流に向かって歩いてきたのだから、上流に進まなくては目の覚めた場所にも戻れない。しかし李慧も共におり、雲行きが怪しいと口にした彼の言葉もあって、天気も気がかりだ。

どうしようかと悩む佐保に、李慧は提案する。

「少ししたら戻ったほうがよい」

佐保は彼の言葉を聞きながら、川の上流からゆっくりと視界を移した。

どうやら今日は、目の覚めた場所に行ってみるのは無理なようだ。後日に改めるしかないか、と佐保は肩を落とし彼へと肯いた。

第二章 四節

二人が川から引き上げようと踵を返した直後、ぽつぽつと雨が降ってきた。額と頬に小さな粒が落ちていく。小降りの中、来た時よりも幾分速い足取りで二人は屋敷を目指した。李慧の歩幅の広さに、佐保は急ぎ足で追いかける。

「速いか」

ふと振り返った李慧に、佐保は追いついて「大丈夫です」と首を振った。彼女は喋る気も失せていた。乾燥した喉に冷たい空気を吸い込んでいると、鈍い痛みに唾すら飲み込みにくい。気がつけば喉の痛みを覚えており、早足で呼吸が乱れ、そのせいで余計に息を吸い込む時に堪らなくなった。

李慧は佐保の様子を見ながらも、「行くぞ」と短く答えた。しかし彼は先ほどよりも歩調を落とし、次第に雨脚が強くなりながらも佐保を急かす事はなかった。

草木が濡れている様を眺め、木々の合間を通り過ぎては幾度も風が吹いているのを肌で感じる。その度に佐保は身震いしそうになった。足取りもふらつき始めており、体が重くてすぐにでも横になリたかった。あまりの寒さに、佐保は暖を取るように両手を擦り合わせようとす。しかし右手を上げた瞬間、彼女は傍にあった木の枝か葉で掌を引っ搔いてしまった。

「あつ」

思わず零した言葉と共に、ピリリと痛む感触に眉を寄せる。見れば小指の下辺りを薄く傷つけたようだった。掌に出来た小さな傷を辿るように目を落としてみると、彼女の上から影が被さった。佐保が途端に顔を上げれば目の前には李慧がいる。彼は佐保の掌を見下ろし、徐に手を伸ばして彼女の右手を掴んだ。

それから一連の、李慧の仕草を彼女は見つめていた。自分の腕が持ち上げられ、彼に差し出されるような、あるいは彼の口元に自然

と吸い寄せられるような感覚の上に、天から降る滴の細やかな刺激が伴う。李慧が佐保の傷口を口に含むまで、彼女はまるで他人事のように李慧を眺めていた。

掌を覆う雨に濡れた感触に、彼の贗すものが交じる。李慧の穏やかな息遣いと温かい唇が触れて、ようやく佐保は我に返った。

「あの、ちよつと、……離して」

咄嗟に紡いだ言葉と共に、佐保は彼の手を振り解こうとした。それなのにまったく腕を払えない。彼女は李慧に腕を掴まれたまま、戸惑いと若干の嫌悪を露わにした。

「離して下さい。あの、それに……人の血を舐めるのは、不用意ですし」

困惑げな佐保の口調に、李慧は視線を寄越し、ただ一言「何故」と静かに問いかけた。その間も掌が、未だ彼の唇の感触を得ている事に、彼女はぞくりとした。

「何故つて……血液の病気があるから。感染の心配も」

「お前のいた場所は、医療の進歩した素晴らしい世界なのだ」

掌からそつと唇を離れた李慧は、佐保を見て笑んだ。感心したという風な顔に、彼女は尋ねる。

「普通は、……だったら、お前は病気か？ ではないのですか」

雨の中で吐いた言葉は、白い息と共に雨音に溶け込む。

やけに自身の鼓動が速くなっているのを佐保は自覚していた。しかしこれはきつと風邪のせいなのだ、そして今しがたの出来事のような体験が初めてだったからなのだと、思考の鈍くなった頭の片隅で彼女は思っていた。

佐保の質問に、李慧はじつと彼女を見下ろした。

「なるほど、確かに佐保の言う通り不用意かもしれぬな。お前のいた世界ではそうなのだろう」

李慧は彼女に背を向けると、再び歩き出した。佐保も後を追う。既に視界の端には屋敷が入っていた。

「しかし、この世界ではこの世界の医術しか受ける事ができない。それはつまり、ここよりも発達した医術や、その他より多くの知見を異客が持っていたとしても役に立つのか分からない、という事だ。それどころか、異客は己が世界との落差に悩まされるという。ここではこの作法しか通じないのだから、悲鳴を上げぬ前に早く慣れたほうが体にもよいだろう。この世界の医術の水準と常識に慣れないと、……佐保、お前が心身共に苦勞するのは目に見えている」

彼女は李慧の説明に首を傾げた。言われた事が理解できなかった。それでもゆつくりとその言葉の意味を咀嚼してみる。すると、尚のこと彼の発言に訳が分からなくなった。彼女がそう思うのは簡単な事だ。

慣れる必要などない筈だ、と佐保は思った。慣れるつもりはない。何故なら佐保はこの住人ではなく、ここに住むつもりもないからだ。

そう結論付けた彼女は、李慧の横に並んだ。しかし彼女の考えは、次に発した李慧の言葉にざわついた。

「受容と迎合こそ、帰れぬ者の模索する道の一步だろう」

思わず佐保は彼を見上げた。

「異客は、帰れない」

李慧はそう言った。雨音が大きくなっているというのに、彼の声は、言葉は、はっきりと彼女の耳に届いた。

佐保は知らされた言葉に愕然とした。しかし口から出るのは否定の感情だった。

「嘘」

ぽつりと言った。首を振る佐保に李慧は息を吐いて、彼女をただ見ている。

「嘘」

彼女は再び呟く。李慧は屋敷の方を視線で捉えて答えた。それは別段、咎める口調というわけでもなかった。

「これが嘘なら何の益になる、佐保。お前の言った落し物、のよう

にな」

言われた瞬間、なぜ嘘だと分かったのだろうかという思いと、李慧もそうなら、おそらく伍祝も見抜いていたのだろう、と彼女は目を瞬いた。佐保は嘘を暴かれても焦るわけでもなく、ぼんやりとした表情を浮かべていた。

そうして二人は屋敷に戻り、傘を差して門扉で待っていた玉蘭と伍祝に出迎えられた。玉蘭は物言いたげな眼差しを李慧に向けたが、雨に濡れた二人の全身に、屋敷の中に入るように促した。室内に入った佐保は、濡れそぼった髪や肩を拭くようにと渡された大きく柔らかな肌触りの布を握ったまま、ぽつりと言葉を零した。

「異客は帰れないのですか」

李慧も玉蘭も伍祝も、手を止めて彼女を見た。

「異客は、帰れないって本当ですか」

佐保は尋ねた。李慧以外の他の誰かに否定してほしかったからだ。しかし、玉蘭も伍祝も答えようとしない。それどころか玉蘭は、「体を温めるのが先決ですよ」と諭すように言うばかりだった。それを見ていた李慧は、遮るように告げた。

「帰る事など不可能だ。それこそ皇天と神仙に拜むか、天地でもひっくり返ればあるいは……だがな」

「嘘でしょう？」

誰も否定しない事に佐保は声が震えた。喉に支えたものを絞り出すように言う彼女の目は、狼狽し何かに縋る色を滲ませる。

「ねえ、嘘でしょう？ 誰か、言ってくれないんですか……」

誰かに同意してほしい。ただそれだけが、彼女に口を開かせていた。しかし彼女の望むものは何一つ返ってこず、それどころか口を閉ざされたり目を伏せられたりする。途端、彼女は胸のうちに期待が瓦解するような音を聞いた気がした。それと共に堰を切って声を上げる。

「嘘よ。これは夢よ。だって知らないもの。私、全然知らない。何でこんな所に来ているの？ 私、知らない！ ねえ、教えて！ お

願いだから、……何で？ 何で私なの？ 帰して、帰して下さい、
帰りたい！」

紅潮した頬の上に涙を滑らせた佐保は、もはや自分でも何を言っているのか分からない程に混乱していた。

第二章 五節

「嘘でも夢でもない。現実だ」

動揺する佐保と打って変わって、李慧は淡々と告げた。それが却って彼女の神経を逆撫でする。佐保はグツと堪えるように唇を噛み締めて俯いた。そうすると、酷い眩暈に頭が割れるような痛さにも襲われ、息が乱れて苦しくなる。

「李慧様、言葉をお選び下さいませ」

佐保の様子に、玉蘭は語気荒く李慧に言った。しかし今の佐保には玉蘭の言葉など耳に入っておらず、玉蘭の李慧に対する言葉遣いに彼女は気付く筈もなかった。

それよりも彼女は、体の震えが恐ろしいほど止められない事に堪らなくなる。頭では帰れない、帰れない……と、それこそ何度も渦巻いて無数の波が襲いくるような感覚を味わいながら、体は寒さで震えていた。

（寒い、寒い。喉が痛い。きつと腫れている）

こんな時に冷静に考えるのは何故なのか、佐保自身も分からないが、嗚咽を堪えているとそんな事ばかりが気にかかる。

肩を縮こまらせ、腕で小さく掻き抱いた彼女の胸は苦痛に震えていた。

ああ、帰れないのか、と。

異世界だと認めるのはあれ程いやだったのに、また、自分を言い含めているようにしか聞こえなかった彼らの言葉を信じなかったというのに 帰れない、この言葉を聞いただけで彼女は落胆の色を浮かべるだけでは済まないくらいの衝撃に囚われ、そしてそれをあつさりと信じたのだ。

佐保は、嘲りに似た薄い笑みを浮かべた。帰れない事実、これからどうしたらよいか全く見当つかない事に、家族のいる世界を失う事に、心が置き去りにされたかの如く事態が上手く飲み込めない。

彼女にとって、聞かされた事実は大きかった。帰れない、それは、今まで関係してきた世界の全てから自分が拒絶されたような気分させられた。大きな喪失の中に放り込まれた佐保は、力なく笑うしかなかった。

（なら、風邪を治す必要なんてどこにもないじゃない）

佐保は一人、胸のうちに納得する。

（だって、帰れないのだから）

このまま気を失って、消えなくなった。そう考えると途端に足元から浮遊感が湧き上がってくる。とつくのとうに体は限界だった。なのに、倒れなかったのは気を張っていたからだろ。だが今はもうその必要はない。気を張る理由がなくなったのだ。瞳は瞬きの度に滲み霞んでいく。佐保は体のなすがままに力を抜いた。

「立木さん！」

ぼやけた視界がぐらりと大きく揺れて転がる直前、自分と呼んでくれる声が聞こえた気がしたが、佐保にはもうどうでもよかった。そうして彼女は、そのまま床の上に倒れこんだ。

体中が熱に侵され、火照りは不快なほど発汗を促している。佐保は思ったように呼吸できない苦しさに眉を寄せて、浅い眠りを彷徨っていた。彼女は李慧によって寝台に運ばれていた。体を寝台に沈められた佐保は額に誰かの感触を得る。そこに張りついた髪を払われているようで、額に冷たい指先が触れていた。心地よいと思った瞬間、指先の感触は離れ、代わりに濡れた綿布が置かれた。

「お戻り下さいませ。こちらはお任せを」

佐保の額から手を離れた玉蘭は、未だ雨で服を濡らしたままの李慧に一礼した。玉蘭の後ろに立っていた彼は「頼んだ」と、僅かに嘆息して言うと、部屋を後にした。

佐保はときおり熱に浮かされたように何か言葉を呟きながら、寝込んでいた。彼女の世話をしたのは玉蘭と、もう一人、蓉秋（ようしゅう）という

名の四十過ぎの女だった。屋敷の中でも年長の蓉秋は常に忙しく動き回っており、家事全般を行っている。屋敷内の物事は彼女が切り盛りしていると言つてよかつた。玉蘭と蓉秋は、二人がかりで佐保の着替えを済ませ、その折に見た事のない下着を外すのに一苦労し、体を拭いてすぐさま替えの寝間着を着せてやつた。

それから最初の一晚の、酷い熱を乗り切り、僅かに熱が下がったことに玉蘭は胸を撫で下ろした。彼女が佐保の額の綿布を取り替えていると、佐保が僅かに唸る。ゆっくりと目を開けた彼女は自身の朦朧とした視界と意識に、身じろぎして枕から頭を上げようとした。「大丈夫ですか？」

その言葉に佐保は枕の横に視線を滑らせた。彼女の視線の先には玉蘭がいた。玉蘭に手伝つて貰いながら、佐保は上半身だけ起きあがり、深く息を吸い込んだ。鼻がつまって喉も痛く、満足に呼吸できない。

「体を起こして大丈夫ですか？」

玉蘭の言葉に佐保は肯いた。思えば彼女に「大丈夫ですか」と問われたのは何度目か。川で初めて出会つた時も、そのような言葉をかけられた気がする。不安げな玉蘭の視線に、佐保はいたたまれず目を伏せた。ここに来てから彼女によくして貰つた事を思うと、彼女の前では今にも泣きたい気持ちを隠さないといけないと感じたからだ。

倒れる前を思い起こすと、人前で泣いて当たり散らしていた事がよみがえる。そこまで記憶を巡らせると、彼女の心は羞恥の感情と共に、言いようのない悲嘆も点つた。

「ご迷惑をおかけしてすみません。ずっと看ていてくれたんですね。ありがとうございます」

その点つた燵りから目を逸らすように、佐保は努めて気丈な声で玉蘭に看病の礼を言つた。しかし、胸の奥に重い鉛が沈みこんだような佐保の気持ちは、その表情に如実に表れていた。

「立木さん」

そう勞しげな声音で呼ばれて、佐保は戸惑う。彼女はそつと瞳を閉じて、心の中で唱えた。　大丈夫、大丈夫と。

「私は大丈夫です」

声に出してみれば案外するりと零れていく。しかしニコリと笑いたかったのに、口角が上がりきらないのが自身でも分かった。

「大丈夫です」

彼女はもう一度、言い聞かせるように呟く。それは玉蘭にはなく、自分に宛てて言っていた。

そして、倒れる前に玉蘭達の前で言っていた事に対し、佐保は頭を下げた。頭を下げると自然に涙腺が緩んで上を向きなくなる。それを堪えて彼女は俯いたまま口を開いた。

「あんなに叫んでしまつてすみません。……みつともなくて、失礼で……」

彼女の続けたかった言葉　ごめんなさい、は言葉にならなかった。佐保は玉蘭に抱き寄せられて、嗚咽と共にその言葉を言うのを止めた。

それからどれくらい経つたのか、玉蘭は自身の胸元で静かに泣く佐保を思案顔で見下ろしていた。彼女は何度か口を開きかけては閉じてを繰り返し、とうとう「あの」と佐保に声をかけた。その声に佐保は顔を上げて、彼女の胸元から離れた。

「李慧様に伺いましたが、もうあの方をご存知だったのですね」

確認を取るように尋ねた玉蘭に、佐保は肯いた。そして彼女が言いたい事も何か分かった。佐保は何となく予感はしていたが、今の玉蘭の発言が決定的だった。彼女の、李慧に対する言動は他者に礼を払う域ではない。それは、ある種の関係性を佐保に知らせていた。「主……とは李慧さんの事ですね」

佐保の言葉に玉蘭は簡潔に「はい」と述べた。屋敷の主に会うと約束していた佐保にとって、玉蘭の短い返答は、なら挨拶を設ける事はしなくて済んだのか……と、ただそれだけを思わせた。もう既

に会っているのだ、彼女が言うべきは騒いだ事への謝罪とお世話への感謝だろうか。

考え込むような顔を見せた佐保に、玉蘭は慌てて言葉を付け加えた。

「李慧様は言葉が辛辣に過ぎるくらいありますが、決して貴女を傷つけたいと思って告げられた訳ではありません。そこだけは、ご理解頂けませんか？」

どうやら彼女は、佐保が李慧によい印象を持っていなと思ったらしく、主人の人となりについて触れたようだった。

「よくも悪くも誠実なお方なのです」

困ったような笑みを浮かべた玉蘭は、彼女自身と同じような表情を浮かべていた佐保の額にそっと手を当てた。

「熱は下がりましたね。なら、何か召し上がった方がよいです。軽いものをお持ちしましょうか」

提案する玉蘭に佐保は礼を言った。

「ありがとうございます。……ところで、あの、この服」

言葉を切って佐保は自身の着ている服を見下ろした。雨に濡れて倒れた後、高熱にうなされたのだ、汗をかいていたのは分かっている。しかし、いつの間に着替えさせられたのかさっぱり憶えていなかった。佐保の言葉に、玉蘭は着替えをした事と彼女を李慧がここまで運んだ事を教えて、食事の用意の為に部屋を出て行った。

第二章 六節

玉蘭から粥を受け取った彼女はそれを食べ、着替えも勧められるままに新しい寝間着に腕を通した。脱ぎながら、彼女はふと視線を自身の胸下に落とした。起きた時から気付いていたが、どうやら倒れてから服のついでに下着も脱がされたようで、そのまま素肌に寝間着を通してある事に「やはり」と目を瞬かせた。着替えを終え、意を決して玉蘭に下着について尋ねてみると、佐保の下着は洗濯されている事が分かった。そして、この世界の下着の着用についても彼女から聞かされ、佐保は絶句した。それは一昔前の、着物を着ている女性の事情と同じであつたからだ。

だから衣類の裾の長い事が当たり前で、襦袢のようなものを着て何枚か羽織るのか、と佐保は納得した。しかし、これは慣れるまで心地が悪そうだ。案の定、彼女は寝台に座って粥を食べながらも両足をぴったりと閉じたままだった。

そうして煎薬を飲み、微熱の所為で気怠い体で寝たり起きたりを頻繁に繰り返す佐保のもとに、夕刻、彼女に対して刺々しい口を利く人物が現れた。

「もう主と会つたらしいな、お前」

部屋の扉の勢いよく開いた音と共に、そう声がした。佐保は驚いて振り向いた。その憎らしげな声の主は飛泉だった。幼さを残した少年の顔には険がある。しかし彼は一人ではなく、その隣にはもう一つ、彼とそっくりな顔立ちの少年がいた。瓜二つという言葉を思いながら、片や険しい顔つき、片や苦笑いの二人組みに佐保はたじろいだ。すると、飛泉ではない方の少年が口を開いた。

「でも不可抗力じゃない」

そう小声で指摘した少年に、飛泉は鼻をならした。

「当たり前だ、それ以外なら許さない。身元の不明な人間を、検分する前に主に突き出せると思うか」

不平不満だと言わんばかりの表情をしている飛泉は我が物顔で、寝台に座ったまま少年達を注視している佐保に近づいた。数歩遅れてその後を追った飛泉にそっくりの少年は、「お邪魔します」と言っ
て肩を竦めている。

「ねえ、飛泉。女性の部屋に問答無用で入る輩も、どうかと思うけど」

その言葉に、むうと口を尖らせた飛泉は煩わしそうな目で、佐保と後ろに佇む少年を見比べた。佐保は訳が分からず、ただ二人のやり取りを傍観している。すると、飛泉の横を通り抜けた少年は、彼女の前で一礼した。

「ご無礼致しました。お初にお目にかかります。博朴はくぼくと申します。

どうぞそのままお呼び下さい」

そう言っ
て微笑んだ博朴は、チラと振り返ると、また佐保に視線を戻して言葉を続ける。

「既にご存知かと思いますが、あれは、飛泉といひます」

あれ、という言葉が存外にからかうような含みを持った言い方に、当の飛泉は機嫌が悪くなった。しかし頓着せず、博朴は笑っている。「あの通り、名に高飛車の“飛”を使うだけあつて流石とか何と言つか……まったく仕方がないほど字面に似合つた、双子の兄です」

すらすらと流れる口調で揶揄する博朴に、飛泉は顔を顰めて腕を組んだ。

「双子……」

呟いた佐保に博朴は「残念な事に」と笑顔で肯いている。まるで火に油を注ぐような応酬だ。佐保は交互に目の前の双子を見比べた。見た目はそっくりなようだが、中身はそうでもなさそうだ。饒舌で気さくな様が窺える博朴に、初対面からして辛辣な言葉を投げつけていた飛泉。佐保にしてみればよい印象を持たなかった彼だが、飛泉については他にもあつた。態度は変わっていないが、口調が丸切り違つていた。

双子を前に困惑しきりの佐保に飛泉が口を開いた。

「おい。李慧様に礼は言ったのか」

しかしすかさず合いの手が入るようだ。

「口の悪いところ、控えたら？」

「お前は性格が悪い」

弟へと嫌味を返した飛泉は、佐保を見て言った。

「あの方の、李慧様のご温情だ。……立木佐保、お前をここに置いて下さるそつだ」

佐保は驚きのまま、何と返事すべきか分からず、ただ目の前の同じ顔をした二人を眺めていた。

まるで嵐のような二人だった。部屋を去った飛泉と博朴の後姿を見送り、佐保は寢台に伏した。そして先程言われた事をゆっくりと思いついていった。

飛泉に言われた言葉を上手く飲み込めず口を開けないでいる佐保に、博朴は丁寧に説明した。それが彼の気遣いである事は分かったが、佐保にとってはいくら噛み砕いて言われても、そうそう頷けるわけがなかった。要は、ここで新しい生活を始める、という宣告であつた。

二人の去った部屋は落日の為しんとなり、全体を仄暗い色に染め上げている。

寢台に沈み込んでいる佐保は、寝返りをうつては呻くような深い息を漏らす。彼女の胸はざわつき、今にも膨れて、はち切れそうな何かを抱えていた。しかし彼女自身、その正体が分からない。ただどうしようもない焦燥が沸き起こっては、行き場のないそれらは佐保の心の中に沈んで別の形を取っていく。あえてそれに名をつけるのなら、孤独感というのか、寂寥感というのか。だが佐保は頭を振って、すぐさまそれを否定した。そして、胸のうちに沸き起こるものをやり過ごそうとする。しかし、どんな言葉も当てはまらないその不快な感情は、いつの間にか彼女に自身の唇を噛み締めさせてい

た。

帰るといふ選択肢は選べないのだろうか。帰り方は本当に無いのだろうか。

そう考えずにはいられない佐保にとって、何かに当たり散らしたり、まして何にも縋りついたり出来ないこの状況は、より一層の苦痛を伴わせた。そうして佐保は涙を零しては拭き、それを幾度も繰り返すうちに泣く事を止めた。心のままに泣けば余計に惨めな気分になるのが分かったからだ。彼女は明らかに何かを持て余したまま、その日の夜を越した。

佐保は体の節々に走る鈍痛に眉を顰めた。肩は寒いのに足は熱く汗の所為でべったりと背中中に張り付く寝間着が気持ち悪い。中々寝付く事の出来なかった彼女は、幾度も寝返りを打っては無理やりに瞼を下ろし、そうして気付けば朝を迎えていた。

窓から入る日の光と共に鳥の鳴き声も聞こえ、扉を隔てた向こう側から人の足音も聞こえてくる。電気がないからなのだろうか、この住人は朝が早い。そう思っていると、扉を叩く軽やかな音がした。寝台から体を起き上げて「はい」と彼女が返事をする、玉蘭と蓉秋が姿を現した。

「佐保ちゃん、おはよう」

そう言っただけで声をかけたのは蓉秋の方だった。佐保にとって彼女の第一印象は親しみやすい人、というものだった。言葉遣いも砕けており、看病していた間にいつしか「佐保ちゃん」と呼ばれるようになった。その所為か玉蘭も佐保の呼び方を「立木さん」から「佐保さん」に改めていた。

「おはようございます」

挨拶した佐保に、玉蘭は尋ねた。

「よく眠れました？」

「わりと」

笑みとも取れない笑みを曖昧に浮かべ、佐保は寝台から足を下ろ

した。

「まだ寝ていてもいいんだけど。ちょっと様子はどうかと思って覗いたただだから、気にしないで」

蓉秋の言葉に佐保は問題ないというように首を振って、彼女らのもとに近づいた。

「何か食べてから体を拭いて着替えて、それからもうひと寝入りするといいいよ」

言ったそばから蓉秋は食事と薬を持ってくると言って出て行き、膳を運んできた彼女と入れ代わるように今度は玉蘭が部屋を出、湯気の立った桶と新しい寝間着を持って帰ってきた。

佐保は、二人の厚意にありがたく甘えた。食後に煎薬を飲むと、酷い寝汗をかいていた寝間着を脱いで、お湯で濡らした布巾を使い、体を拭いた。

寝台の近くでこそそこそとそれを行う彼女に、蓉秋は「女しかないよ」と笑ったが、それでも佐保には抵抗があった。玉蘭は膳を下げて部屋を出て行ったが、蓉秋のほうは佐保と共にいた。

「寝間着は着られるようだね」

用意された寝間着に身を包んだ佐保に、蓉秋はそう声をかけた。

「些細な事ひとつでも、分からなかったら聞きなさい」

振り向いた佐保は頷き、礼を言った。すると蓉秋は、先程まで佐保が着ていた寝間着を彼女から取り上げた。

「まずは体がよくなったら服の着方だね。ほら、もう少し寝ていなさいな」

蓉秋の言葉を聞きながら、佐保は寂しさを感じた。分からなければ聞く事、そう言ったのは、帰れない佐保をこうしてここに迎える準備をしてくれる為だ。

保護を求める気持ちは、身の安全を確保したいという人間の最低限の欲求だ。それが満たされるといふのは喜ぶべき事なのだろう。だが、彼女はその幸運に素直な感謝を示せなかった。行く当てのない自分を助けてくれた事ありがたいが、佐保は蓉秋の言葉によっ

て現実を目の当たりにさせられ、胸が押し潰されそうになった。

第三章 一節

窓から眺める外の景色は雨に煙っていた。雨音は心音のように一定の速さを刻んで耳に心地よいのに、そう感じてしまうのを佐保は何処か疎ましく思った。彼女は寢台に潜り込んだまま、ひっそりと時間が過ぎていくのを待っている。彼女が臥せてから数日、雨が降ったのは衝撃的な事実を知らされた日以来だった。その所為か輪をかけて憂鬱な気持ちになり、窓を見るのも極力避けて枕に埋もれるように頭を預けて横になっていた。

昼間はさほど苦しくもないが、夕方には熱がぶり返し、寝付けない日々の続く佐保にとって、何も出来ない状態はただ物思いに部屋で過ごすだけだ。そのため玉蘭が、彼女の気鬱を紛らわそうと話し相手を先程まで務めていた。

しかし取り留めもない話は上手くいかず、会話の主たる内容はこちらの世界について説明をするものばかりになる。佐保自身の話を聞こうと思えば彼女の郷愁を誘い、こちらの世界の話をすれば彼女が納得しきれない事実を早急に押し付けているようにしか思えず、玉蘭は話題に窮した。だが、佐保がこの世界について話してほしいと頼むので、玉蘭は地図や数冊の書物を見せて話を始めたのである。

そうして少しずつ佐保は自分の置かれている状況を知っていった。四つの大陸それぞれを列強が治め、そのほか十数の国が独立国あるいは四国の保護国として存在しているという。四国は東青国、北玄国、西白国、南朱国からなり、玉蘭は、今いるここが東青国だと佐保に説明した。

佐保は、机の上に広げた書物や地図に向かって玉蘭を寢台から眺めながら、今しがた彼女から聞いた馴染みのない言葉を何度も頭の中で反芻した。そして、告げられた国名の字面が浮かぶ事に、やはりという思いを抱いた。それを口にしてみる。

「言葉が浮かんでくるんです、頭の中に。玉蘭さんの名前も、国名も……合っているかは判りませんが、字が浮かびます。これって変ですよね」

手持ち無沙汰を表すように持ち込んだ書物を捲っていた玉蘭は、その手を止めると佐保へと向き直った。

「言葉がお分かりになるのでしょうか？」

玉蘭の質問に佐保は肯定した。

出会ってから会話において、分からない言葉はあれど意味を聞けば問題なく理解できた。互いに会話をしているのだから、同じ言語を使用しているのは自明である筈だった。しかし佐保は玉蘭の発言で認識の違いを正された。佐保にとっては玉蘭らの言葉は全て日本語に聞こえていたし、自分自身もそのつもりだった。しかし、玉蘭が言うには発している言葉は互いに日本語ではなく、佐保がこちらの世界の言語を使っているのだと告げたのである。

「何故、言葉が通じるのですか」

佐保は首を傾げた。彼女にはその仕組みがまったく解せないものだっただった。

「天地開闢てんちかいびやくを記した書物には、この世界をおつくりになられた皇天と神仙の力によって、異世界からこの地へと引き付けられる者があるとされています」

「開闢？」

開闢、という字は今回も例外なく彼女の頭の中に浮かんだが、その意味が分からず尋ねてみる。

「世界の始まりの事です」

玉蘭は答えた。

「待つて下さい、神様とか仙人とか、そんな……現実的じゃないわ」頭を振って困惑の表情を浮かべる佐保の前で、玉蘭はその存在を認めた。そして、しっかりとした口調で言い切る。

「異客が現れるのは、万物掌握に敵う力を持つ存在、すなわち人知の及ばざる者……人にあらざる者だけがその事態を起こす事が出来

ましょう」

「神様がいて、その神様が異世界から人間を……という事ですか？」
佐保は提示された情報に内心唸りながらも、頭の中を整理しながらゆっくりと確かめるように呟いた。

「概ね、その解釈で構いません」

そう言ってまっすぐに見つめる玉蘭から、佐保は視線を逸らして下を向いた。一種の神隠しのようなものだろうか。そう考えていると、玉蘭の声が再び聞こえた。

「貴女がこちらの言葉を解すのは、その所為だと思われます。つまり言葉の理解も皇天と神仙の、世を超越せしめし力の一環。もしそうなら、当然知るべき発音方法やその単語はどのような字、文法を使うか覚えていなければ困難になりましょう。おそらく、佐保さんが話せるというのと文字が浮かぶといった類いは、そこに起因します」

玉蘭の説明に佐保は考え込むように俯いた。

佐保にとっては今の今まで、彼らとの会話は日本語で行っているつもりだった。しかし、知らぬまま別の言語を操っていたのだ、それには多少なりの気味悪さを覚えたが、言葉のやり取りが出来るというのは意思疎通の苦労をせずに済むというのもある。どうやらその辺りの心配はしなくて済みそうであるが、いつ話せなくなるともしれないので、読み書き等の習得は必要だろうと彼女は黙考した。

冷静に順応していく方法を考える自身に彼女は可笑しく思う。まるで滑稽だ、と唇を噛み締めたまま頬を僅かに上げた。その歪な笑みを残したまま、佐保は口を開いた。

「どうして、神様は異世界に人を引っ張り込むのですか」

異客はなぜ発生するのか。目的も理由も、当事者であるのに教えられない。勝手に異世界へと連れ去られた理不尽さに、佐保は沈んだ口調で玉蘭に尋ねる。だが玉蘭は伏し目がちに、首をゆっくり横へと何度か振っただけだった。その無言のこたえに、佐保は何の返答もせず窓辺へと視線をずらした。曇天の空はその色を濃くしてい

った。

そうして、しばらく経ち玉蘭が退出すると、雨が降り始め今に至った。一向に止む気配のない雨の音を聞けば、先程した玉蘭との話がよみがえって胸のうちに滑り込んでくる。

玉蘭は、さも当然のように非科学的な存在で世界の成り立ちを説いていた。神様や仙人が登場する話だ。

佐保は考え込んだ。古事記や日本書紀に書かれている世界の成り立ちを妄信しているようなものだろうか。そして、その神様だか仙人だかが自分をここに連れこんだのだという。超能力のような力を信じ、神という存在を信じ、天の力を信じているらしいこの世界の人々。

この世界の人間にではない、この世界の考え方でもない、自身の「今まで」を奪われた事と帰る手立てのない悔しさを忌々しく思った。俄かには信じ難い存在が、意味の分からない力で自分をここへと攫ってきた。その事実には佐保は弱った声で呻く。

「馬鹿馬鹿しい」

超越的な力によって連れてこられたというのが事実なら、何処にこの複雑な気持ち吐露し晴らせばいいのだろうか。

「馬鹿じゃないの」

誰を責めれば、何にあたれば満たされるのか分からず、佐保は再び苦々しげに呟くと布団をギュツと握り締めた。

夕食も終え、用意された桶と湯で体を丹念に拭いた佐保は、さきほど飲んだ薬の効きだした体を寝台に横たえた。そこから窓を見やると雨がいつの間にか上がっており、濃い藍の空に月が輝いている。雨上がりの空気が揺曳ようえいしているのか、ひんやりとした空気に夜のもの悲しさを孕んでいる。月光のせいで明るい晩は、佐保を感傷的な気分にした。

布団を胸まで上げて自身の腹の上に差す月明かりを眺めていると、自然と言葉が漏れる。

「牀前月光を見る……」

月を見て思い浮かんだのが、これであつた。きつと故郷への憧憬は、こんな気持ちなのだろうか、と続きを呟く。

受験勉強で、学校のテストで、何度も詰んでいた勉強の結果がこんな場所で登場してきた事に、佐保は余計と感傷に浸りそうだった。

憎いほど皓々（こうこう）と窓に丸い月の光が差し込む中、彼女は観念したように目を閉じた。

その日、佐保は夢を見た。こちらの世界にきて初めて、あちらの世界で得てきた温かな記憶を眠りの中で再現させていた。枕元には、腕時計とハンカチを置いて眠った。彼女の夢には、取り戻せない思い出ばかりがいたずらによみがえっていた。

第三章 二節

夜と朝の境に棚引く霧が、明るみ始めた視界を白く薄く染め上げる。鳥の鳴き声が微かに聞こえる中、早い時間帯から一日が始まる。この屋敷内で佐保は朝食をとっていた。寝込んでいた時の部屋がそのまま彼女の自室となり、毎朝そこに運ばれる食事は彼女の隣室に部屋を構える玉蘭、蓉秋のどちらかが佐保の分を届けている。

夜明けと共に起きるという生活に慣れない佐保に、玉蘭らは朝食の手伝いを頼まなかった。家事については日中の炊事、洗濯を、そして何より、これから必要な知識を先に教え込んでいく事で彼女らの意見が一致したからである。

そうして屋敷に迎えられて七日もする頃には、佐保は体調を持ち直していた。そのため徐々にはあるが、玉蘭と蓉秋によってこちらの生活様式を教わる事になったのである。

厳しいわけでもない教え方は佐保にはありがたかった。しかし、自分自身の気持ちをあれこれと考える前に、ありとあらゆる知識を新たに詰め込んでいく過程がこれから待っているというものは、佐保を戸惑わせた。あちらの生活模様や常識が通じない中、今まで培った彼女の観念とこちらで新たに学習していく作業の差は、彼女にとって堪らないほど歯痒い。

現に、教えられてもそうそう覚えられない事、上手にこなせない事が既に発生している状況だ。彼女はそのような、日常生活において自分が思ったように出来ない作業に焦っては、いま自分が置かれている現実を思い起こした。

こんなに悩んでいるのは異客になった所為だ、と。

そうすると一番に母と姉の顔が浮かぶ。こちらに来てからもう数え切れないほど頭の中で家族や友人、家や学校の姿が現れていた。

落ち込む様子の佐保を気遣って、玉蘭も蓉秋も無理強いせず、「ゆっくりでいい」と彼女を見守っている。だがその慰めも惨めにし

か感じず、佐保はますます意気消沈を繰り返していた。

こんな筈じゃなかった、何でこんな所にいるんだろう……佐保は躡く度にその思いに駆られる。今や完全な回復の兆しを見せている彼女の体は、普通に物事をこなせるほどになっている。本調子に近いと、しんどいから出来ないのだという言い訳は見苦しい。郷愁感にいじけて生活力を身につけず厄介な居候者になるのも、危険な事だと分かっている。厄介者の末路は一つだ。いつか、追い出されかねない。それを思うと、こっそりと吐く溜め息の数は日に日に増えていった。

窓の外では遠くに見える木々がさわさわと揺れている。佐保は、心地よい風を取り込もうと椅子から立ち上がり、窓辺に寄った。すると、大きな体躯が彼女の目に映った。

「栄古さん」

窓を開けて呼ぶと、そこから少し先の場所にいた栄古は近寄ってきた。

「嬢。体の具合は如何いかがかな」

柔らかな声音に佐保は窓越しに手を伸ばし、栄古の頭を思わず撫でた。栄古はちらりと佐保の行為を見たが、気に留めず大人しく撫でられている。

「よくなりました、お蔭様で。色々ありがとうございます」

撫でていた手を止めた佐保は、そう言って笑んだ。彼女の返答に満足げな栄古は、声色を変えて尋ねた。

「それはそうと。短慮あやうな言い草しおった彼奴とは、あれからどうなった？」

何処でどうして漏れたのか知らないが、栄古が聞きたいのは李慧についてだと彼女はすぐに分かった。李慧が単刀直入に佐保へと告げた事実は、あの場にいなかった栄古にも知れていたようだ。

「何度かお見かけしたり、お会いしたり……」

迷うように一言々々を紡ぐ彼女の顔を栄古はじつと見ていた。佐

保は考え込むような仕草を見せて、数日前の記憶を引き出していた。熱が下がって歩き回るのも随分と楽になってから、佐保は廊下でばったりと彼に会っていた。思わず気まずさを顔に出してしまった彼女は、咄嗟にその表情を解いたが、遅かったようだった。それをごまかす為に佐保は口を開いたが、何かを言う前に李慧のほうから早く言葉を紡いだ。

「悪かった。性急な物言いは適切でなかった」

開口一番、彼は啞然とする佐保を前に目を逸らさず言った。訳が分からぬまま佐保は首を振って、少しばかり逡巡すると話を切り出した。

「あの。運んでもらって、ありがとうございました」

視線を合わせないのに丁度よいとばかりに、佐保は頭を下げて礼を言った。まっすぐ見られると何だか気恥ずかしく、そのため中々、視線を上げるのに彼女は苦労した。

しかしかたや謝罪、かたや感謝の上にちぐはぐな会話だ、それぞれに相手の出方を待っていた二人は、そのまま僅かな無言の時が過ぎるとようやく互いの反応に苦笑した。

「私、重かったと思います。ごめんなさい。あ、あとそれから……ありがとうございます。厚かましいですが、暫くこちらでお世話になります。宜しく願います」

佐保にそう言われてから、李慧は「いや」と首を一度振って、彼女の右手に視線を移した。

「消えたか？」

そう零した彼の言葉に「え？」と彼女は聞き返した。
「傷だ」

その短い言葉に頷いた佐保は右手を少し持ち上げると、掌を彼に示した。

「すっかり」

そう言って笑顔を見せた佐保に、李慧は目を細めた。それから数回の言葉を交わすとそこで二人は別れた。

李替と別れた後、佐保はホツと息を吐いた。これ以上、関係を悪化させるのも、軋轢を生むのも拒んでいた佐保にとっては、普通に接する事が出来た為に安堵していたのだ。帰れないからといって李替に文句をぶつけても仕方がない。彼を責めるのはお門違いだと理解している。少しでもよい関係を築く事が何より重要なのだ。何故なら、よそ者の自分はこの屋敷の主人の厚意に甘えてここにいられるのだから。

その立場を再び思い起こした彼女は、考えるのを止めて目の前にいる栄古をしつかりと見た。そしてさきほど栄古が自分に尋ねてきた質問の答えを口にした。

「普通に……、よくして下さいます」

当たり障りのない言葉を選んだ彼女に、栄古は琥珀の双眸を緩やかに閉じては開く。やがて、「そうか」と笑みを含んだような声で言った。その声音を聞いていると、心なしか髭が揺れて口元に笑みを作っているように見える。まるで、人間に似た顔の動きに、佐保は目の前の虎をじっと観察して思った事を口にした。

「不思議」

「ふむ？」

「凄く、不思議です」

栄古の顔をまじまじと見つめて言うと、彼女は尋ねられた。

「嬢は不思議な事は嫌いか？」

「分かりません。でも、驚く事ばかりは、正直……」

佐保は言いよどみ、苦笑した。「正直」の後に用意していた言葉は聞かされた側にとつて気持ちのよいものにはならない。彼女は、不思議を体現した存在を前にして「疲れる」とは言えなかった。

口を結んだ佐保に栄古は体軀を僅かに動かした。

「嬢。最初の取り組みが肝心だ。いくら積み立てていっても土台がしっかりせねば、築いたものは脆くも崩れ落ちる」

突然の言葉に佐保は困惑した。意味も分からず聞いていると、栄古は真つ直ぐに佐保を見つめている。

「嬢は、思いもよらぬ所に土台を作らねばならなくなったわけだ」
真意をはかりかねる発言だったが、おそらくはこの世界で新たに
学んでいく事を指し示したふうに聞こえた佐保は、頷くしかなかった。

吹いていた筈の風はいつの間にか凪いでいる。ぽつりぽつりと幾
度か言葉を交わすと、暫くして栄古は窓辺から離れて何処かに行っ
てしまった。

「変なの」

去っていく虎の後姿を眺めながら、佐保は小さな声で呟いた。

第三章 三節

「筆すらまともに持てぬとは嘆かわしいな、立木佐保」

机に向かつて文字の練習をしていた佐保の上から声が落ちてきた。彼女の右隣には飛泉が立っており、しきりに佐保の手元を覗いては小言を口に出している。

「練習中です」

佐保は言い返した。飛泉の発言のおかげで小筆を持つ右手に思わず余分な力を込めた彼女は、紙の上の文字をあらぬ方向に滑らせる。そうして出来た、墨が滲む文字の乱れに飛泉は即座に反応して、再び口を開いた。

「全く、見苦しい文字だ」

毒々しく言い放った彼に次いで、今度は佐保の左側から声が飛んでくる。

「僕は実の兄の言葉遣いの方が嘆かわしくて、聞き苦しいよ……全く」

彼女は、声のした方へと振り向く。すると、軽やかな声音とそっくりの表情を浮かべていた博朴は「そう思うでしょう？」と、同意を求めた。困り顔のまま曖昧に首を傾げて笑みを張り付かせた佐保に、博朴は彼女よりも分かりやすく笑みを作った。

「佐保さんは優しいですね。ついでに言うと飛泉は易しいね、色々」と

そう言った彼の笑顔はますます意地の悪いものとなった。すると右側からは悪態が聞こえてくる。佐保は、顔を歪めて仏頂面になっている飛泉を盗み見た。だが博朴は気に留めず、さっさと話を変えていく。

「佐保さん。玉蘭殿からご自分の姓名の書き方を教えて貰ったそうですね。是非、成果を拝見したいのですが」

笑みを湛えるその顔に、佐保は頷くと右手に構えていた小筆を硯けん

海に浸した。墨汁を含んだ筆の先を、数度ほど硯の小高い場所で払い紙の上に滑らせる。両隣からの視線を感じつつ、佐保は自分の名前を書き出した。

今まで数え切れないほど書いてきた「立木佐保」とは少しばかり字の成り立ちが違う自分の名前を書く。こちらで使用される字は玉蘭に教えられた。佐保が頭の中で字を理解するように、玉蘭も佐保の名を頭の中で浮かばせていたのである。

「出来ました」

小筆を置いた佐保はホツと息を吐いた。文字に書き起こした「立木佐保」は、やはり彼女にとってどこかしつくりとこないものだった。

「仕方ないほど、へたくそだな」

自分自身でも分かっている事への指摘に、佐保は口を真一文字に結んだまま両手を膝に乗せた。博朴は飛泉に呆れたように嘆息したが、特に何を言うわけでもなく佐保へと言葉を投げかけた。

「これが姓、これが名ですね」

紙を見下ろしたままそこに指をさし、博朴は彼女に確認した。肯いた佐保は、玉蘭から教えられていた事を口にする。

「ここでは本名をあまり使わないのですよね」

「そうです。姓名とは別に字あだながありますから、ふだん生活する分には姓名の必要性を特に感じません」

博朴は答えた。

「こちらで名といえば、大抵は字を指しますし」

字あだな。その存在をついこの間、玉蘭から聞いた。その時、佐保は合点がいった。会って初めに佐保の名を尋ねた玉蘭を思い出したのだ。彼女は佐保に対し、何と呼べばよいか口にしていた。それもこれも本姓名を名乗る事がこの世界ではまずないからだ。日常生活においては字によって、やりとりされている。それは親子でも家族でも同様で、本来の姓名が使われるのは戸籍や公的な届出をする特別な場合がほとんどだという。

「“博朴”、“飛泉”も字あざなですし。名乗る時も通常なら字だけで十分ですよ」

「玉蘭さん……皆さんも字ですか？」

「まあ、そのようなものです」

博朴がそう言つと、黙っていた飛泉が佐保の書いた文字を見ながら唸った。

「おい、へたくそ。ここの書き方が違う」

へたくそ、という呼び名に何か言い返したくなつたが、佐保は努めて平坦な声音で「何処ですか」と尋ねた。

「ここ」と紙に指を置いてトントンと場所を指し示している彼に、佐保は首を傾げる。何処がどう間違っているのか分からない。いっこうに返事しない佐保に痺れを切らしたのか、飛泉は佐保の書いていた練習の紙を退けて新たな紙を置いた。小筆を握つた彼の手を注視しつつ、その筆の動きのよさに佐保は少しばかり感心した。

「まったく。お前の頭の中はどうなっている。異客なのだから、頭に浮かんだものを書ける筈だろう」

「そうしているつもりだけれど、何だか違うんです」

佐保は困つたように言つた。飛泉は「意味が分からん」と素気無く言つて小筆を置く。

「上手く説明できません、ごめんなさい。頭の中に浮かんだのをそのまま書いているつもりなんですけど、書いていると向こうで使っていた字……漢字と言うのですが、それと似ていたり似ていなかったりして……。混乱すると漢字と混ざつてよく分からない字になったり、書き順も分からなかったりで……」

「結果、へたくそなわけか」

説明にあたふたする佐保の言葉を止めて、飛泉は勝手に結論付けた。彼の言い様に険のある顔つきを見せた佐保は「はあ」と曖昧な返答をして口を閉じた。

佐保は戸惑っていた。言葉は解せても、文字が読み辛いのだ。頭の中に文字は出るのに、それを書いても若干書体が違ってしまふ。

まるで英語のブロック体と筆記体の違いだろうか。読めるように読めない、書けるように書けない、まさに佐保の状況はそれそのものだった。黙り込んでしまった佐保に、博朴が取り成すように言う。

「まあ、識字率の高いわけでもないですし、話せるならば市井に紛れても余程の事がない限り、異客であるとは見分けられませんよ」

弟の言葉に、飛泉は鬱陶しげに言い切った。

「早々に言い訳を用意するのは怠惰を招く」

彼の、佐保に向けられた言葉と視線の隅々に、彼女は顔が強張った。何も言い返せない佐保が口に出たのは、不平か愚痴か、それとも郷愁からなのか自分でも判別できない言葉だけだった。

「受験勉強みたい」

小声で呟けば、両隣の双子の片割れは首を傾げ、もう一方の片割れは不満の色を滲ませた表情で佐保を窺っている。その視線には応えずに、佐保はふうと軽く息を吐いて先ほど飛泉が書いた「立木佐保」を眺めた。

言葉に関して、佐保が元から分らない単語については、いくら佐保の知る言語に訳されても意味までは掴めないようだった。佐保がその言葉の意味を知らなければ、理解できない。それは通常の語学習得と同様の理屈だったので、佐保が語彙を増やせば何の問題もなくなる筈である。知らない言葉までも意味が何となく分かる、と都合よくいかないようだ。その過程は学校の勉強にそっくりで、結果を得ないわけにはいかないその学習に対し、彼女は思わずそう言ったのであった。しかし今では、勉強し学校へ行くという、あの単調な日常ですら懐かしい。そう考えていると、ふと彼女の心に疑問の影が差した。

「何故、帰れないんでしょう」

佐保が帰れないと知らされてからようやく生まれた問いかけ。口にするには遅いくらいの言葉だった。

「は？」

彼女の疑問に飛泉、博朴ふたりの声が重なる。

「何故、帰れないと決め付けるか分かりません。どうしても私は帰れないんですか？ 帰れないと言い切れる理由が分かりません」

どうして、帰れないという事実を鵜呑みにしているのか。それはここで出会った彼らについても共通だった。皆、異客は帰れないと思っている。その事実には佐保も従っていた。

考え込む彼女に、博朴は答えた。

「古くからの決まり、……あるいは書物にそうある、と言ってしまえばそれまでです。到底、佐保さんが納得しかねるものだとは思いますが、それが理なのです。天……つまり皇天も神仙も、干渉しないとされています。人間の行く末を」

「干渉しないなら、異客は生まれませんと思います」

尤もな理由を言った佐保はまっすぐと彼らを見た。それに反応したのは、飛泉のほうであつた。

「この世界の人間の、という意味だ」

彼は博朴の説明を継いで詳述した。

「ここにきた時点で、お前はもうこの人間となる。だから天はそれ以上の干渉はなさらない。つまり、この世界の人間になったお前は干渉される理由がなくなる。……悪いがはっきり言ってしまうぞ。お前にはあつても、この世界の理にはない。お前を帰らせる、という理由が」

淀みのない凜とした口調は、いつそ清清しいほどに佐保の頭に響いた。だが、言われた内容を上手く受け取れない。彼女は短く息を吸った。

「なんて……」

勝手な理屈。その言葉を飲み込んで、吐息と共に強張った肩を無理やり落とすと、悔しげな顔で俯いた。

第三章 四節

暗くなるのが早いからか、こちらの世界では、夜の時間を佐保は長く感じていた。夕闇には星々が煌めき、あつという間に夜を迎えて月の光が晩を照らしている。どうやらこの世界でも月の存在は変わらないようで、満ち欠けを繰り返すのだと彼女は玉蘭に教えられていた。

月については、その動きに合わせて暦の計算もなされるという。月宿げつしゆくと呼ばれる一月ひとつきの中に、四つの大きな「印いん」があり、その印は七つの小さな「点」をそれぞれに宿す。

閏年はどうなっているのだろうかと疑問に思ったが、それは彼女が質問するまでもなく玉蘭が話した。月の運行での計算は実際の年月とずれが生じる。その為それを修正するのに一年十二ヶ月に一ヶ月を足して、数年に一度、十三ヶ月を一年とする年を作るのだという。それぞれの総称については、年号は章曆しょうりき、月は月宿、週は印、日は点で、それらには、更に細かな呼称があった。要は、何年何月何日というのが数字ではなく言葉で表すようになっていたのである。それがどうにも飲み込みにくく、彼女は聞いたそばから一度で覚えようとするのを諦めた。

(それにしても……)

佐保はそろそろと部屋を出て、中庭を目指しながら内心そう言った。棟と棟の間には渡り廊下があるが、そこを逸れると庭や畑がある。廊下を歩いていると、足元の石畳の隙間まで月光が伸び込むように照らし、電気がなくても夜がこれほど明るい事を知った。そして彼女が何より驚いたのは、その美しさにあった。

「綺麗な夜」

さきほど胸の中で呟いた言葉の続きがつい漏れる。ここは都会の、息の詰まるような空気ではない。日本の田舎でも星に月にと、こんなに鮮やかな夜はあるのだろうか。まるで天然のプラネタリウムの

ようで、中庭に辿り着いた彼女はじつと空を見上げていた。

佐保が一人で佇んでいると、ふと、人の近付いてくる気配がした。その方向に視線をやると、李慧がいた。彼は昼間の服よりも楽な格好をしており、おそらくそれが彼の寝間着なのだろうと佐保は思った。夜なのだから当然といえば当然であるが、佐保にとっては昼間の姿を見慣れていたせいもあり、何だか気恥ずかしい気分で僅かに頭を下げて彼に挨拶した。

目線を戻せば、李慧の髪に目がいった。佐保が、左の肩口で緩やかに結ばれているそれを眺めていると、李慧は彼女に声をかけた。「体が冷えるぞ」

寒いわけでもない夜だったが、病み上がりの自分を思い出した彼女は笑みを浮かべた。

「もう戻ります。あまりに綺麗だったから、つい外で見たくなくて」そう言つて天上に向かつて指をさした佐保に、彼は静かに相槌をうった。佐保は指を下ろした。

「私の見た中では、比べ物にならないくらい綺麗です」

「元より存在する自然に美醜の基準があるのか？」

李慧の発言に一瞬、言葉を詰まらせた佐保はどう答えようかと苦笑して話した。

「……さあ。疲れているのかもしれませんが。自然を見ると癒されるので」

そうか、と言ったきり口を閉じた彼に、佐保も暫く黙つて庭を見つめていた。すると隣から小さく笑った声が一度だけ聞こえた。

「戻るのではなかったのか」

「はい」

部屋に戻ろうとした佐保はふと立ち止まり、李慧の方に向き直った。李慧を見上げると、彼もこちらを見ており、彼女はその視線に慌てるように口を開いた。

「李慧さん、感謝しています。ここに置いて頂ける事。これから、どんなにご迷惑をおかけするか分かりませんが、自分で生活の基盤

を立てられるように努力します。それまでお世話になります。どうか宜しく願います」

はつきり言つて先の事を考えたくなどはなかったが、佐保は他に言い様もなかった。彼女は頭を下げながら、栄古に言われた言葉を思い出していた。

土台を作る、という事。

現状を嘆いて自殺するのもできない。かといって一念発起してここで新たな生活を始めようという心持ちまでには至っていない。ここから逃げて全てを投げ出すという選択肢もあったが、ここは知らない世界なのだ、そうして一番に困るのは佐保自身であるのはひどく分かりきっていた。

栄古が促したのは決意か諦めか。佐保はぼんやりと考えながら、頭を上げて目の前の李慧を見た。

生きていくのなら、一つ一つ物事を組み立てて、こなしていく必要がある。その場所が変わっただけだ。慣れ親しんだ場所から移っただけだ。ただ、家族や友人のいない世界になっただけだ。そのように自身を納得させた。

ここで頑張つていこうと奮い立たせるものではなかった。彼女にとっては一種の諦めだった。少なくとも佐保にはここで生きていく為の希望として、栄古の言葉を受け取れないでいるからだ。

そんな佐保の気持ちを見透かすようにまっすぐと彼女を見ていた李慧は、まるで宥めるような表情で声をかけた。

「明日、行ってみようか」

佐保は「何処に」とも「一緒に？」とも、言う暇がなかった。彼は間髪入れずに言葉を紡ぐ。

「お前の、目の覚めたという場所に。この前の散策の続きだ、佐保」心地よい声音が、僅かな夜風に掻き消える。

「え」と言葉を一つ零しただけの佐保に、李慧は「よい夢を」と告げた。彼女は了承の返事を出来ぬまま、すでにこちらに背を向けて去っていく彼を眺めていた。

心地よい鳥のさえずりが朝を告げる。早い起床に慣れ始めた佐保は寝間着を脱いで着替えると、蓉秋や玉蘭と共に家事を行い、食事を喉に通した。そうして気付けば日も上がりきり、部屋で博朴に字を教えて貰っているところ、栄古が現れた。

「早いな、嬢、博朴」

机に向かっていた二人はその言葉に扉の方へと振り向いた。開け放していた扉から顔を覗かせた栄古は「ふむ」と言いながら部屋を見渡している。

「博朴、お前の片割れはどうした。嬢に字を教えると意気込んでいたのを見たのだから」

佐保と博朴に視線を戻した栄古は近付いた。飛泉は面白げに口元を緩ませて言った。

「母が連れていきましたよ。とっておきの雑用を押し付けてやるから……だそうで」

「あれだけの意気込み、それは立派な小間使いになろうよ」

栄古はくつくつと喉を鳴らした。その会話に、佐保は先程知ったばかりの事を再確認させられた。

（ああ、やっぱりそうなんだ）

蓉秋が飛泉と博朴の母親であったのを、今のやり取りを眺めながら思い出した。そんな素振りを見せなかった親子の上に、互いを呼ぶのに皆一様に字あひなを使用していた。それは彼ら親子も例外ではなかったもので、彼らの関係を聞いた時は驚いた。親すらも字で呼ぶのかと疑問を浮かべた佐保に、博朴は「公私が入り乱れているのです」と苦笑いしていた。

佐保と博朴の前で止まった栄古は彼らを見上げた。

「嬢。今日は李慧と行くそうだが、我も付いていつて構わぬか」

栄古は尋ねた。肯く佐保に、博朴は机の上の筆や紙を片付け始めながら、ちらりと栄古を見た。

「李慧様は厭ですか」

厩があるなら当然、馬がいるのだろぅが、それも佐保は初めて知った。彼女も机の上を整理し始めた。博朴は、栄古との幾度かのやり取りの後、佐保へと言葉を投げかけた。

「佐保さん。馬は乗れますか」

佐保は思わず片付けの手を止めた。そして「乗れない」と勢いよく首を振る。すると、「そうですか……」と言葉を切った博朴は提案した。

「なら、李慧様とご一緒に」

博朴の声を聞きながら、しかし佐保は彼を見ていなかった。彼女は栄古を見ていた。博朴の提案の合間にぼつりと呟いた栄古の言葉の方が、やけに耳に届いたからだ。

二人で騎乗か、一人で騎乗か。

思案していた佐保に、栄古が告げる。

「嬢、二択だ。……馬と虎の、どちらがよい？」

そのような事があるわけもないのに、一瞬、佐保には栄古がにやりと笑った風に見えた。

第三章 五節

「丁度よかった。少し走らせて貰いたかったもんで。なんせ驚馬うづはの
一歩手前ですからね」

李慧にそう言つと、伍祝は馬の黒い鬣を慣れた風に撫でた。

佐保が、栄古、博朴らに案内されて厩の前に来た時、そこには彼
らがいた。伍祝は馬を引き連れて李慧に手綱を渡している。

李慧が鐙や鞍に注意をやってしていると、彼の傍に寄つた栄古が自身
もついて行く事を告げた。

「嬢は、虎をお引き立て下さるそうだぞ」

その一言に李慧は特に反応を示さず、伍祝は「左様で」と言いつ
つ笑いを噛み殺していた。佐保は少し困つたような面持ちでそれを
傍観している。彼女に近付いた李慧は言つた。

「川沿いでよいな」

確認の意味合いが強い問い方に、佐保は「はい」と一つ肯き、消
え入りそんな口調で付け加えた。

「あの、すみません。目の覚めた正確な場所……実はよく憶えてい
ないのですが……」

そう言つと、彼女は肩を縮こませた。

彼女が目覚めたのは、川の上流ではある。だが、そこに向かうの
はよしとして灌木、草木、岩……と、似たような景色ばかり続くの
だ、目印も付けていない状況では場所の特定が難しいのは当然と言
えた。

すると、栄古が助け舟を出す。

「案ずるな。我と会つた場所までは我が憶えている。そこから上流
に歩いてみようぞ」

安心した佐保の横で、鹿毛の色をした馬に跨つた李慧は栄古と佐
保に用意を促す。伍祝が栄古の背に厚地の布を鞍代わりに置き、首
輪に似た手綱を栄古に装着する。佐保は、栄古に乗る事にいまさら

気が引けたが、グイと横腹を押し付けるように彼女に触れた栄古は、一言「構わぬ」と言つて背中に乗るように示した。佐保が乗りやすいよう腹を地に伏せて、彼女が跨つたのを確認すると、栄古はゆとりと立ち上がった。伍祝と博朴に見送られ、佐保らは屋敷を後にした。

思つたより悪くない乗り心地と振動の少なさに、佐保には周囲を見渡す余裕があつた。徐々にかけていく景色を通り過ぎていく。緑は日の光を浴びて光沢を点し、遠くに望む山々はその輪郭を露わにしている。

李慧とは横一列に並ぶのではなく、振り向けば斜め後ろに彼の姿があるといった風だつた。別段、緊張しているわけではないが、彼女は姿勢を正した。

軽快な足取りでたちまち川岸に着くと、そのまま上流へと辿る。

その道すがら、佐保は栄古に声をかけた。

「栄古さん。栄古さんの名前も字あざなですか？」

虎にも字があるのだろうか、佐保は純粋な好奇心からそう尋ねた。

「いかにも」

栄古は答えた。隣にはいつの間にか李慧が並んでいる。一度言葉を切つた栄古は再び話し始めた。

「姓は家格の高い親の方を名乗るのが通例、名は公儀の届に使用する。字は日常生活での呼称と区別すればよい。だが例外もある。

我は字しか持ち得ぬし、李慧の場合は字とは言い難い」

佐保が李慧の方を見上げると、彼も馬上からこちらを見ている。目が合つたが、互いに何か言う前に栄古が答えを出した。

「号だ」

その短い呟きに佐保は李慧から栄古へと視線を移した。

「号？」

聞き返した彼女に、「字は他者より命名されるもの、号は自らで

命名するもの」と栄古が簡単に説明した。佐保は頭の中で反芻する。それはつまり、李慧は自ら「李慧」であると名乗ったという事だろう。佐保が再び李慧をチラと見上げるも、当の彼は黙したままだった。

「嬢。号にも字にも意味がある。名乗る意味と、名付ける意味だ。嬢の世界には馴染みのない代物か」

栄古の言葉に、佐保は「いいえ」と答え首を振った。

「私のいた所では、名前に意味を持たせるというのはありました。私も、そうです」

ほう、と真下から関心の声が聞こえる。

「佐保……は、春を司る女神と花の名前にあります。私、姉がいるのですが、姉の名前も花からとられていて。それで、私は春に生まれたのでそう名付けられました」

すると栄古が「よい名を貰ったのだな」と言った。佐保は気恥ずかしく思いながらも、肯定の笑みを作った。

それきり言葉が途切れ、佐保は下を向いて栄古を眺めた。吹く風が髪を揺らし、彼女の視界の端で靡く。俯いている間に、川岸から離れて灌木の中にいた。栄古の、落ちた枝を踏み締める音が聞こえる。後方からは馬の蹄が鳴らす軽快な音。心地よい一定の反復音に彼女がじつと耳を澄ましていると、栄古が立ち止まって告げた。

「すぐ、目の前だ」

了解の合図のように、李慧が馬から降りる。栄古は言った。

「これより先は、嬢、そなたの記憶が頼りとなるぞ。確か、目覚めたのは岩木に囲まれた地帯と申したか」

栄古の背から降りた佐保は、頭の中で思い出しながら言葉を紡いでいった。

「このまま川沿いに上ると、少し逸れた所に岩と深い木々がありました。時間的には、ええと、昼間を歩き通したくらいで……」

佐保が悩みながらぼつりぼつり区切るように言っていると、「そんなに」かと李慧が口を開く。彼女がそれに肯けば、李慧と栄古は

顔を見合わせた。

「岩場があるのは、そう遠くない。嬢の足取りが緩やかでも、ここから日中を歩く距離でもないぞ」と栄古。

「麓の方だろう」ややして、李慧がそう呟いた。

どうやら栄古と李慧は、栄古の言う岩場ではなく、その先の麓だと見当をつけたらしく、佐保が口を挟む間もなく行き先が決まってしまった。

「行くか」

ぼうつと立って成り行きを見ていた佐保は、栄古の声を聞いて再び背に跨ろうとした。が、佐保の手を取った李慧は、彼女に馬へと乗るよう促した。

「あの、李慧さん」

佐保は戸惑ったが、「この方が速い」と李慧は一蹴して彼女の背後に立った。そうして、「え？」と、呟く佐保を押して鎧に足を掛けさせると、馬の背に乗り易いように彼女の脇腹に手を差し込み持ち上げにかかる。それはあつという間の出来事だった。騎乗を手伝われた佐保は、気付けば栄古と李慧を見下ろしていた。

「じつとしている」

その声が聞こえるや否や、馬上から臨んでいた筈の李慧は佐保の視界から消えた。瞬く間に、李慧は彼女の後ろに乗り込む。佐保は何も喋る事が出来なかった。後ろを振り向こうにも、密接した他者の体温が感じられてそわそわする。背後からのびた李慧の手は、手綱へと落ち着いたが、佐保にはそれが腕に囲まれたように思い、彼女の胸は馬鹿馬鹿しいほど騒ぎ始めた。

「何と、あじけのない……」栄古の呟きの中、佐保は羞恥を抱いて俯く。

目的地に着くまで、彼女は背中と顔が熱くて堪らなかった。

第三章 六節

馬の蹄が土を蹴る音が途絶えた。栄古も止まった。佐保が「あ」と、短く声を上げたからだだった。彼女はきよるきよると視線を動かす。しかし馬上から見渡した風景に、佐保は特に何の感慨も抱かない。李慧の手を借りて馬から降りる時も同様だった。あれほど意味もなく速まっていた鼓動が、妙なくらい落ち着いている。

佐保は、いま立っている場所に見覚えのある気がしたが、同時に、目の覚めた場所とは確証を持って言えずにいる。しかし否定するものも何もなかった為、口を開いた。

「ここのような気がします」

岩木と、緑の濃い周囲を佐保はゆっくりと見渡し、そして頷いた。「きつと、この辺り一帯のどこか、です」

短く息を吐いた佐保は、ひとり呟くように言葉を零していった。

「うまくいかないものですね。少しだけ、期待していました。心の中で」

そうして力なく笑ってみせる。彼女のそばで、李慧と栄古は黙っていた。

あり得ない事態でここに連れられてきたのだ、目覚めた場所に戻ればもしかすると帰れるのでは……という僅かな期待があった。

「ああ……」落胆とも悲痛とも言える呻きを、彼女は吐息に乗せた。そうして佐保がその場にくずおれる手前、李慧が彼女の腕を掴む。

うつろな目で、佐保は自分を掴んでいる腕の主を見上げて辿っていった。そうしてゆっくりと視線が重なると、彼女は自分の腕を引いて呟いた。

「少しだけ、一人に」

させてほしい、という懇願は聞き届けられなかった。

「一人になりたいとは思えない」李慧が二の腕を掴み返す。

視界の隅で栄古がそろりと消えていくのが分かったが、彼は佐保

を見つめていた。

「……嘘ではありません」

弱々しく抵抗する佐保に、「そうだな」と言って、李慧は彼女を緩やかに抱きしめる。丁寧な仕草で佐保の背中に腕を回すと、彼は穏やかな口調で告げた。

「嘘であつてほしい、という私の詮無い願望だ」

佐保は言葉を返さずに、李慧の胸に顔を埋めて口元を苦しげに緩めた。そうして笑みを浮かべた表情のまま、彼女は李慧の服へと涙を染み込ませていった。

ようやく彼女は気付いた。自分が何をしていたのかを。李慧を押しつけるように離れると、上から茶色の双眸がこちらをじっと見つめているのが分かった。佐保の鼓動は駆け出し、治まらない。抱きしめられていたからか、動揺しているからなのか。どちらが齎す鼓動の速さなのか判別つかない。

そんな彼女に、李慧は、ゆっくりと瞬きをして口を開いた。

「辛いな」彼はぼつりと零す。

佐保は、そう言った李慧を無神経だとは思わなかった。慰められたと思わなかった。まるで代弁された気分で、しかし佐保は肯かずにじっと耳を傾けていた。

「目の前から自分の物がなくなる程、辛いものはない。ましてや大事な物なら尚更だ」

彼の穏やかな口調に、佐保は居た堪れなくなり俯いた。

「失った“熱”が温かければ温かいほど、恋しい。恋しくて、憤る」

「な、にが言いたいんですか」

ようやく口を利いた彼女の声は上擦っていた。

「お前は何も悪くない。それでいい」

（ああ……）彼女は声にならない声を飲み込み、胸のうちに留めた。帰りたい、という言葉は吐けなかった。李慧が促しているのはその言葉だ。佐保は彼に、帰りたいと叫ぶのは悪くない事だと、そう

言われた気がした。

「こんなの、あんまりだわ」

吐けない言葉の代わりに、佐保は小さく呟いて固く両手を握り、指を組み合わせた。

「帰れないなら、せめて、……私は元気だよって伝えたいのに」

「……ああ」

そう言った李慧の声音で佐保は悟る。それすら叶わないのだと、佐保は目を強く瞑った。

「寂しい……」

いま向き合った感情は、彼女が何年も抱いてきたものだった。佐保は、胸に燦ぶる気持ちを初めて他人に吐露した。そうすると、より間近に「それ」を捉える事が出来た。

そうか、私はひとりなのだ、と。

佐保は唇を噛む。指が掌に食い込む程に強く握り締める。これ以上、泣き面を晒すのは恥ずかしかった。再び零れそうになる涙を慌てて止める。頭の奥がジンとして、目元から熱を孕んだこめかみごと、彼女は手で拭った。

佐保からそつと離れた李慧は背を向けて、馬の手綱を引いている。彼女の近くに帰ってきた李慧は、一言「よいか」と言った。それが、ここから離れるため騎乗するよう促しているのだというのは分かった。もう少しだけここにいたかった佐保は逡巡した風な顔を見せたが、馬に跨った。

「あの、栄古さんは？」喉に突っかったような声音で彼女は控えめに尋ねる。

勝手に行つては不味いだろうと思つたが、彼女の後ろに乗った李慧は言った。

「問題ない」

言葉と共に景色が動き出す。すぐ傍から聞こえた声は優しくだった。

「あれは野生の猛者だぞ。においで追いつく、……おそらくな」

最後のいい加減な一言に、佐保はふと気分が軽くなり、小さく笑った。

来た道を辿っていないのは、馬を走らせ始めてすぐに気付いていた。だが佐保は何も言わなかった。彼女は潤んだ目元からこれ以上涙が零れないよう、気を紛らわせる事に徹していた。

暫くすると景色は急に開けてくる。佐保は馬上から見渡した。見れば、野花が一面に広がっている。どれも土に這うように咲いている種類ばかりで、馬から降りた佐保はそこに踏み込む。花々の丈は彼女の脛辺りにも満たない。周囲を窺うと目に付く花の色は数色だが、風に揺れるたび花卉の濃淡が波の様なうねりを見せる。

「凄い」佐保は吐息と共にそう漏らした。

ここは山麓らしく、花々の先へと目を凝らせば山々と岩稜が遠くに連なっているのが分かった。臨んだ風景の上には、薄い水色から徐々に色を濃くして続く藍の天上が広がっている。晴天に遮るものはなく、山の端はまばゆい程に光り輝き、花の色はいつそう鮮やかに見えた。佐保は足元に気をつけながら、ゆっくりと花の咲き誇る中に入っていく。

「凄く綺麗」

高揚感を滲ませつつも、発した声はどこか鬱々とした気持ちを抑えない。それを声音に乗せたまま、佐保は李彗へと振り向いた。

「そうか」彼は一言、穏やかにそう告げて佐保を見ていた。

中天から傾いだ日の光を浴びながら、帰路についた。その道すがら、栄古はふらりと戻ってきていた。佐保を乗せた馬の傍を歩く栄古は特に何も言わず、李彗も黙っていた。彼女は、栄古に気遣われた事を思ったが、何も口にしないでおく事にした。

屋敷に着くと、いつかのように伍祝と玉蘭が門前で待ち構えている。

「おかえりなさい」

二人はそう言った。帰ってきた者にかけられるべきその言葉は、当然、馬から降りた佐保にも宛てられていた。李慧から手綱を受け取った伍祝も、にこやかに迎える玉蘭も再びそう呟き、共に門の内側に入った。

部屋に戻る間にも、親子三人で庭先にいた蓉秋や博朴に「おかえり」と声をかけられ、顔を突き合わせば嫌味を言われていた飛泉にも「帰ったか」と険のない顔つきで迎えられた。

佐保は自室に引っ込むと、寝台へと体を預け寝そべった。

おかえり。

その言葉に胸が締め付けられた。けれど、それは心地のよいものと温かな苦しさしか湧いてこず、彼女はまた涙が出そうになる。

「……ただいま」

静かな部屋に佐保の声が響いた。さきほど誰にも「ただいま」と上手く口に出来なかった彼女は、一人になった今、やっとその言葉を振り絞った。途端に涙が溢れて止まらなくなる。

その日はろくに食わず、眠りについた。そうして翌朝、屋敷に住む一人々々に会いにまわった。彼女は皆に頭を下げて言った。

お世話になります、と。

心からの言葉だった。

第三章 七節

基本的な生活様式に慣れるのに一月以上を要した佐保にとって、新たな学習とその習得は遅々としていた。今も、投げ出したくなるくらいの衝動に駆られながら、彼女は机に向かっている。

「何だ、この奇怪な文字は」

彼女がそう思うのは、ひとえに飛泉の発言にあった。

「練習中です」

もう何度も使い続けているその返答は、反射のように備わっていた。筆を持つ手元に集中したい佐保だったが、彼女の脇から飛んできた言葉は、そのような気遣いを見せる気配を見せない。

「団子を作れとも、虫を這わせるとも言った覚えはないぞ」飛泉が言った。

「練習中です」口にしながらも、佐保は手元の自分で書いた文字をしげしげと眺める。

確かに彼の言葉は言いえて妙だと思った。小筆を滑らせたあとが滲んだり、一点に「だま」のような染みが出来たりと、文字のそこかしこが奇妙なのは、書いている自身でも十分に見て取れた。

しかしながら、たびたび彼女を小馬鹿にする始末でも、李慧が様子を見にくれば飛泉は大人しいものだった。これならば勉強中は李慧も同席してほしいと彼女は思ったが、学んでいる姿を見られるというのは、あまり好ましくない為に、それは心のうちだけにとどめていた。佐保にとって、李慧に関しては特にその傾向が強いらしく、飛泉に怒られるのも、蓉秋や玉蘭に教えて貰う物事を見られる事にも抵抗を感じていた。失敗を見られるのが嫌なのだ、と佐保自身はそう考えている。

不慣れた生活環境に順応しようとし、授業以外で滅多に使った事のない筆を持ち、複雑な文字を勉強し、一切使った事のなかった洗濯板に労を碎き、農作物を育て、知恵と知識を基礎から覚えこませ

ようと頭に詰めていく。

生活の術を身につけるなか、特に文字の読み書きについては多くの時間を費やしており、最近は飛泉ひとり文字の勉強をみていた。そのため佐保は、彼女の隣で一向に軟化する事のない彼の態度と憎まれ口にも、耐性が生まれつつある。

そうして一日が終わるのだ。ここには遊ぶ場所も、出掛ける場所も、何も無い。生活の為に必要な事をこなすだけだった。

彼女がそのような生活を送っていたある日、いつものように字を教えていた飛泉と入れ替わりで、蓉秋が部屋を訪れた。手には橙色の果実が乗っている。それを渡された佐保は礼を言っ皮をむいた。「香橘じゆきつっていつてね。甘いだろう？」

蓉秋の言葉に、佐保は日本で食べていた蜜柑を思い出した。形、味、匂い、全てが寸分違わず蜜柑である。ほのかな酸味と果汁の甘みを口にして、ゆっくりと頬張っていると、懐かしさに駆られた。

佐保から離れた蓉秋は、机に置かれた書きかけの文字の羅列に目をやった。

「簡単な文字は上手くなつたみたいじゃないか」

「あんまり進歩ないですけど」

肩を竦めて苦笑する佐保に、蓉秋は「なに、ゆっくり学んだらいいさ」と、のんびりした口調で言う。

「はい」佐保は答えた。彼女は、自分の力で得ていく作業をようやく面白いと思い始めていた。

「飛泉もね、何だかんだで楽しそうだから」

「……はあ」

母親には、息子の仏頂面の中に楽しい雰囲気を見出せるのだろうか、と佐保は納得しておいた。

「まあ、物珍しいのもあるんだろうけど。根気よく付き合ってくれらさ」

「はあ」

「あれはね、ああ見えて気が長いから」

それには返事をせずに、彼女は黙々と香橘を食べ始めた。

こちらにきてからというものの、佐保は慣れない生活習慣に苦戦していたが、それ以外の　屋敷の住人との関係性は良好といえ、段々と打ち解けていた。

いつの間にか暦の上では季節が替わろうとしている。「季節」といっても気温にさしたる変化は見られず、亢県は年中過ごしやすい気温であった。農作物の収穫にも、自生の食料採取にも事欠くというわけもなく、最近の佐保はそういった手伝いをしていた。

今日もまた、佐保は李彗と共に屋敷からそう遠くない場所で、食用の植物を採りに出ている。採取した山菜や果実を入れる為の籠を馬の両脇腹に吊るし、李彗は手綱を引いている。佐保は馬を挟んで彼の反対側を歩いていた。

手綱を手頃な枝に引つ掛けると、李彗は身の丈の倍ほどの高さがある木々を分け入り進んでいく。木々の奥には実が生っている樹木があった。

「あれは初めて見ました」彼の後ろから歩いてきた佐保は、それを見て言った。

李彗がその場まで近寄り、腰から小刀を取り出す。

「羅漢樹という木になる果実だな」言いながら、手際よく実の幾つかを枝から切り離した。

果形は彼の手に収まるほど小さな球体で、滑らかな表面は茶色とも緑ともつかない色だった。

「食べられますか」

「生食には向いていない」

佐保の質問に答えながら、李彗は馬にある籠へと視線をやった。どちらもいっぱいの中身に、彼は手元の果実へと一度視線を落とし、だが、「あの」という佐保の声に顔を上げた。

「これ、使いましょう」彼女は持っていたハンカチを取り出して、彼に示した。

その言葉に反応した李慧は、すぐさま「待て」と声に出した。制された佐保はぴたりと止まり、彼の言葉を待っている。

「よい。それは仕舞え」李慧は言った。

彼の目の前にあるのは、佐保がいた世界から持ちこまれたものだ。李慧は、彼女にとってその重要性を理解しているつもりだった。肌身離さず忍ばせているのだろう……と、容易に想像も出来た。だからこそ、彼はいま目の前に提示されたそれを受け取れないでいた。だが佐保は、彼の気遣いに応えるつもりはないらしい。

「いいんです」ハンカチを広げた佐保は、穏やかに言った。

李慧は窺うような視線で、彼女の真意を探ろうとする。

「しかし……」

「これに包んで持って帰りましょう」佐保は再び、しかし先程より具体的な言葉で提案してみせた。彼女の手元に目をやった李慧は、躊躇いを示す。

「大事なものだろう」

彼の言葉に、佐保は肯定とも否定ともつかない曖昧な動きで首を傾げた。そうして、彼の手から奪うように取った果実をハンカチに包んでいく。

「帰りましょう、李慧さん。私、おなかがすきました」

困ったような笑みを浮かべて言う佐保に、李慧は逡巡を示したふうに一度口を開いて閉じる。そして、彼女の浮かべた笑みと似た表情で「ああ」と、言った。

二人は帰路につく。

それから一月にも満たない頃、この世界にきて初めて、佐保は季節をひとつ越した。

第四章 一節

佐保は、自分の名を呼ぶ声を聞いた気がした。木霊のように連なる声は懐かしく、彼女はその声をよく知っている筈だった。

再び名を呼ばれる気配がした。風に連れ去られていくように小さな声だ。佐保は耳を澄ませて聞こうとする。だが、風の音しか聞こえなくなっている。すると先程まで聞こえていた声がどんな声なのか、何故よく知っていると聞いたのか、途端に分からなくなった。（あ、そうか）

夢うつつの中、佐保は納得していた。母の言っていた言葉がよみがえったのだ。

真つ先に思い出せなくなるのは声だ、と。

確かにそうだった。その事は父で経験していた。聞いていた記憶はあるというのに、亡くなった父の声が分からない。佐保は胸のうちに、そうひとりごちる。だから今しがたの声が父のものだと感じたのに、本当にそうなのかと断定できなかった。

こうして忘れていくのだろうと思えば、佐保は堪らない。来るべき日を予想して、佐保は目を閉じたまま眉を寄せた。

いつか、母と姉の声も鮮明に思い出せなくなるその日を、自分は迎えるのだろうか。

冴え冴えとした現実感に直面した彼女の意識は、浮上を試み始める。

風が揺れて、花の香りが立ち上り、周囲の気配が変わる。木漏れ日の中でまどろむ彼女の頭上に、ふと影が差した。

佐保、と声がする。この声は現実だ。彼女は働かない思考の中で、そう思った。

再び彼女は声をかけられた。その呼び声に目をゆつくりと開けてみる。彼女が横を見れば、木に寄りかかってこちらを見下ろしている李慧がいた。同じ木に背を預けて座っていた佐保は、彼から視線

を外し、虚ろな目で真正面に広がる景色を眺めた。

「夢を、見ていました。……夢でもいいから、叶えたい願望……の夢」

李慧も前を向く。「まさに夢見た事、という意味か」

そのこたえを理解した佐保はくすくすと笑った。

二人は、木に背を沿わせたまま、目の前に広がる色とりどりの花々を眺めている。ここは、佐保にとって「一区切り」がついた日に連れてこられた所だった。李慧が初めて連れてきた山麓の花の咲く場所だ。あれから、彼はたびたび佐保をここへと連れ出すようになっていた。

「何処を見ている？」李慧は質問した。

「遠く」佐保は簡潔に答える。

二人は野花で一面を埋め尽くされた景色を見ていた。しかし、それを眺めている筈なのに、李慧は彼女が自分と同じものを見ているとは思えなかった。彼の質問した通り、佐保の視線の先はずっと遠くを見つめているようである。

「……半年か」李慧は、ふと呟いた。

彼の言葉に、前を向いたまま佐保は微笑む。

気付けば半年。佐保がこの世界にきて、半年も経っていた。その間、季節は移ろっても風景は大してその様子を変えなかった。肌寒い日や雨の降る日はあったが、収穫する季節性の作物によって、穏やかな時の移ろいを生活の中で実感しているくらいである。

「人の順応って素晴らしいですね。心とは別のところにあります」心の準備が伴わなくとも、馴染むための努力をすれば否応なしに身についていくものだ、半年間を思い返したように言った佐保は、陰りのさした表情を浮かべた。だが彼女は、すぐさまそれを消して笑う。

「この世界は、穏やかに時間が流れている気がして。……きっと私には、あちらより合っているんです。だから……」

そこで言葉の途切れた佐保を、李慧は窺うように見る。彼女の横

顔が見慣れた笑顔である事を確認すると、口を開いた。

「人の順応は、感情とは別のところにあるだろう」

彼女の言葉を使ってそう切り返した李慧に、佐保は微苦笑を浮かべた。

「いずれ感情を伴って、この世界を受け入れるのだと思います。だって嫌いなわけではないもの」

口元を緩やかに解く彼女は、隣から離れる李慧を見て腰を上げた。
「帰るんですか？」

「構わないなら」

短いやりとりを交わしながら、二人は休ませている馬のもとへ歩く。

「夕食前に、飛泉さんが勉強をみてくれるんです」

佐保の発言に、李慧は思い出した事を口にした。

「そういえば、お前を褒めていた」

慣れたように馬に跨った佐保は、同じく後ろに落ち着いた李慧へと声を上げる。

「……何が目的かしら」

ひとり真剣に怪しむ佐保に、李慧は笑い声を漏らして馬の腹を踵で叩いた。

馬上で振動を感じながら、佐保はつらつらと考えていた。それは自分の後ろにいる李慧についてだ。ここにきてからというものの、最初のうちは玉蘭と行動を共にする事が多かったが、いつの間にか散策や食料採取は李慧と出かけるようになっていた。彼という事に、佐保は特に緊張もしなくなったが、代わりに他の感情を抱いている。例えば、彼といると心地よいと思い始めたのはいつからか。自問しようにも答えは出てこず、佐保は静かに息を吐いた。

佐保にとって李慧は、彼女に初めて「帰れない」事実を教え、現実を突きつけた相手だ。寡黙というわけでもないが口数の多いわけでもない彼を、以前はどことなく得体が知れず、苦手と感じていた。

見透かすような茶色の双眸もそうだ。佐保の嘘を見抜いたり、何を考えているのか分からなかったりと、佐保は李慧との距離感を掴めずに接していた。

そうして落ち着いて考えると、ふと佐保は、彼に問いたかった事を思い出した。

「李慧さん」

馬の蹄の、土を踏み込む音が耳に伝わる中、佐保は言った。

「ここにきて初めの内に私、落し物をしたから外に出たいと言って連れて貰ったの、覚えておられますか」

「ああ」

些末な事だが、彼女の頭の隅に引かかっていたのだ。佐保の言った「それ」が、なぜ嘘だと確信されていたのか。

慣れた振動と心地よい熱に包まれながら、彼女は前を向いたままその事について尋ねた。

すると、彼は思い出すように答える。

「あれは語順だ」

佐保は首を傾げながら「語順？」と尋ね返した。

「おおかた嘘の見分けというのは、目と耳から判断材料を収集する」
李慧は笑うと、話を続けた。

「準備に余念のない嘘は暗唱したように滑らかだし、突発的な嘘は信憑性を増そうとする為に口数が多くなると思うがな。とはいえ、理屈と相反するが……勘の手伝う事もある」

「そう」佐保は力の抜けたような声音で言つと、苦笑した。「でも、答えになっていません」

「だろうな」李慧は軽やかに、そう返した。

その口調から、おそらくこれ以上、彼がこの話題に取り合わないだろうと判断した佐保は、馬上から望む風景に目をやりながら諦めまじりに質問した。

「嘘を吐く人間は、褒めたものではないと思わないのですか」

「利害によるし、私情による」考える素振りも見せず、李慧は端的

に答えた。

その呆気ない回答に、佐保はぐるりと周囲を見渡ししていたのを止めて呟く。

「何だか、……すみません」

佐保の口をついてでた言葉は謝罪だった。李慧が何か言う前に彼女は続けて言った。

「色々と。迷惑というか、手間をとらせてしまっているというか」

帰れない事実を告げられた時、泣き喚いた自身を今まさに思い出した佐保は、思えば李慧にばかり醜態を晒しているのではないかと感じた。零れ落ちた言葉は、自省の念に駆られた故だった。

佐保の話に耳を傾けていた李慧は、ゆっくりとした口調で告げた。

「妹のようなものだな」

「はい？」

「おそらく、そのような心情で接しているのが妥当だ」

「……妹ですか」佐保が呟く。

「ああ」

李慧は肯定したが、どこか腑に落ちない難しい顔をした。しかし、訂正せずに再び口を開く。

「ならば、世話をやくのは当然だろう」

「はあ」

佐保は生返事をしながらも何かが胸を掠めた。

いつの間にか風を切って進んでいた馬が並足となり、やがて歩を止める。屋敷を目前に、佐保と李慧は馬から降りた。

彼女は李慧の隣に並ぶ。先程のやり取りから生まれた得体の知れない気持ちを自覚して、その答えを求めるように彼を見た。李慧は彼女の視線に気付く。

「どうした」

「いえ」首を振った佐保は、足元を見つめた。

屋敷の門の内側に踏み込んだ矢先、人の足音が聞こえてきたので、佐保は顔を上げた。玉蘭が姿を現し、こちらに駆けてくる姿が目

映る。普段の所作からは想像もつかない焦った様子の彼女に、李慧も不思議そうな顔をして、佐保と顔を見合わせた。

「李慧様……」

彼に近寄った玉蘭は、緊張した面持ちで彼を呼んだ。

「件くだんの使者をお通ししております。火急の御用です」

彼女の告げた内容に李慧は反応した。二人の様子の変化に、佐保は彼らから少しばかり下がり、距離をとった。

「何と？」李慧の声が響く。

短く問うた彼に、玉蘭は恭こつしく頭かしらを垂れ、告げた。

「……仙籍を許す、と」

第四章 二節

風が吹いている。

なびく髪を耳に掛けながら、佐保は二人のやり取りを注視していた。意味の分らない言葉もあったが、いま屋敷にはここの住人以外の人間がいる、というのは理解した。

（お客さん……？）と、心の中で疑問に思っても、口にはしない。

一言も挟める雰囲気ではなかったからだ。剣呑を滲ませ困惑する佐保は、この場から去る事も躊躇い、彼らを前にじっとしていた。

「玉蘭、……佐保を」

突然、自身の名前が会話に出てきて彼女は驚いた。李彗は玉蘭から佐保に視線を移して言う。

「佐保。先に上がりなさい」

有無を言わずといった口調に、佐保は思わず肯いた。彼女は玉蘭に連れられて、先に屋敷に入る。佐保は後ろを振り返った。

李彗は中空を見据えたまま、こちらを向いてはいなかった。

「久しいですな……、一年ぶりのお顔ですか」

部屋に入った途端、李彗はしわがれた声を聞いた。部屋の中央に置かれた卓の前には、笑みを浮かべた白髭の老爺と厳しい顔つきの壮年の男が立っていた。

「苑海……、それに曹達か」
えんかい そつたつ

そう呼ぶ李彗に、老爺 苑海は目を細め、一礼した。苑海の隣で立っている曹達も倣うように頭を垂れた。

「お久しゅうございます……若君」苑海は顔を上げる。「お元気そうですね、なによりでございます」

「お前も、息災であつたか」

李彗は言いながら、二人に着座をすすめた。李彗も腰を落ちつける。

「くたばらないかと、待ちに待っておりますのに、中々どうして迎えがこない。臺^{とう}が立つ……ですらも甘いようで、もはや死に損ないの部類ですか」

呵呵と笑う声に、李慧は溜め息混じりに話を変えた。

「よくここまで来たな」

ねぎらいの感情が籠もっていないと丸分かりの口調だった。しかし、苑海は気にする風もなく微笑んでいる。隣で気難しい表情を解かなかった曹達は、ようやく言葉を発した。

「若君、久しくあられる。……だが、再会を懐かしむのも程々にして、申し上げたい」

彼はそこまで言うつと、ふと真横から小さな笑い声が聞こえてきたので口を止めた。曹達は自身より年嵩の老人を見る。声の主である苑海は、卓の上に置かれた湯飲みに手を伸ばしていた。

「興趣を添えてから、本題に入るのもよからうて。曹達殿は氣短^{きみじか}であるな」

綽々（しゃくしゃく）とこたえる苑海に、李慧は言った。

「私も気の長いほうではない」

「ふむ……」苑海は声を漏らした。

李慧は部屋の入り口で控えていた伍祝と博朴に目配せをする。心得たように、彼らの行動は迅速だった。隅で茶器の準備をしていた蓉秋も、李慧の分の茶を淹れる暇もなく二人と共に部屋を辞した。

「二対一では、老いぼれに勝ち目はありませんのう。仕方ない」

そう言つて苦笑した苑海は、卓の上の茶をひとくち飲むと、笑顔を消した。途端に隙のない顔つきになった彼は、口調も変える。

「まずは、こたびの拝謁のかないました事、まことに重畳^{うちやうじやう}にございます。若君におかれましては、略儀と相成り申した無礼を、ご寛恕いただきます、恐縮に存じ上げます。また、重ね重ねの慮外^{りよがい}にございますが、この場にて言上^{いじやう}したき事をお許し頂きとうございます」

「結論から言え。それが早い」延々と続きそうな口上に李慧は呆れ、それだけ促した。

「……では」苑海は一息おいた。「内示をあずかっております……仙籍を許す、と。若君には今一度、お戻り頂きたく……」

苑海と曹達は、何の反応も見せない李慧を待つ。李慧は暫くして、声を出した。

「時宜^{ときぎ}、か」

彼の言葉に、苑海は大いに肯いた。

「仙籍をお許しになられるという事は、若君の果たされる功にお父上がご期待なされている証でありましょう」

鷹揚と構える苑海に、李慧は一度目を閉じ、ゆっくり開けると言った。

「私の考えが変わった、と言ったら……貴様ら、どうする？」

その言葉にすぐさま反応を見せたのは、曹達のほうだった。

「何を」と、眉根を寄せて声を上げた曹達に、「ほう」とだけ苑海は漏らす。

「つまりは、ここで余生を過ごされる、という解釈で合っておりま
すかな？」

苑海の問いに、「そうであるなら？」と、李慧は挑発的な態度を示した。

「若君。ならば、何の為の……！」

憤然とする曹達は、怒りのあまりに言葉が継げない。そこへ、やけに冷静な声が響いた。

「匡濟^{きやうさい}すべきと、思われませぬか」苑海は李慧を見た。

李慧は答える。

「ではきくが、いたずらに民を陥れる我々は何と申し開きする」

「なるほど。しかし、お忘れですか。もともと全てが必定であり
ましたぞ。今しがたのお言葉が、私共に対する戯れに過ぎぬなら結
構ですが、……若君。貴方様を含めた、その周囲の者の去就^{きしゅう}はいか
がお考えかとお尋ねしたい」

苑海は淡々と警告した。それは脅しである。李慧の発言如何によ
つては、このままでは済まない事を指していた。進退を握られてい

るのは、彼だけではない。

曹達は興奮冷めやらぬ口調で、李慧に言った。

「ここで燻ぶっているなら斃^{へいふ}仆と変わらぬ。父君の為に、功を挙げ尽くすが子の命^{めい}であろう。その名を冠するは伊達だけか」

「安易な挑発に乗るほど、私は愚かだと見られているわけだな」

李慧は鼻白んだとばかりに、嘆息してみせる。

「そうも言っておられませぬ」まるで伝播したように苑海も溜め息を吐いた。

憂いを帯びた顔をする苑海にかわって、曹達が李慧に説明した。

「このほど賦役^{ふえき}の見直しがされた。それに伴い成人の年齢も引き下げては、益々の苛^{かれん}斂に勤しむ愚策^{ろくさく}ぶり。民を弄^{もつ}するも甚だしい」

憤懣^{ふんまん}やるかたないといった顔の曹達を前に、李慧は眉根を寄せて目を閉じた。

この東青国では、成人男女が税を納めると規定している。それは主に労働からなる賦役と金銭からなる税収で成立していた。賦役における労働は、子供を頭数に入れてはいないが、子供と定義される年齢を引き下げたのなら、世帯あたりの成人人数が増え、結果、税の負担が増える。

李慧が目を開けると、目尻に幾重にも皺を湛えた、けれども圧迫感をもってこちらを見据える視線と重なる。

「……お父上は心待ちにされておいでですぞ」

そう告げた苑海の口調と表情は、先程より幾分か軽くなっていた。

「重祚^{ちゆうそ}召される余力はあるのか」李慧は尋ねた。

「再びの復権は叶いませぬ。いえ、叶ったとしても、長くは持たぬと」

苑海の言葉に、曹達は継ぎ足した。

「仙籍を……昇殿を許すというのは、その為だ」

「我らに、呼ぶ機会を与えて頂きたいものですな。皇嗣^{こうじ}、と」

畳み掛けるように口にした二人の発言に、李慧はますます眉間に皺を作る。黙ってしまった彼に、色好い返事を期待して苑海は言い

放った。

「はつきりと申しませうか。弟君を排され、皇位にお就き下さいませ、……殿下」

第四章 三節

室内は気味の悪いほど静まり返っていた。そのなか、李慧は口元を歪めてうつすらと笑う。

「……篡奪^{さんだつ}せよ、か」

不穏当な言葉を吐く彼に、苑海は肯定を示した。

「先帝であるお父上より譲位されるべきは、弟君にありませぬ」苑海は声を和らげて、まっすぐと彼を見る。「若君、どうかご果断を」

李慧は返答せぬまま、瞑目した。

暫くすると、風の音が耳に入る。窓は軋むような音を立てていた。それを聞きながら、果たしてどれくらい話し合いをしていたのだろうか、彼は考える。意識をめぐらし辺りを見やると、西日が部屋に入り込んでいた。夕刻か……と、ふと思い、客人二人を見やると、苑海が口を開いた。

「さて、言いたい事だけ言えて、老いばれはこれ幸いですが、……ちと、満足には及びませんのう」

苑海は、余裕を振りまくように晴れやかな笑みを浮かべている。

李慧は彼を眺めた。

「酒でも飲んで夜を明かせ。一晚ほどなら持て成してやろう」

「それは、それは。ありがたきお言葉。若君のお心遣い、老いばれは感涙にございます」

大仰に礼をとった苑海は、顔を上げると続きを口にした。

「ですが、酒も涙も、皇宮にて惜しみなく費やしようございますな」意地の悪い笑みを張り付けた老爺は、飄々と言つてのける。

李慧は立ち上がった。

「ならば、船に待たせた連中と帰つたらどうだ」

一番近い人里でも、山を越えて更にそのさき遙かな距離にある。苑海と曹達に随行する者達も含めれば、船を使用しているだろう。

卓から離れて窓に向かう李慧の背中に、苑海は芝居がかった口調

で呟いた。

「長旅で従者も疲労がたたっておりまずゆえ、そこを追い出すとは……なんと殺生な」

「……催促か」

「はて」

ぽつりと聞こえた声に李慧は観念し、口の達者な老爺との言い合いを早々に諦めた。

「分かった。連れてきた従者共々、ここに泊まれ。そして疲れを癒したら、帰れ」

よいか、と振り向いた李慧に、苑海はとぼけた顔をして湯飲みを覗き込んだ。

「満足するまで、居座りますかな」

李慧は嘆息した。引き下がる気配を見せない苑海は、手に負えない。李慧は彼の横にいる曹達を見るも、こちらも似たような性分であつた事を思い出し、更に大きく息を吐いた。

「……頑固者どもが」

ようやく搾り出した彼の言葉は、苑海と曹達を屋敷に招き入れるに等しいものだった。

「若君。お世話になりますぞ」

同じ言葉を数ヶ月前に聞いていた。その時は心地よいものであつたが、言う人間でこれほど違うものかと、苑海の勝ち誇つたような笑顔を前に、李慧は密やかに呆れ果てた。

屋敷の主人から了承を得た苑海と曹達の行動は速かった。苑海の指示で曹達が従者ら三人を呼びにいき、あつという間に部屋を確保すると、荷を解く。

手伝いの為に部屋に寄越された蓉秋も出る幕がなかった。早速くつろいでいる二人の姿を前に、李慧のそばに控えた伍祝は苦笑しており、彼に耳打ちする。

「住み着く勢いですね」

それには李慧も同意見である。

伍祝の言葉が聞こえていたのか、苑海は声をかけた。

「ご返答によつては喜び勇んで出て行く所存でありますぞ」

李慧と伍祝が注視するなか、苑海は続けた。

「しかし、覚悟の足りぬ内になされる決意など、役に立ちませぬ。

本来、内示ゆえに速やかな恭順を示すべきではありませんが……」

苦言を呈する苑海に、李慧は、ぽつりと呟いた。

「心とは別のところにあるだけだろうな」

頭では理解していても首肯できない、その自身の姿に李慧は自嘲した。

佐保は、自室で考え事に勤しんでいた。

屋敷に入る前に李慧と別れた彼女は、玉蘭に連れられて部屋に戻っていた。来客という話題に興味を示した佐保は、玉蘭に尋ねようとしたが、何をどうきけばよいのやら……と悩むうちに、質問する機会を逸した。

客についてもだが、もう一つ、疑問に思う事がある。

（許す……って、何を許すんだろう）

玉蘭が李慧に告げた言葉を思い出そうとした佐保は、しかし「許す」しか浮かばずにいる。彼女がそうして頭を悩ませていると、「おい」と聞きなれた声がした。

「立木佐保」

横を見れば腕組みをした飛泉が立っている。すっかり彼の事を忘れていた。そういえば、夕方に字の勉強をみってくれる約束をしていたのだ。先ほど部屋に迎え入れてからそれきりだった事に気づき、頭を切りかえた。

「いい加減にフルネームで呼ぶの、止めてくれませんか」

「ふるね……？ 何だ、もう一度言え」飛泉は困惑げに言う。

佐保は大概、彼から「お前」または「おい」と声をかけられ、たまに「立木佐保」と呼ばれている。その呼び方の訂正を求めたのだ。

仲良くしようと心がけているのに、彼は全く親しくする気はないらしく、ここ半年の間での友好的な雰囲気作りは一切実らないでいる。佐保は嘆息した。返答を待っている飛泉に、彼女は端的に伝えた。「呼ぶ時は佐保でいいですって言っただけです」

「嫌だ」彼は組んでいた腕を解いて即答する。

「……あ、そう」机の前に立った佐保は、椅子を勢いよく引いて座った。

物言いたげな表情の飛泉は、彼女の背中を見やってから机の傍まで来た。

佐保は筆を用意する。しかし、いざ字の練習を始めたはいいが、どうにも李慧と玉蘭のやり取りが気になって仕方ない。それが表情にも出ていたのか、始めて僅かしか経たないうちに隣から溜め息が聞こえ、佐保は我に返った。

「飛泉さん」

無表情のまま黙っている飛泉の内心は窺い知れない。佐保は彼の顔を眺めながら、ぼつりと口にしていた。

「許すって……」

……何か罪でも犯したのだろうか。

そう言いかけていた言葉を咄嗟に飲み込むと、首を振った。

「あ、やつぱり、いい。いいです」

佐保の姿を見つめていた彼は「李慧様か」と、少しして口を開いた。言いあぐねている佐保の表情から、彼女の真意を得た飛泉は不機嫌そうな目つきだったが答えた。

「李慧様なら問題ない。だから心配の必要はない」

肝心なところが何一つ分からない言葉にもかかわらず、李慧に信服している飛泉の凜とした声音を聞くと、佐保はどこか安堵した気分になった。

第四章 四節

早朝、佐保は一驚を喫する事態からこの日が始まった。一夜にして、屋敷が賑やかしくなっている。暮秋と玉蘭は忙しく、手の空く暇もないようだった。その原因は来客によるものらしい。佐保は、来客の人数をてつきり一人か二人と思っていたが違ったようだ。彼女らの仕度している食事が、明らかに佐保の予想していた数より多かった。

また、通った渡り廊下から庭を覗き見れば、伍祝の他に体格のよい男と壮年の男がいたり、日課となった畑の水撒きを終えた時には、伍祝と一緒にいた者とは別人の男も見かけたりしていた。

佐保はその誰に対しても、気付かない振りをして自室に引っ込んだ。屋敷に住む者以外で初めて見たこの世界の住人に、落ち着かない気分になった。部屋から出るのも躊躇を覚えた彼女は、しかし、昼を過ぎ玉蘭が様子を見にきた所をつかまえ尋ねた。

「あの、私、何かお手伝いする事ないでしょうか」

玉蘭がこうして来たのは、自分を気にかけてくれているからだ……と分かっている。だが、自分を構ってもらえる状況は、少しの気分のよさ以外にも恥ずかしい気持ちで彼女に抱かせた。

佐保の申し出に、玉蘭はホッと溜め息を吐いて微笑を浮かべた。

「ああ、丁度よかった。栄古殿をお見かけしたら、李慧様のもとにお連れして欲しいのです。お願いできますか？」

佐保が肯くを見ると、玉蘭はそのまま忙しげに踵を返して行ってしまった。

佐保は彼女が去るのを見届け、栄古を探し始めた。そういえば李慧が何処にいるのか彼女にきくのを失念していた佐保は、栄古を探し当てたら次に彼を探さねばならないのかと思った。

佐保は、いくつかの庭の中でも屋敷の門から離れた場所にあるほうへ向かった。人のいる場所ならば、誰かが栄古を見かけていても

おかしくないが、屋敷内を歩き回っている筈の玉蘭の目に付かないという事は、その庭である可能性が高かった。

案の定、栄古はそこにいた。佐保は歩いて近寄る。木の下で、悠々と寝転がっている姿は大きな猫のようで、つい頬が緩む。距離を狭めだすと、瞬く間に木陰から双眸が覗いた。

「ごめんなさい、起こしてしまいました？」佐保は声をかけた。

「いや、目を瞑っていただけだ」

栄古は、のろりと起き上がる。佐保は、栄古の傍までよった。

「玉蘭さんに頼まりました。栄古さんを、李慧さんのところまでつて」

佐保の説明に耳を傾けてはいるが、栄古は返事をしない。彼女が待っていると、暫くして栄古は反応を示した。

「……嬢、退屈しのぎに外へ行かぬか」

疎通しているとは思えない返答に、佐保は寸時まばたきを忘れ、その提案に戸惑った。

「ええと……」

二の句を失った彼女に、栄古は体軀を一度震わせ、視線をじつと向ける。

「よいよい、気にするな。すまない。……そうだな、本意ではないが、李慧のもとへ行くか。どうせ、狸の催促に負けて我を差し出したのだろうよ」

佐保の隣に並んだ栄古は、前足を踏み出した。

「狸と熊と、その手下ご一行様だ。まったく、退屈この上ない」

そう煩わしげに呟いた栄古を、佐保は初めて見た。

「おや」廊下を歩いていた苑海は動きを止めた。「どこからお連れになったのか」

彼の視線の先には、旧知の虎と、見知らぬ少女がいた。

「随分と若い娘子ですな」

何とはなしに、そう口にした苑海は前に行く李慧を見た。ちょう

ど虎と少女を待つように立ち止まった李慧は、苑海に横顔を晒していた。

苑海は虎を眺めやる。次に少女に視線を移した。素振りだけを見れば、虎の隣を歩く少女が使用人とは思えない。しかしながら、奴隷のようでもなく、かといって良家の子女というわけでもなさそうである。

苑海は再び李慧を見る。そして緩慢な仕草で、自身の顎鬚に手をやった。

「若君。……使用人、ではありませんか？」

含みを持った言い方に、李慧は忌々しげに苑海を見た。

「邪推するな。それ以上は侮辱ととるぞ」

「では、如何^{いか}な仲でありましょう」

「関係なかるう」李慧は素気なく言った。

客人である、障りのない返答をすればよいものの、それをしなかった彼に苑海は楽しげな笑みを浮かべた。苑海は再び向こうを見る。あちらと視線が合ったので、彼は虎と少女を手招きしてみた。ほどなくして近くにその姿を臨むと、苑海はまず虎へと挨拶をした。「栄古殿、久しぶりにございます」続いて少女の方にも声をかける。「娘さん、初めまして。苑海と申します」

急に話しかけられた彼女は、緊張しながら口を開いた。

「初めまして、こんにちは。立木佐保といいます」

そう言っただけで頭を下げた。苑海はそれを見ている。彼は佐保の名に、おや、と思った。しかし、聞きなれない人名の「音」に、そして今までにおいて幾度か耳にしていた特徴のある「音」に、すぐさま彼女が何者であるのか理解した。

「あの……」

沈黙して見据える苑海の視線に、佐保は困惑しながら小さな声で言った。

彼は、なるほど……という呟きの後に、佐保に微笑む。それから、合点のいった顔で李慧へ振り向いた。

「こちらの娘さん、猛獣使いですか」

「たわけ」すかさず栄古が呟いた。

苑海は笑うと、あらぬ方向を見ながら白々しい態度で口を利く。
「いけませんなあ。近頃、耄碌もろろくとして耳が遠い。はて、栄古殿の言うた事がよう聞こえぬ」

「無駄口ばかりの新参の狸は、歓迎せずともよかろう……と言外に含めただけだ」

「ならば、薄情な虎とは仲良く出来ませぬわ」

栄古と苑海のやり取りを、佐保は珍しいものでも見るような目つきで、しげしげと眺めた。それに気付いた苑海は、李慧と栄古に視線を滑らせ、そうして最後に彼女を見た。

「あ、ごめんなさい」

無遠慮に眺めすぎたと感じた佐保は、咄嗟に謝った。

「なに、娘さん、気になさらず。いつもこのような仲なのですよ。

私共は、……そうですな」

ふと思案気な顔を見せた苑海は、次には満面の笑みを浮かべて言った。

「茶飲み友達と申しておきましょうか」

栄古も李慧も否定しなかったが、到底納得している顔ではなかった。

第四章 五節

夕闇も過ぎて更けゆく夜の中、月の出る空を眺めていた李慧を佐保は見つけた。

客人の来訪から数日、彼がときおり難しい顔をしていたことに彼女は気付いていた。しかし今や彼の表情は何の曇りもない。

今朝、李慧に話す事があると言われていた佐保にすれば、今の彼は何らかの憂いが晴れているように思える。

李慧は手に小さな明かりを持っており、それは彼の周囲をぼんやりと浮かび上がらせていた。佐保は近づいた。

李慧は彼女を認めると、誘い出すように中庭のほうへと向かう。彼の足取りを辿って、佐保はついていく。少しして立ち止まった李慧に、彼女もそれに倣った。互いに喋らず、相手の出方を待つ間に時間は過ぎていく。しかし、背を向けていた彼は振り向いた。

「頼みがある」

月を背にした彼の輪郭は、その光に縁取られていた。佐保はぼうつと眺め、沈黙している。

「やらねばならぬ事が、迫ってきた」

李慧は緩慢な調子で、更に続きを口にした。

「急だというのは分かっているが……、皆ここを出なければならなくなつた。これはもう決定事項だが、……佐保、私が懸念しているのはお前の事だ」

正直、理解が追いつかず、佐保の頭は混乱した。

「あ、あの……」

ようやく口を挟めたのに、自分が何を言おうとしていたのか分からず、言いよどむ。色々と言いたいことが纏まらず、結果なにも喋れない。

これからどうなるのか、これからどうすればいいのか。

しかしそれを考える以前に、一つだけ合点のいった事があった。

佐保は、苑海と曹達に会ったび妙な感覚を得ていた。それは二人の視線だった。悪意もなく、善意もない、けれど特別な意を持って向けられる、視線。思い上がりではない。その確信は先程の彼の言葉で決定的になった。

「佐保。お前自身、これからどうするか希望があるだろうが、……出来ることなら」

李慧は続きを言うのを躊躇うように口を閉じた。佐保は思う。この先きく答えはここ幾日の、彼の抱く憂いの一部である筈のものが導き出した宣告だろう。

じつと動かず立っていると、寒気を覚えた。佐保には、よい予感など全くしない。目の前の李慧の顔を見ることができず、彼女はそつと両手の指を腹部の前で合わせて、彼の言葉を待った。

やがて、李慧は言った。

「……ひとり、市井で暮らしてはくれないか」

居候の身に「いいえ」も、「いやだ」も言えない。理解と反発を置き去りにして、佐保は静かに頷いた。

愚かにも、都合よく思っていた。この生活が続くのでは、と。

ずっと屋敷にいられるわけがない、それは、ここに住み始めてから何度も何度も意識してきた事だったというのに、いざそうなると佐保の心は沈む。

頼れるものは自分だけと分かっていた筈だが、彼女はその足りなかった自身の覚悟に唇を噛んだ。鉛のように重くなる気持ちを潜ませて、李慧に尋ねる。

「いつ……、それはいつですか」

「次の新月には、ここを出る」

佐保は月を仰ぎ見る。そこには綺麗な丸い形があった。彼女は俯き、目を伏せる。

李慧は持っていた手燭を佐保に渡した。一瞬間、触れ合った彼の指先は冷たく、弾かれたように佐保は顔を上げる。

「すまない」

そこには、心底そう思っているような、彼の硬い表情があった。佐保は首を振った。李慧は惜しむようにその身を翻す。佐保は離れていく彼の背中を見ていたが、やがて手燭へ視線を落とすと、ひとりごちた。

(……ほら)

「やつぱり、ひとりじゃない」

小さな呟きは夜の中に掻き消えた。

手燭を渡せば、月明かりだけでは心もとない。しかし、心もとない、と思っている事柄はそれだけではない筈だと李慧は自問した。中庭を出た彼は、そこから一番近い建物の壁を曲がった所で立ち止まる。夜の暗さに手伝わせて、物陰に潜むようにしているその姿に眉を動かした。

「二人して、悪趣味か」李慧は、低い声で咎めた。

彼の注意に、月光の差す中へと数歩進んだ苑海と曹達は、悪びれもなく姿を晒した。

中庭からこちらへは見難いが、逆にここからはよく覗けるだろう。静かな夜だ、耳を澄ませば多少の話し声くらいは聞こえている筈である。

「若君が洩られる理由は、ひとえにあの娘さんでしたか」

覗き見を肯定したような言葉の上に、苑海は悪びれることもない。その事実、李慧は気が立っている内心を自覚した。

「あまり私に構うな。今は気分がよくない」

それだけ言つて、自室に戻ろうとする。

どうにも自身が解せない。何をこれほど苛々としているのか。

彼は早くこの場を去りたかった。しかし、二人の横を通り過ぎてすぐ、その足を止めるように声が飛ぶ。

「どこまで、お話しになられた」

尋ねた曹達に振り返ることもなく、李慧は告げた。

「彼女は何も知らない」

言ってから、ふと李慧は振り向いた。苑海と曹達の向こう側で、明かりが揺れて離れていくのをすぐさま見つける。さきほど彼女に渡した手燭だ。

佐保はこちらに気付くことなく、彼女の部屋の方へと向かっていくようだ。李慧の目は、その明かりが視界から途絶えるまで追いかけて、彼女の姿を捉えていた。

「……少しばかりよい夢を見ていた。……叶えたい願望の夢、か」
彼は、自嘲気味に呟いた。「しかしどうやら見すぎたようだ」

「お目をお覚ましになられた……と？」苑海が声音を落として尋ねる。

李慧は首を縦にも横にも振らなかった。

「存外に、……心地がよかった」彼はただ静かに、そう零した。
「殿下」

衣擦れの音がした。李慧は苑海と曹達を見る。二人は地に膝を折り、叩頭くわうとうしていた。

「身命惜しまず、御身にお仕え致します」

苑海の声が響く。

忠誠の誓いを示す二人の姿を、李慧は淡々と見下ろしていた。

第四章 六節

佐保は寢台の中で膝を折って丸まっていた。布団を頭まですっぽりと被り、体を隠している。その中で彼女は、じわじわとこみ上げる不可思議な感情を堪えていた。

悔しいのか、腹立たしいのか、悲しいのか、寂しいのか、分らないほど様々なものが去来して圧迫している。息の詰まりそうな感覚は、翌朝も続いた。

佐保はその日、玉蘭と洗濯物をたたみながら、これからのことを彼女と二人で話していた。明朝、玉蘭と伍祝が一足先にここを発つという。彼女が言うには、最終的にみな、亢県の中でも一番大きな街に行くらしい。川と山に囲まれた風景しか見ていない佐保にとって、どのような街があるのか想像もつかなかった。それを伝えた彼女に、部屋を出た玉蘭は地図を持って帰ってきた。机に置いた地図をもとに説明が始まった。

そもそも亢県は、徐郡じょくぐんと呼ばれる大きな括りの中の一つの県に過ぎない。つまり、国があり、郡があり、県がある。玉蘭は、ときおり地図を指さして、亢県の中の現在位置やこれからの行路、主要な地名も交えて話した。佐保は相槌を打っている。

「亢県でも、東に向かえば徐郡の中で一番に栄えている街があるんですよ」

あらかた話を終えると、玉蘭は地図を机の隅にやって、乾いた洗濯物と裁縫道具を手にした。衣服のほつれを直すようだ。佐保はその横で、天日に干して乾かした幾枚もの木綿の生地を畳む。

「郡治ぐんちや太守たいしゅの公邸があるところですから、大きな街です。佐保さんにはそこで暮らして貰うよう、手配しております」

「郡治？ 太守？」佐保は畳む手を止めた。

玉蘭は手元から目を離さず言う。

「郡治は郡の政務を執り行うところ、太守は郡を治める宰吏さいりの長を
そう呼びます」

ようは役所関連があり、そこには郡の権力者　たとえるなら知
事のような人なのだろうか　もいるのだと、佐保は納得した。

「色々と心配事もあるでしょうが、郡治での手続きも住む場所も、
佐保さんが困らないようにと李慧様より仰せつかっております。ど
うぞ、安心なさって下さい」

「はい」

佐保の微かな返事に玉蘭は顔を上げた。

「私共も街に逗留する予定ですから、すぐに別れるということはあ
りませんよ」

そう言つて、にこりと笑つた玉蘭に佐保は頷くしかなかった。

逗留というからには、いつかそこを出るのだろう。佐保は、彼ら
がどこに行つてしまうのか尋ねたかつたが、きけなかった。玉蘭も
最終的な目的地を自ら明かさないうもりなのか、それ以上は何も言
わずにいる。佐保は休めていた手を再び動かし始めた。

馬で陸路を進む玉蘭と伍祝が発つて数日、いよいよ出発が明日に
迫つたその日の夜、荷造りも一通り終えて体を休めていた佐保は、
茶器を持ってきた蓉秋の一言でとある事を知つた。栄古だけ、皆と
別れるというのだ。

「なんで」

半ば独り言のように呟いた彼女に、蓉秋は困つた顔をする。

「なんでつて、そりゃあ……人目についちまうからね……」

虎の姿では街中にはいられない。しかし、栄古も共にする方法は
あるはずだ、と佐保は思った。蓉秋は、彼女の言わんとしているこ
とを読み取つたのか続けて口を開く。

「栄古殿が決めたんだ、仕方ないさ。李慧様もお許しになられたし。
……だからお別れだけど、色々と落ち着いたらまた会えるかもしれ
ないね」

諭すような口調に、佐保は納得しかねる表情のままゆっくりと頷いた。

暫くして、二人分の茶器を盆にのせた蓉秋は部屋を出て行った。佐保も時間をおいて部屋を出る。

ふらふらと歩いていると、庭で栄古を見つけた。そばには李慧もあり、暗がりのなか並び佇んでいる。声をかけるべきか迷ったが、向こうから話しかけられた。

「嬢……如何いかした」

栄古のいつも通りの声音に、佐保は無言で首を振り、彼らに近寄る。ききたい事が多すぎて、佐保は口を開けずにいた。李慧も栄古も、彼女の反応を待っている。じっとこちらを見つめる視線に困りきった表情を浮かべた彼女だが、やがておずおずと切り出した。

「栄古さんが、その……お別れって聞いて……」

そこで言葉を切らした佐保に、栄古は彼女の体へと擦りつけるように触れてきた。

「言わずじまいにするつもりはなかったが、遅くなってしまったな。だが案ずるな、いつか再び会おうぞ」

気休めかもしれない約束でも、佐保は嬉しく思った。肯定のかわりに、彼女はしゃがみ込んで栄古の首に抱きついた。途端に栄古は耳をぴんと立てて、面白そうに呟く。

「これは役得であるな」

佐保が顔を上げると、李慧がじつとこちらを見下ろしていた。どきりとした彼女は栄古から腕を解いて立ち上がった。

「まだそこにおったか。無粋な輩よ」

「浮かれた虎は物珍しく離れがたい」

からかう栄古に、李慧は笑ってそう言った。佐保も表情を和らげた。小気味よい返答をする李慧は以前に見た光景に似ていてどこか懐かしい。初めて李慧に会って、虎に食わせると言われ栄古が現れた、あの時を思い出させた。

柔らかな表情の李慧に、佐保は数日前から抱く疑問を口にした。

「李慧さん。これからのことって、李慧さんにとってよくない方向に向かうのですか？」

佐保の質問は彼だけではなく、栄古も彼女を見つめる結果となった。

「何故そう思う」李慧は尋ねた。

「許すって、言っていたので……あの時」佐保は答える。

彼女の言う「あの時」に思い当たったのか、李慧は緩やかに息を吐いた。だが彼よりも栄古のほうが、佐保へと尋ね返す。

「もしや仙籍のことか」

「そう、そうです」佐保は肯いた。

そのような言葉だった気がした。彼女は声には出さず、胸のうちで反芻した。便利なのは頭に字まで浮かぶことだ。そうして佐保は今度こそ記憶した。彼女は李慧を見上げる。李慧は苦笑を浮かべており、少しして答えた。

「それは私の決めることではない。いずれ余人が判断するだろう……

……よいか、よくないか、と」

「自分のことなのに？」思わず、首を傾げて難しい顔をする。

答えぬ李慧に、佐保は更に困惑した。彼女は李慧の顔から視線を外して、それを地面にさまよわせながら呟いた。

「仙籍という言葉って、その……犯罪とか、釈放とか、そういう類いの事と関係ないですね？」

佐保の言葉に、李慧と栄古は互いを見合った。沈黙しきった場に堪りかねた佐保は、矢継ぎ早に言葉を並べた。

「いえ、あの、私の勘違いだと思っんです。でも、気になって。仙籍を許すって言うから、何かその……許すって言う……あの、ごめんなさい。……私、てつきり李慧さんが犯罪者かと思っってしまった……」

しどろもどろの佐保の声は次第に小さくなっていった。未だ続く沈黙に、彼女は少しだけ顔を上げて様子を窺う。すると声が聞こえた。見ると、李慧が声を立てて笑っている。

佐保は驚いた。目を見開く彼女に李慧は楽しげに告げた。

「お前は私をおかしくさせるのに長けている」

なお驚き顔を解かない彼女は、李慧を見たままぼんやりとしていた。

「よい意味で言ったのだ、佐保」

「あ、……そうですか」

佐保は李慧を見ながら、気拔けたこたえしか返せなかった。先程の李慧の表情の所為だ、と彼女は思った。じっと見ていると居心地が悪くなり、また下を向く。

李慧は笑い声を引っ込めて、宥めるような表情をした。

「佐保」

呼ばれた彼女は顔を上げた。

「いま私は何も答えない。それがお前の為であり、私の為でもある」その言葉ひとつで、佐保は何も口を利けなかった。これでは問えないも同然だ。

李慧という人間を知って彼と距離を縮めたい。しかし、踏み込めない。今しがたの彼の言葉は自分を拒絶しているようだった。佐保はそう思った。漠然とした不安と共に、彼女は李慧の目を見て頷いた。本心を隠すように小さな笑みを浮かべた。

何故いま、こんな事で自覚するのだろう。佐保は、目の前の男に對して熱をもつような感情を抱いている自身に気付いた。

第五章 一節

街を目指すために、佐保は李慧と船に乗り込むことになった。行き先は白水はくすいという所であった。船に乗るのは、元よりそれに乗ってきた苑海と曹達、その従者達だけで、蓉秋と博朴、飛泉は別の迎えが来るまで屋敷に待機である。

この場所ともお別れだと思つと、佐保はもの悲しくなり、川までの道のりを何度も振り返つた。見送りに隣を歩く飛泉は、その度に「忙しない奴だ」と言い、仕舞いには彼女の後ろを陣取つて歩く。振り向けば視界を占めるその姿に、佐保は後ろを見るのを止めた。すると笑い声が起こつた。博朴が飛泉をからかっている。

「我が兄は、たまに可愛いことをするね」

「うるさい、どこかへ行け」

「口が悪いな」

「お前は根性が悪い」

飛泉のいつもの話の落ち着け方に、博朴の苦笑する声がした。後ろのやり取りに佐保も密かに笑つた。

川岸に辿りつくと、そう大きくもない船が見えた。予想はしていたが、船の材質は木造だった。常識であつた鋼鉄技術はことは段違いなのだと思ひながら、佐保は立ち止まつた。視線の先には李慧と栄古、それに蓉秋が立っている。苑海たちは既に船の上だ。

最後の最後とばかりに、彼女は栄古をぎゅつと抱きしめる。

栄古は頬をすり寄せた。「達者でな。また会おうぞ」

はい、と返事をしようにも、喉が詰まって声にならない。彼女はひたすら頷いた。

佐保は栄古から離れ、立ち上がる。博朴と別れの挨拶をしたあと、彼はこう尋ねた。

「よろしければ兄にも、抱擁をお願いしても？」

飛泉はぎよつとし、佐保も感傷的な気分が吹き飛んだ。

「何だ、それは！」飛泉が剣幕を露わに、声を張り上げる。

「むきになつて。素直じゃないなあ」博朴はけたけたと笑った。

皆と街で会う約束を再確認したあと、李慧と佐保は船に乗り込んだ。じつとこちらを見つめて送り出してくれる視線に、佐保は手を振って応えた。

目的地に向けて、船は進むばかりである。

船の上から厚い雲に覆われた空を見上げるのに、手をかざす必要もなかった。佐保は薄墨うすすみの空を眺め、次いで船べりに寄った。舷側げんそくを覗き込むように下を向くと、喫水線きつすいせんが揺れている。

陰りを孕んだ川面のたゆたいと小さな飛沫を何とはなしに眺めつつ、川岸の向こうへもときおり目を向けた。続く景色は川と木々ばかりだ。彼女はまた川の流れを見下ろした。

佐保の隣には李慧がいた。

「辛い思いをさせるな」彼は言った。

「いいえ」佐保はまるで川に返事をするように答えた。

内心は皆と別れることも辛い、せつかく慣れてきた環境から離れることにも参っている。知らず溜め息が零れた。

「すまない」

隣から聞こえた李慧の呟きに、顔を上げた佐保は微苦笑を浮かべて首を振った。彼がそう発言したのは、慰める言葉が見つからないための発言だと理解している。

「李慧さん」佐保は話しかけた。「この国の街ってどんなところですか？」

とにかくどんな会話でもいい、少しでも多く喋って、他愛もない話を記憶に留めたいと、佐保はその気持ちに忠実に従った。

船上で日の入りを見る頃、佐保はぐったりとしていた。乗馬において経験したものがここでも発生し、まさかそれよりもひどいものだとは思っていなかった彼女にとって、船酔いは人生初の経験だった。

た。佐保は自身の体力を過信していたが、乗船して時間も経たぬうちに吐き気と頭痛に襲われ、目を閉じて横になってしまう。

それを見るに見かねたのは李慧だった。船に揺られて日も浅いうちに、荷の調達をするために目指している一つ目の船着場から陸路で進むと変更した。これに反対したのは、曹達と佐保自身だ。李慧がなぜそのような選択を口にしたのかは、彼女が一番知っていた。自分のせいであると分かっていた。だからこそ、佐保は無理を押しでも船に乗ることにこだわった。だが李慧は「降りる」の一点張りで、話し合う余地すらない。静観していた苑海も好々爺然とした顔つきで、頑固者に従うほかないと、陸路の提案を受け入れた。ここまでくれば佐保の出る幕はなく、ひたすら申し訳なく思いながらも何も言えなかった。

頼りない足取りで、佐保は甲板から空を眺めた。見渡す限り一面は朱色を刷いている。そのまましばらく、紅霞こうかの空を見ていた。夕焼けで雲までも燃えるように染まることをそう言うのだと、李慧に教えてもらったのだ。

李慧は彼女のそばに居続けた。気分の悪い人のそばにいて疲れないのかと尋ねれば、彼は静かに笑うだけだった。普段から言葉少なな彼とこうして何もしない時間を共にいることを思うと、屋敷で過ごしていた以上の親密ぶりではないかと錯覚させられる。

佐保はたまに途切れながらも、体調と時間の許す限り彼に多くのことを話した。気遣いから佐保の世界のことを必要以上に尋ねなかった屋敷の住人達の中では、自ら話す機会も作らなかった。それが今、彼女は積極的に話している。思い出せば辛い気分にもなるが、それでも彼に知って欲しかった気持ちまさが勝った。李慧は、彼女の話に終始耳を傾けた。時に目を細め、時に相槌を打ち、時に返答をする。けれども彼は自身のことを話さなかった。

船で見る日没はまぶしく、佐保は目を閉じる。

「佐保……宵のうちに着く。それまでの辛抱だ」

李慧の声がして、佐保はゆっくりと振り向いた。彼は当然のよう

に佐保の隣に寄った。

「少しよいか」

尋ねた彼に頷くと、船の隅へと導かれた。

佐保は彼を眺めた。茶色い髪が、夕焼けの中で光に染まって見える。男性にしては長い髪を美しいと彼女は心のうちで思った。

「これを」

李慧がおもむろに差し出す。佐保は彼の手元と顔を交互に見た。李慧の手には小さな袋と、彼といる時に幾度か見かけた代物があつた。自分に渡そうとしているのは分かっているが、佐保はどうにも手を出すことができない。

彼は強引に、佐保の手にそれらを持たせた。一見して革の素材に何かが包まれているのが分かる。鞘だ、と佐保はそれを見つめながら頭の片隅で思った。中を確かめると、柄の部分に緑の石が埋め込まれた短剣と、袋のほうには銀、銅の硬貨があつた。硬貨は円形で中央に角型の穴があり、紐が通されている。

「お前にとって刃物とは、調理に使うことが第一だと言っていたな。ならば、それ以外の目的で渡そう」

「でも……」佐保は困惑した。

短剣は物騒なものしか見えないし、硬貨はこれからのことを考えるとありがたいが、どちらもすんなり貰うのは気が引ける。

迷うふうな佐保に、李慧はしっかりとその手に握らせた。

「人は我が身が可愛い」

佐保の手のひらに置いた短剣の上から、彼はそつと手を重ねる。

そしてそこに少しだけ力を加え、言った。

「大事な時に握っていられるなら、それでよい」

短い刀身を隠すように包む彼の手の暖かさを覚えながら、佐保は頷いた。

第五章 二節

船着場に船が係留された。船から降りると、移動は馬車となった。薄い霧に囲まれ視界は明るくない。それでも辺りを見渡す佐保に、李慧は無言で彼女の手をつかみ、幌のついた馬車にさっさと乗せてしまう。

「長居は出来ぬ」彼は佐保に苦笑をまじえて言うと、僅かな荷物を放り込んだ。

すばやい行動に佐保が目を向けていると、周囲の荷物はおろか人も乗り終えていた。彼女の向かいにはいつの間にか苑海が座っており、すでに出発の態勢が整っていた。佐保は老人の迅速な行動に驚いた。気分の優れない佐保に、やれ腰が痛い、やれ膝が痛いと言った船上で言っていたわりには、腰も曲がらぬかくしゃく鬢鑠とした姿で、従者をせつかせている。愛嬌で穏やかなお爺さんと思っていた佐保は、明らかに彼女よりも元気そうな姿を見て首をかしげた。

すると、曹達が物騒な助言をする。

「化け物じみているうえに減らず口だ。相手に疲れたら、茶と偽って一服盛るとよい」

返答に窮した佐保の前で、苑海は笑っていた。本人に丸聞こえである。

馬車は人目を忍ぶように、あつという間に潮の香りから遠ざかり始めた。

見慣れぬ景色を見ようと思っていたにも関わらず、佐保は眠気に襲われた。うとうとし始めれば、瞼を開けていられなくなる。少し瞑目するつもりが、彼女は眠りの淵へいざなわれた。とうとう穏やかな寢息を立て始めた佐保に、李慧は肩を貸した。

しばらくして彼女は起こされた。頭だけでなく体ごと李慧に寄りかかっていた彼女は、急いで姿勢を整えた。

「すみませんでした」上擦った声で、彼に謝る。

「構わぬ。寝心地が悪かったろう」李慧は佐保を見た。「もうすぐ今晚泊まる所に着く」

彼の言うとおり、間もなく馬車は止まった。

「今日はここに泊まります」苑海は幌の隙間から外を指し示した。

荷を降ろし始める従者のなか、佐保も手伝おうとしたが、苑海が彼女を制した。

「引っ付いていなされ」長年にわたり刻まれた皺が、緩んでいる。

佐保は李慧から慌てて離れ、十分な距離をとった。馬車を降りると、二階建ての建物があった。どうやら宿屋らしく、小柄な男が門前で出迎えていた。

苑海と曹達についていた従者の一人が、男に袋を手渡している。

男は袋の口を広げ、中身をあらためた。袋から顔をあげた男は顎をしゃくった。

「いいだろう。奥へ」愛想のない言葉と共に、男が先に建物の中へと消えていく。

従者の一人と曹達を先頭に、奥へと案内された。いくつもの小さな部屋が廊下を挟んで向かい合っている。その一つを借り受けて入れば、粗末な寝台だけがあった。雨露をしのぎ、寝るためだけにあるような部屋だった。

廊下に戻ると、男が落ち窪んだ眼で佐保を見ていた。

「二日後、買い付けの連中が来る。進路は東」ぼつりと、そう呟いている。

言動と、じつと絡まる視線に気味悪さを覚えて、佐保は李慧を仰ぎ見た。

その間に、男は特に何も言うわけでもなく踵を返し去っていく。

男が見えなくなると、苑海は顎に手をあてた。「忠告にしても、仲介にしても、いらぬ親切心ですのう」

李慧が部屋に入るように示しながら言った。

「女の売り買いだ。気をつけるという意味か、二日経てばそのよう

な生業に引き渡せるという意味か……どちらにせよ気分の悪い言葉だ」

人身売買や性産業をほのめかす言い方に佐保はびっくりとした。現実味が湧かないが、男の目を思い出して背筋に震えが走る。

「知りたくもないことだろうが、知る、知らないでは随分違ってくる話だ」

それがまかり通る世界であることを覚えておけということなのだろう。佐保は神妙な面持ちで頷いた。

翌日には早々の出立だった。船酔いはとうに治まったが、体がだるくて頭がすっきりしない。慣れない旅路に早々から疲れているだけだと考えた彼女は、自身の体調を無視していた。若いから無理を出来るくらいの体力ならまだあるし、睡眠をとれば十分に体がもつが、わずかに食が細くなっただけとも自覚していた。

それから幾日も移動と宿で一休みを繰り返して、集落を転々とし、どのくらい走ったのか。幌馬車に座り続けて足やお尻との鈍痛にも十分すぎる付き合いを見せ始めた頃、石造りの門と壁に囲まれた街に着いた。

四方から賑やかな声が聞こえてくる。しばらくすると馬車は止まり、そこから降りた。近くの建物が、馬車を置ける宿のようだった。辺りを見やると木造や土塀があるかと思えば、頑丈な石造りの建物もある。けれど、石造りの二階の窓からは美しい女の顔がのぞいているところが多くて、あの場所が何の目的にあるのかを悟っても、佐保は何も気づかない振りをした。

それにしても活気があふれている。街中には行商もあり、人いきれに体が暑さを感じる。男も多いが、女も多い。黒や茶色の頭髮が多く、肌も東洋人のような色がよく目について佐保は少しばかりほっとした。

苑海が彼女に声をかけた。

「白水に通じる街ですから、それだけ人と物の流れが多い。宿屋も

盛況、よいことですな。しかし娘さんは氣をつけてくだされ」

「私ですか？」

苑海はちらりと佐保を見た。

「宿と言つても目的は色々とありましょう。いつぞやの宿屋の男の言葉を覚えておりますかな。進路は東と。東に行けば、亢かう島のなかで最も華やかな土地に出ます。おそらくは道中に女を拾い増やして、我々と同じ進路をたどるでしょうから……そういう女も多いですし、知らず巻き込まれる女もあります。宿つきの者もありますからな、ふらふらと出歩いていたら、宿の女に会いにくる連中に誤解されま
すぞ」

尋ねたい箇所もあつたが、佐保は不安とともに疑問を飲み込んで
頷くだけにした。

宿屋へと歩きながら、曹達そうたつが提案する。「それより、字を決めた
ほうがよいのではないか」

何かの食べ物なのか、売り歩きうり歩きの声を聞きながら佐保は自分の名前が話題となつたのが分かつた。

曹達の言葉を引き継いで苑海は何度か頷きを交える。

「娘さんのお名前は、明らかに耳慣れないものです。これからの暮らしの中で、わざわざ浮いた点を最初から提示することはごい
すまい」

市井に溶け込むため、こちらの世界にあつた名前を名乗れということだ。仕方ないと割り切るが、どうにも寂しいものだった。

「では、何とつけばいいのでしょうか」まったく名前をつける手立てを思い浮かべられない彼女は尋ねた。

「そうですね、こちらでありふれた名前がよいでしょうな」苑海が李慧へと話を向ける。「いかがなされます」

「すぐには思いつかぬ」

考え込むような李慧の様子を見て、苑海はあっさりと名づけの役を奪つていった。

「ではここは、爺がとびきりの名を。……玉葉たまははいかがですか」

さして考えていない早い提案に佐保は苦笑したが、響きのよさには納得していたので特に異を挟まず「はい」と答えた。李慧がため息まじりに「よいのか」と尋ねたが、せっかくもらった名前をむやみに拒否はできなかった。

名づけたほうは満足顔である。「たいそう可愛い玉葉殿でありますな」

そう言われ、少々嬉しい気持ちになった佐保は李慧を見た。穏やかな表情でいる彼のおかげで、新しい名前も好きになれそうである。きっとここでは玉葉というのは一般的で女の子らしい名なのかもしれない。佐保がそう考えていると、渋い顔でいる曹達の顔が目に入る。すると先ほど玉葉と名づけた人は、楽しそうに口を開いた。

「曹達殿の奥方が同じ名であられてな、これがまた可愛げをどこかに置き忘れた女人にょにんでありましてなあ……男に生まれれば、立派な武人になったでしょうに。いや、今でも夫の首くらいはとれる傑物との噂もあります」

年配の余裕を見せる笑い声の主に、曹達はにらみつけていた。「留守を預かるに不足ない妻だと褒めているなら、老人の減らず口も少ない余生だからと辛抱するが」

「そう言い続けて、我ら三十年の付き合いですぞ」苑海が言った。

新たな名を、曹達をからかうために使われた気がしないでもない佐保は、何とも複雑な心境でこれからお世話になる自身の字を胸に刻みつけ、宿に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0379j/>

異境譚

2011年10月11日21時52分発行